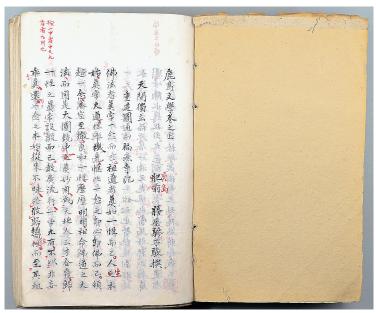
中尾 健一郎 編中尾 友香梨

鹿島文学一甦る地域の文化遺産

佐賀大学地域学歴史文化研究センター



『鹿島文学』(福源寺蔵)



『三嶽山縁起』(福源寺蔵)



谷口藍田像(福源寺蔵)



勝屋明濱像(福源寺蔵)



桂巌明幢像(普明寺蔵)



梅嶺道雪像(福源寺蔵)



古賀精里と草場佩川の漢詩碑(臥竜ヶ岡公園)



旭ヶ岡公園

8	7	6	5	4	3	2	1	144			
桂	桂	桂	桂	桂	桂	桂	独立	鹿島文学	凡	解	
桂巖明幢	桂巖明幢	桂巖明幢	桂巖明幢	桂巖明幢	桂巖明幢	桂巖明幢	独立性易	学	例	題	絵
99幢「月岑皎請」	明幢「題山水」二首	明幢「祐徳院瑞顔実麟大師小影」	明幢「鍋島泉州老檀越小影」	明幢「初祖」	明幢「題讚」	明幢「頌古・見星悟道」	性易「重建円通山福源寺記」	字 德島大機写	1941	選	松
24	24	23	23	23	23	23	21	20	19	1	

目

次

45 桂巌明幢「同七周忌」 31	43 桂巖明幢「栗棘早春」 30	42 桂巖明幢「息心菴即景」 30	41 桂巖明幢「過鉄関上座山菴」 30	讃並作、伝附之、恩遇之深不堪感愧、賦之奉謝云」 30	40 桂巌明幢「州主松平綱茂公之金湯宗門不譲、裴張遐爾所咸知也。茲特命画工描余、陋質賜以題	周示寂之辰、本山第五代高和尚承旨、江府開緘、以示四衆敬述小偈賀之」 30	39 桂巖明幢「黄檗開山先老和尚、先朝特賜大光普照国師之号、而老祖在世蔵而不出。今迄二十三	38 桂巖明幢「普明月岑法子至山、偈以志喜」 29	37 桂巌明幢「鉄関禅人和余歳旦韻用前韻示之」 29	36 桂巌明幢「庚午試毫」 29	35 桂巖明幢「祝華頂老檀越稀年」 29	34 桂巖明幢「暮春登山」 29	33 桂巖明幢「通玄橋 普明十景其一」 29	32 桂巌明幢「途中口占」 28	31 桂巖明幢「遊彦山」 28	別、不勝感激、卒賦一偈、以伸餞意云」 28	30 桂巖明幢「多久茂炬檀越、以宰官身潜心於此道久矣。茲辛酉秋従府君赴于燕都、此日特枉駕告	29 桂巖明幢「贈禅灯賢姪随師上黄檗」二首
		桂巖明幢「栗棘早春」	桂巖明幢「栗棘早春」 桂巖明幢「息心菴即景」	桂巌明幢「栗棘早春」	桂巖明幢「栗棘早春」 桂巖明幢「息心菴即景」 桂巖明幢「過鉄関上座山菴」 輔並作、伝附之、恩遇之深不堪感愧、賦之奉謝云」 董並作、伝附之、恩遇之深不堪感愧、賦之奉謝云」	桂巖明幢「栗棘早春」	世巖明幢「栗棘早春」	桂巖明幢「黄檗開山先老和尚、先朝特賜大光普照国師之号、而老祖在世蔵而不出。今迄二十三 桂巖明幢「栗棘早春」	桂巖明幢「菁明月岑法子至山、偈以志喜」	桂巖明幢「善明月岑法子至山、偈以志喜」	桂巖明幢「庚午試毫」	桂巖明幢「張東洋之」	桂巖明幢「表春登山」	桂巖明幢「墓春登山」	桂巖明幢「通玄橋 普明十景其一」	桂厳明幢「途中口占」	世上 一	桂嚴明幢「多久茂炬檀越、以宰官身潜心於此道久矣。茲辛酉秋従府君赴于燕都、此日特枉駕告桂嚴明幢「遊彦山」

6 断橋実外「寿性院円成実相大師分骨墖」	63 断橋実外「西海道肥前州藤津郡永渓山泰智禅寺鐘銘並序」	62 鍋島直朝「泰智寺祠堂記」	61 鍋島直條「肥前国能美庄誕生院記」	60 龍海実珠「祐徳開山瑞顏大師行業記」	59 泊如上人「興教大師碑銘並序」	58 鍋島綱茂「桂巌禅師小伝」	57 桂巖明幢「法華経石字墖銘」	56 桂嚴明幢「本寺鐘銘 有序」	55 桂巖明幢「撮空軒賢忠居士鎖龕」	54 桂巖明幢「祐徳院瑞顔実麟大師入塔」	53 桂巌明幢「普明寺殿高岳紹龍老居士掩土」	大姉二尊霊」	52 桂巌明幢「大檀越信州太守綱茂公、求薦先考乗輪院殿全機良運大居士	51 桂巌明幢「朝日山安国禅寺掛大鐘」	50 桂巌明幢「万提侍者塔前香語」	49 桂巌明幢「同七周忌」	48 桂巌明幢「同小祥忌」	47 桂巌明幢「朝日翠峰和尚入塔」	4 相麓明幢一同三十三回尼」
43	业序」 42	41	40	39	37	35	34	34	34	333	333	32	殿全機良運大居士・先妣柳線院殿正室寿貞	32	32	32	31	31	

76	75	74	73									72	71	70	69	68	67	66	65
月潭道澂「偶閱鍋島備州太守普明禅寺記喜而作、寄以博粲」	鍋島直條「肥前州藤津郡円福山普明禅寺記」 56	鍋島直條「宝善院寂湛孺人墓誌」 54	鍋島直條「先妣淑人寿性院大師小伝」 53	人見竹洞「三嶽晴雪」 53	岡井碧庵「石潭明月」 52	深尾春庵「本城遠村」 52	萩隠伊聚「隣寺暮鐘」 52	狛高庸「前澗流蛍」 52	木下順庵「松山鶯声」 52	林春宗「吹野帰樵」 52	林鳳岡「桜蹊白雲」 52	林鳳岡ほか「三嶽山八景」八首 52	人見竹洞「三嶽山縁起」 50	冰寿寺祖隆「上棟銘」49	元徳大愚「跋断橋和尚年譜」 48	元徳大愚「高嶽山断橋和尚年譜序」 46	界輪実海「跋断橋和尚所著禅林口実混名集」 45	梅嶺道雪「禅林口実混名集序」	断橋実外「藤津郡鮒越天満宮縁起」 43

0.0	٥٦	0.4	02	00	01	00	00	00	07	0.0	0.5	0.4	00	00	01	00	70	70	77
96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77
桂巖明幢「題寿性院真蹟百人一首後」 74	大眉性善「贈福源桂巌法姪」 74	大眉性善「鉄眼禅士発心飜刻大蔵、復建宝蔵院於当山、為鎮蔵版之所。茲値落成、偈以贈之」… 73	大眉性善「自讃梅嶺上座請」 73	大眉性善「嘱梅嶺雪上座」 73	大内青巒「興教大師誕生遺蹟之碑」 72	永田碧桐「久布白虚堂君墓碑銘」 70	鍋島直彬「鍋島直朝公贈正四位之記」 70	鍋島直彬「妙法蓮華経全部一字一石之墳」 69	鍋島直彬「八天社華表再造文」 69	谷口藍田「八天祠華表銘」 68	石橋潤「釈奠」 68	石橋潤「聖廟祷雨文」 68	正司考祺「元可神廟碑」 66	鶴田皓「西鼓岳先生小伝」 65	西鼓岳「日渉園記」 64	草場佩川「渡辺源大夫敬墓表」 63	月岑実皎「題自画像偈」 62	岡白駒「秀天霊社之碑」 61	林鳳岡「故朝散大夫備前刺史藤公墓碑銘」 58

107 勝屋久諦「正統院一百回諱辰恭賦」 79	106 瑞雲悟芳「仲夏遊大蔵寺望洋亭」 79	105 百城律師「登岩屋山」二首 78	104 百城律師「行成村懐古」二首 78	103 草場佩川「浜駅城趾」 77	102 古賀精里「浜駅城趾」 77	10 梁川星巌「竹崎阻風、晩登観音閣」 77	不愧老成、可謂奇也。因摘末字、作唐詩一絶与之、聊励其志云」 77	10 鍋島直條「並木氏左平童、今茲僅十二歳、詠春初倭歌、自書以示余。乃吟誦数回、風体精緻、	99 月潭道澂「題断橋和尚所著禅林口実混名集」二首	「江野帰帆」 76	「三河秋月」	「貝瀬夜雨」 75	「池田落雁」 75	「太良暮雪」 75	「福源晚鐘」 75	「吹野晴嵐」 75	「三嶽夕照」 75	98 界輪実海「大士山八景詩並引」 74
-------------------------	------------------------	---------------------	----------------------	-------------------	-------------------	------------------------	----------------------------------	---	---------------------------	-----------	--------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------------------

断橋実外「尊僧一律以貽後代」………………………………………………… 74

159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140
西鼓岳「題東方朔図、長島大夫需」 94	西鼓岳「訪迎敬順」 94	西鼓岳「伊万里」94	西鼓岳「訪正司碩渓賦贈」 93	西鼓岳「送僧雄峰之仙台」 93	西鼓岳「送瑞雲和尚応辟、之仙台大年寺」 93	西鼓岳「観稲花会引」 92	西鼓岳「呈楠本君暁〔通称確蔵、平門教授、家在針尾島〕」 92	西鼓岳「到平戸途上」 92	西鼓岳「有田途上」 92	西鼓岳「迎村上仏山」 92	西鼓岳「鹿島祐徳院吹笛」 91	西鼓岳「送佐坂子益帰省」 91	西鼓岳「余来室島、僦野口美備別墅数月、有故将辞去、賦贈」 91	西鼓岳「至日呈諫早諸子」 91	西鼓岳「諫早」 91	西鼓岳「上羅山」 90	西鼓岳「塩田駅同大野梁村賦」 90	西鼓岳「恭安殿釈菜」 90	西鼓岳「穀堂先生扈遊于東武、不与其厳隊、傍探沿路山水、蓋特旨也。賦此送之」 90

	177	176	175	174		173	172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160
謝」	西鼓岳「乙卯正月十二日、風雪殊甚、仏山村上老友、送余西帰。過	西鼓岳「畳韻、再呈仏山」	西鼓岳「訪村上仏山」	西鼓岳「訪淡窓先生」	之。人皆以為瑞、養之三日而放焉。賦此応需」	西鼓岳「甲寅九月念二、有鷹来入納富家賢家、其妻偶至其所、鷹下	西鼓岳「暁過高橋」	西鼓岳「所見二首」	西鼓岳「医王寺村」	西鼓岳「塩田遊朝日練師山房」	西鼓岳「寄広瀬旭窓」	西鼓岳「加藤公廟」	西鼓岳「熊本」	西鼓岳「送犬塚成章赴官于江戸」	西鼓岳「西瓜」	西鼓岳「丁未歳晩偶成」	西鼓岳「立野鱗卿至、分韻。近日賓客頗多」	西鼓岳「迎淡窓先生、時先生自大村帰」	西鼓岳「南竹斎呈珮川先生」
	過七曲嶺、					鷹下止手。視													
	到香春駅、					視之則併黄雀与稲													
	賦此以					 手稲攫													
99		98	98	98	97		97	97	97	96	96	96	96	96	95	95	95	95	95

189	188	187	186	185	184	183	182	181	180									179	178
大隈賓水「七浦途上」	大隈賓水「過田原坂有作」	大塚石舟「寄勝屋兼郷在江戸」············ 102	鍋島直彬「竹画」 102	鍋島直彬「寒梅」102	鍋島直彬「温泉行」	谷口藍田「庚寅新年、寄答海鷗社諸盟兄」	谷口藍田「秋永氏清集、次主人懐田君韻、以贈樸拙最所雅盟、情在詩中」	谷口藍田「嬉野舟遊」	谷口藍田「衆楽園」100	「城山秋月」 100	「横沢落雁」 100	「石壁暮雪」 100	「岩屋晩鐘」 100	「琴川夜雨」	「蟻山夕照」 100	「錦浦帰帆」 100	「高原晴嵐」	西鼓岳「鹿島八勝」 100	西鼓岳「乙卯元日」 99

000	000	005	000		001			004		400	400	40=	400	40=	40.1	400	400	404	400
209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190
最所樸斎「聞杜鵑」 108	最所樸斎「暮秋偶成」107	最所樸斎「石壁山清集、分韻得文」 107	最所樸斎「呈谷口藍田先生」 107	最所樸斎「題島内鉄叟画山水三首」 106	久布白虚堂「贈煙草一包于秋梅軒、副以一絶」 106	久布白虚堂「寄秋永梅軒在東京」 106	久布白虚堂「秋夜聴雨」 106	久布白虚堂「初冬閒居 分韻」 105	久布白虚堂「送谷口藍田先生遊福陵」 105	久布白虚堂「秋日田家」 105	久布白虚堂「石壁山清集、分韻得支」	久布白虚堂「聴泉亭新年宴席上」 14	久布白虚堂「癸丑新年」 104	久布白虚堂「歳晩感懐 限韻」	久布白虚堂「寄伊藤孤雲翁 ^R R a a l a l a l a l a l a l a l a l a l	久布白虚堂「客舎聴子規」 103	久布白虚堂「赴名護屋途上」 103	久布白虚堂「謁寺沢志州墓」 103	久布白虚堂「癸未之歳、余承之東松浦郡長、巡郡内有作」 👊

22 久布白虚堂「贈煙草一包于秋梅軒、副以一絶」(※24と重複)	228 久布白虚堂「寄秋永梅軒在東京」(※308と重複)	227 久布白虚堂「秋夜聴雨」(※202と重複)11	226 久布白虚堂「初冬閒居」(※201と重複)	25 久布白虚堂「送谷口藍田先生」(※20)と重複) 11	224 久布白虚堂「秋日田家」(※199と重複) 110	22 久布白虚堂「石壁山清集、分韻得支」(※198と重複)10	222 久布白虚堂「聴泉亭新年宴席上、分韻得支」(※978と重複) 110	221 久布白虚堂「癸丑新年」(※196と重複) 110	220 久布白虚堂「歳晩感懐 №韻」(※95と重複)10	219 久布白虚堂「寄伊藤孤雲翁 🏻 🖫 🏥」(※194と重複) 109	218 久布白虚堂「客舎聴子規」(※193と重複) 109	217 久布白虚堂「赴名古屋途上」(※192と重複) 109	216 久布白虚堂「謁寺沢志州墓」(※191と重複) 109	215 久布白虚堂「癸未之歳、余承之東松浦郡長、巡視郡内有作」(※190と重複) 109	24 稲垣瓊林「送勝屋大華先生東遊」 109	213 前田白山「(無題)」 108	212 最所樸斎「首夏新晴」 108	211 最所樸斎「聴落葉」 108	20 最所樸斎「八月十五夜、明月榭清集、呈藍田先生」 108
111	111	111	111	111	110	110	110	110	110	109	109	109	109	109	109	108	108	108	108

人布白黙堂「巨津雑詩」 人布白黙堂「西梅」 人布白黙堂「山寺寓居」三首 人布白黙堂「成孝経」 人布白黙堂「茂公皇厳子陵対軸図」 人布白黙堂「茂公皇厳子陵対軸図」 人布白黙堂「茂の書懐」 「芳野紀行」(仮題) 「本日黙堂「藤神事作」 人布白黙堂「極事」 「夜帰浪華」 「夜帰浪華」 「本日黙堂「極事作」 人布白黙堂「極事件」 人布白黙堂「極事件」 人布白黙堂「不良寺改築落慶式、喜而賦此 〔寺也、我祖長教君所創建也〕」 人布白黙堂「本長寺改築落慶式、喜而賦此 〔寺也、我祖長教君所創建也〕」
116 116 115 115 115 114 114 114 114 114 114 114 114 113 113 112 112 112

_	附	255	254	253	252	251	250	249	248	247
『鹿島文学』の作者群像	録 :: ::	久布白黙堂	久布白黙堂	久布白黙堂	久布白黙堂	久布白黙堂「早春雑興」	久布白黙堂	久布白黙堂	久布白黙堂	久布白黙堂
作者群像	120	久布白黙堂「黙堂散士墓碣銘」 119	久布白黙堂「謁勝屋乾巷翁父子墓三首」 118	久布白黙堂「閒居」 118	久布白黙堂「村居」	「早春雑興」	久布白黙堂「買屋」	久布白黙堂「贈池田仁八翁二首(並引」 117	久布白黙堂「梅雨中作」 116	久布白黙堂「哭以学上人、和絶筆韻」 116

『鹿島文学』

品群と作者群が埋もれている。ここに翻刻する『鹿島文学』もその一例である。 漢詩文文化の地層の表面に現れたごく一部に過ぎない。地層の中には今なお全容がつかめないほど膨大な作 僧侶をはじめとする当時の知識人が互いの交流や自身の思いを漢詩文に托し、遺したのである。 佐賀が長い歳月をかけて培ってきた歴史的遺産の一つに、漢詩文文化がある。近世において、佐賀、 漢詩文集にまとめられて刊行され、現在に伝わっている。しかし、刊行された漢詩文集は佐賀の豊かな 蓮池、多久、武雄といった政治・経済の拠点は文化の拠点ともなり、その地に集う大名・武士・儒者 一部の作品

『鹿島文学』の内容や意義、編者の勝屋明濱については後で詳述することにし、まずはじめに明濱が書名に

込めた思いについて触れておきたい。

のであった。そのための必要な情報を日本にもたらしたのが漢籍である。 憬した中国文人の姿、厳密にいえば、日本人が理想化して思い描いた中国文人の生き方と精神を実践するも 近世を通して、「文」あるいは「文学」といった場合、それはおしなべて漢文学を指していた。 日本

鹿島の漢詩文文化に対する敬意と矜恃が込められていると見ることができる。 者・僧侶に至るまで実に多彩な人物が見られる。『鹿島文学』という書名には、彼らによって築き上げられた 詩文の作者については、 た。漢籍の流入と軌を一にして、芽生え育まれたのが鹿島の漢詩文文化である。『鹿島文学』に収められる漢 佐賀の中でも、長崎に近い鹿島は、文化レベルの高い藩主を輩出し、彼らは漢籍の蒐集と継承に心を砕い 巻末の附録「『鹿島文学』の作者群像」を参照されたいが、 藩主をはじめ武士から

鹿島藩の文事

として送り込まれていた勝茂の子茂継(のち直朝、以下、 の明君と謳われ、 水道敷設・堤築造によって新田開発を進め、 下総国矢作領に移る。実父勝茂と養父正茂の衝突の末、三代藩主となった直朝は、 茂に藤津郡の二万石を与えたことに始まる。忠茂没後、その子正茂が藩主の座に着くが、 鹿島藩は佐賀藩の支藩 ついに寛永十九年(一六四二)に勝茂は正茂と義絶する。のちに正茂は本家から拝領した鹿島領を養子 直朝を祭神とする思瓊神社が各地に創建されている。 (分家大名) であり、慶長十四年(一六〇九) 鹿島藩の礎を築いた。このようなことから、 直朝に統一)に譲り、 に佐賀藩初代藩主鍋島勝茂が弟の忠 幕府から直接拝領してい 沿岸での干拓、 勝茂と激しく対立 直朝は鹿島藩 山 間 崫 で 0

に恵まれ、 と昇華していく。その文事の足跡が膨大な草稿群『楓園家塵』として遺されている。 成し遂げた梅嶺に寄せられた黄檗諸僧の書や詩文は、いずれも知的好奇心を大いに刺激するものであった。 の閉ざされた文事空間に身を置いていた直條にとって、梅嶺の語る言葉の一つ一つ、あるい 再興し、その梅嶺を翌九年に直條は福源寺に訪ねている。この時、 のちに直條は幕府の儒官林鵞峰・鳳岡父子や人見竹洞らとの交流を深め、彼にとって文事は終生の事業のちに直條は幕府の儒官林鵞峰・鳳岡父子や人見竹洞らとの交流を深め、彼にとって文事は終生の事業 朝の跡を継いで、 詩文に親しんでいた直條の前に現れたのが、黄檗僧梅嶺道雪である。 寛文十二年(一六七二)に四代藩主となったのが直條である。そして幼い頃から侍臣 直條は十五歳であった。それまで侍臣と 梅嶺は寛文八年に福源寺を , は福 源寺 再興を

が掌握しており、直條は藩政を主導することができなかった。さらに、本藩と三支藩の関係が悪化すると、 そこで得られる評価もすべてが治者としての糧になるはずであった。しかし、 名)としての心得と感性を磨きあげていくための終わりのない修練であった。文事を通しての交流の広がり、 直條にとっての文事は、単に心を慰めるためのもの、あるいは個人の趣味といったものではなく、治者(大 藩政の実権は引き続き父直朝

本藩は天和三年(一六八三)に三家格式を定め、支藩と幕府との直接の関係を制限した。

拡大に励みながら、父から藩政を譲り受ける日を忍耐強く待つことであった。しかし宝永二年(一七〇五)、 條に残された道は、文事のさらなる修練、侍臣たちと形成していた文事空間の充実、 文事による交流

ついにその日を迎えることなく、父直朝に先立ちこの世を去った。

直郷は、そのような祖父のことを敬慕し、遺された直條の草稿群を『楓園家塵』として整理するとともに、 直條は結局自らの生涯を文事に捧げた。そして鹿島藩の文事の礎を築いた。 直條の孫にあたる六代藩主

自らが主宰する新しい文事空間を築き上げた。

成した『鹿陽和歌集』(未完)が編纂された。 郷が主宰する自己完結性の高い文事空間の中で、 が圧倒的な比重を占めていた。 ただ、黄檗僧や幕府の儒者たちとの交流がほとんどなくなっていたこともあり、直郷の文事空間では和 和歌に関しても、 直朝・直條・直郷の三代を中心とする鹿島の和歌文化を集 直條と比べて、外部との交流はきわめて稀薄であった。

受けた草場佩川や西鼓岳、 期に至って古賀精里が登場したことにより、一つの大きな転機を迎えることになる。その後、 谷口藍田が世に出で、藍田はその門下に勝屋明濱らを育てた。 精里の

華やかな和歌文化の隆盛の陰で、漢詩文文化は交流の稀薄化や担い手の不足によって衰退したが、

ていた。 〜一九一五)の治世下である。直彬が谷口藍田を招聘したことによって、鹿島の漢詩文文化は最盛期を迎え 明濱が生まれ育ったのは、 その時代を生きた勝屋明濱が、独自の観点から鹿島の漢詩文文化の歩みをまとめようとしたのが『鹿 好学の文人大名で自らも漢詩文に通じた鹿島藩十三代藩主鍋島直彬 八四三

近世

『鹿島文学』と勝屋明濱

島市大字三河内)で執り行われた梅嶺道雪の三百回忌法要の準備作業中であった。 たが、原本は永らく所在不明となっていた。原本が見つかったのは、平成二十八年(二〇一六)に福源寺(鹿 昭和四十年代に鹿島市史編纂事業の際に作られた複製本があり、その存在自体は知られ

島における蔵書文化の発祥の地でもある。 建につながる寺院であるとともに、 鹿島における黄檗文化の発祥の地であり、普明寺(鹿島鍋島家菩提寺)・祐徳院(現在の祐徳稲荷神社)の創 福源寺は寛文八年(一六六八)に梅嶺道雪が鹿島藩主鍋島直朝の援助を受けて再興した黄檗宗寺院である。 梅嶺が二百十二部もの書物を当寺に残したことに象徴されるように、 鹿

13 と打付書きされている。内題は「鹿島文学巻之上」、その下に「鹿島勝屋驂子駿撰」とある。 た。その後、平成二十六年に住職・総代をはじめとする関係者の尽力により、滴水文庫として整備された。 『肥前鹿島福源寺蔵書目録』(井上敏幸・白石良夫編、佐賀大学地域学歴史文化研究センター) 『鹿島文学』の書誌を示そう。 源寺に伝来する膨大な蔵書は、 大本、写本、袋綴。 佐賀大学名誉教授の井上敏幸氏らによって整理が行われ、 共紙表紙の中央に「鹿島文学」、左下に「徳島大機写 計百四十一丁、 平成二十四年 が刊行され

徳島大機が書写したものである。 半丁に十行、一行に二十一字配されている。内題・外題が示す通り、『鹿島文学』は勝屋明濱 (驂) が編纂し、

咸宜園最後の塾頭となり、その後、唐津・鹿島・小樽・福井・名古屋で教鞭を執る。 鹿島で開 ある。 明濱は明治三年(一八七〇)、鹿島藩士勝屋久備の子として生まれる。本名は馬三男(驂)で、 制 いていた私塾藍田書院に入塾し、 鹿島中学校卒業後、 明治十八年(一八八五)に日田の咸宜園に入塾する。 同二十六年に藍田から子駿の号を与えられる。 同二十年、 明治二十九年には 谷口 号は子駿で 田

明濱の事跡については、高倉芳男「咸宜園最後の講師 に詳しく紹介されており、参考になるが、ここでは同時代人による評価として、 勝屋明浜先生」(『大分県地方史』第五十六号、一九 馬場守次『名古屋

勝屋明濱氏 経学に造詣が深い

市新百人物終篇』

(珊々社、一九二六年)を掲げよう。

が嫌ひだ、曽て前々名古屋市長佐藤孝三郎氏が現代に於て斯くの如く経学に造詣せる人は稀である、 国宝に値ひす可き大家であらふと激賞したといふことを以て有名となっている、佐賀の産 を友に優遊している、漢籍漢詩共造詣の深いことは云ふまでもないが最も長ずるところは文章であらふと 年前罷めて名古屋に来り名古屋中学、育英学校に漢文教師として数年を送りしも今は全く閑地に就き野鶴 Š 広瀬淡窓門下の俊秀谷口藍田に就ひて経学を専攻し、学成って後ち高等学校に教鞭を執ること多年、数 温厚のうちに稜々たる一介の気骨を蔵し超然として自から持すること高く、従って世に阿ねること 正に

激賞したという逸事を見れば、明濱が当時一目置かれる人物であったことが容易に理解できる。 に長じ、俗世におもねらない高踏的人物であるという評価や、元名古屋市長が「国宝に値いすべき大家」と 後掲)も名古屋で出版されており、当地では知名の人士であったからであろう。経学に造詣が深く、

明濱の紹介が名古屋の人物史に見えるのは、旧制名古屋中学校に奉職し、『南行記』『八橋之開眼』

関係を窺わせるものに、 明濱は藍田 次の一文がある。 に深く師事し、 鹿島における漢詩文人の中心的存在として活躍した。 その師弟

勝屋子駿の稿後に題す

む。 ねず」と。余、之れを聞きて、窃に其の進歩の幾きを喜ぶ。此れ蓋し今日有る所以ならんか。今より後、 りて憶う、往日帰郷し、諸友、余を石壁山に邀えしを。子駿、詩成るも佳からず。余、指摘して之れを戒 勝屋子駿、 翌日、 立石松塢来りて曰く、「昨夜、馬三男、先生の訓戒を受けて、刻苦して推敲し、旦に達するも寐 東京に再遊せし後、道学、之れ詩文と与に日び進む。今年、復た去年の比に非ざるなり。

明治己亥の六月 藍田老人中秋、識す

道の任、二三子に在るなり。

子駿、其れ勉旃せよ。

(『藍田谷口先生全集』巻一、原漢文)

明濱が詠んだ詩は不出来であった。そこで藍田が訓戒を垂れると、明濱は夜を徹して詩の推敲に励んだ。 学を後世に伝える任は、 めば、どれほど学問に対する造詣が深くなるかは計り知れない。自分はすっかり年老いてしまったので、漢 の儒学と詩文は大いに進歩が見られた。そこで藍田はさらに明濱を激励するのである。今後怠ることなく励 日、そのことを知った藍田は、明濱の学問がすぐに進歩するであろうことを予期して喜んだ。果たして明濱 明治三十二年(一八九九)六月、明濱の文稿を読んだ藍田は、嘗て師弟の間で行われたやり取りを回想し 藍田が佐賀に帰郷した時 貴君を含む二三の門弟たちの双肩にかかっているのだ。 (藍田は有田の出身)、石壁山 (祐徳稲荷神社)にて催された歓迎の宴席で さらに勉め励めよ、と。

八六)に藍田が中心となって設立した鹿島の漢詩文人集団

の期待に応えようとした。その一つの表れが藍田の文学活動の継承である。

海鷗吟社

―は、藍田の東京移住や創設メン

明治十九年(一八

明濱は藍田

バー 末期から昭和初期にかけて、 の死去によって断絶するが、 明治三十五年(一九〇二)に明濱が中心となって再興した。そして明濱は 鹿島だけでなく、佐賀全体の漢詩文界の重鎮として広く重んじられるよう

嵎夷が作った「八橋鼇頭碑」に注解を施したものである。彼が伝統的な漢学に通暁したばかりでなく、 な尊皇思想の持ち主であり、 た吉野や楠木正成ゆかりの地を二度にわたり旅行した時の紀行文・紀行詩を集録したものである。 賜天覧」の朱方印が押されており、天覧の栄誉に浴したことがわかる。『八橋之開眼』は、江戸の儒者秋本 一篇を収める。 一六年)、『八橋之開眼』 明濱の著作としては 『南行記』 『明濱文纂』六巻(写本、巻五欠)、『南行記』(正続合編、 同 は別題を『勤王遺跡南行記』とすることからも窺えるように、 さらに日本の古典作品をも等閑にしなかったことが窺われて興味深 がある。『明濱文纂』は自筆稿本が国立国会図書館に蔵されており、 名古屋・大隅栄一刊、一九 南朝の都が置 見返しに 漢文二百 かれ

る。 る。 があ 賀 九二四年)、『以学寿言集』 明濱が編纂に携わった漢詩文集としては、『藍田谷口先生全集』(谷口藍田父子著、〔東京〕谷口鉄太郎 西村謙三編、 ずれも大正末年から昭和初期にかけて編纂された、 ほ かに古川松根の和歌集 〔鹿島〕 一九二九年)、『西亭遺稿』(千住健任著、 森野茂編、 (横沢常諦著、 一九二五年)、『陸沈寿巻』 『楢園遺集』(〔名古屋〕 〔鹿島〕 横沢常雄編、 佐賀、就中鹿島にゆかりのある人物の詩文集であ 大隅栄一刊、 (織田省己著、〔鹿島〕 [佐賀] 千住武次郎編、一九二九年)、 一九一五年)、『晋城遺稿』 一九二六年)の編纂にも携わってい 織田済津編、 (洪安胤著、 一九三〇年 『止軒遺稿』 佐

と慕われた鍋島直彬の伝記と、鹿島の文教の歴史をまとめた『鹿島文学』の編纂であった。 大正十五年(一九二六)に鹿島に戻った晩年の明濱が取り組んだのは、 鹿島藩最後の藩主で明君

『鹿島文学』の編纂過程

の住職徳島大機 明濱は昭和七年 自分で漢詩文を蒐集してまわる体力が残っていなかった。そこで、漢詩文の捜索とその書写を、 (大機聯用)に命じた。『鹿島文学』は明濱の構想を大機が実現する形で編纂された。 (一九三二) 六月から 『鹿島文学』の編纂に着手した。 しかし、 病気を煩っていた明濱

に明濱が没すると、 えた日記・詠草を、それぞれ『滴水庵日乗』『滴水庵詩稿』として整理・保存している。昭和八年(一九三三) 関心を寄せていた。 九一四)からの堂宇移転事業を成し遂げ、 大機は明治二十一年 明濱の墓碑銘を記し、その蔵書を継承するなど、自他共に認める明濱の後継者であった。 明濱に師事し、 (一八八八)に福源寺の住職徳島興善の子として生まれた。父を支え、大正三年(一 毎月の日記や詠作を師明濱に送り、 檀家からの信望の篤い人物であった。また、若い頃から漢詩文に 批評を乞うていた。 明濱が校訂を加

書写している。七月十一日には嬉野家の菩提寺である元光寺を訪れて嬉野元可の碑文 (「元可神廟碑」)、十四 四代藩主鍋島直條の碑文(「故朝散大夫備前刺史藤公墓碑銘」)とその妻の碑文 日には塩田 、大機の日記)から窺うことができる。昭和七年六月十二日、大機は普明寺を訪れ、鹿島鍋島家の墓所に建 の吉浦神社で岡白駒の碑文(「秀天霊社之碑」)、八天神社で鍋島直彬の碑文(「八天社華表再造文」) (「宝善院寂湛孺人墓誌」)

大機は明濱の手足となって、鹿島を中心に、収録する漢詩文の蒐集に飛び廻る。その様子は『滴水庵日乗

辺源大夫敬墓表」)と断橋の鐘銘 て書写することから始まる。八月二十二日には法泉寺から直條が作った母寿性院の伝記 碑文の現地調査が一段落すると、書物からの抽出作業に移る。この作業は書物の所蔵先を訪ね、借り受け を借り受けて書写し、十月二十日には泰智寺に赴き、草場佩川が著した渡辺源太夫の墓碑銘 (「西海道肥前州藤津郡永渓山泰智禅寺鐘銘並序」) を書写している。また、 (「先妣淑

を書写するなど、

精力的に活動している。

明濱から貸与された西鼓岳・久布白虚堂・最所樸斎の漢詩文集からの抽出作業も行っている。

大師誕生遺蹟之碑」) (「祐徳開山瑞顔大師行業記」)を書写している。その後さらに誕生院に向かい、大内青巒による碑文(「興教 桂巖明幢と梁山宗秀の遺稿集を借りると、その足で祐徳稲荷神社に移り、 和八年に入っても、『鹿島文学』編纂のための蒐集活動は続く。 と鍋島直條が著した碑文(「肥前国能美庄誕生院記」)を書写している。 明濱と大機は四月十二日に普明寺を訪 龍海和尚が著した瑞顔大師伝

訪れた大機に対し、 一杯、大機の尽力に感謝の意を示した。『鹿島文学』の完成を熱望する明濱の志に、大機は胸を打たれた。 このように精力的に編纂を進める最中、四月二十三日に明濱が倒れ、危篤に陥った。二十七日に見舞いに 明濱は筆談で 『鹿島文学』の編纂を懇托した。そして会話もままならぬ中で、 明 濱は +

鹿島文学』編纂に関する記事は見られなくなる。住職としての勤めを抱える大機にとって、独力で明濱の構 こうして『鹿島文学』の編纂は大機に委ねられることになった。しかし、明濱の死後、『滴水庵日乗』 から

月二十二日、明濱は大機に見守られながら、最後の息を引き取った。

想を実現することは困難であり、 編纂途中で明濱が亡くなったことの影響は 明濱の生前に収集した漢詩文を整理することが手一杯だったのであろう。 『鹿島文学』に色濃く残されている。草稿がそのまま並べられ

階であったと推測される。 排列と体裁に統一が取れていないのである。このことから、現存する『鹿島文学』上巻は原稿の段

『鹿島文学』の書き入れ

朱は明濱、墨は大機の手によるものと判断されるが、先に大機が墨で注釈を書き入れ、その後、 に朱点と朱批を附したと考えられる。 『鹿島文学』には朱墨二種の書き入れがあり、大部分は頭注の形で記されている。書き入れの内容から見て、 明濱がこれ

第一人称で感想が記された次の三箇所である。参考までに書き下し文を附して掲げよう。 濱が大機に貸与した漢詩文集に既に書き入れてあったのを写したものであろう。朱筆の書き入れは、なぜか 干戈日び尋ぐ)の「于」字に対して、頭注には「于字、恐らくは干字か」(原漢文)と墨書きされており、本 谷口藍田門下の久布白黙堂の詩に集中しているが、ここに明濱の手に成ると判断できるものが含まれている。 文の「于」字の傍には「干」と朱書きされている。墨注が先で、朱注が後のものと考えるのが妥当であろう。 なお、「明濱曰」で始まる書き入れも、朱墨の二種類ある。墨筆の「明濱曰~」の書き入れは、おそらく明 例えば、正司考祺の「元可神廟碑」に見える「当是時海内騒擾、于戈日尋」(是の時に当たり海内騒擾

僕亦往年夏携妻子登山、宿佐古屋、在蔵王堂下。今読是什、恍如再経其境 して再び其の境を経るが如し。 僕も亦た往年夏、妻子を携えて登山し、佐古屋に宿り、蔵王堂の下に在り。今、是の什を読み、恍と (久布白黙堂「芳野紀行」三首・第一首、 朱頭注

再昨秋、 に是の篇の言う所の如し。 僕亦与松本彊廬入峡看楓、 僕も亦た松本疆廬と峡に入りて楓を看、木曽福島に宿り、 宿木曽福島、 遊臨川寺。 山水奇勝、 (久布白黙堂「岐蘇峡中」、 臨川寺に遊ぶ。山水の奇勝、 実如是篇所言。 朱頭注

・吾兄之学、於是乎実矣。

吾が兄の学、是に於いてか実なり。

入布白黙堂

「読孝経」、

行を回想してのことであろう。また、大正八年九月十七日の日付がある黙堂の「岐蘇峡中」に書き入れた朱 行記』を書いている。「今、是の什を読み、恍として再び其の境を経るが如し」と述べるのは、その時の旅 明濱は大正二年(一九一三)夏、家族を連れてかつての南朝の旧都、奈良県吉野を旅行し、大正六年に 旧制名古屋八高教授・松本亦一(号は彊廬) の名が見える。

島中学校に学び、谷口藍田の私塾で都講(塾頭)に挙げられた。儒医を志して、長崎・熊本・東京で師につ 大正十五年(一九二六)に職を辞し、鹿島に帰郷して風月野鶴を友とする晩年を送った。 国中学校教諭を務め、明治四十一年(一九〇八)に旧制名古屋第八高等学校に漢文学教授として採用された。 たが、時勢に合わなかったため医業を廃した。文部省検定試験に合格し、中等学校漢文科免許状を得て、岩 の「解題」によれば、松本亦一(一八六二~一九二九)は藤津郡七浦村の人。明濱とは同郷である。旧制 いて漢方を学び、故郷で開業すること十年、中国蘇州にて一年間、医業を営んだ。帰国後、佐賀市で開業し 『鹿島人物小志』(祐徳文庫、一九三一年)および『松本文庫目録』(鹿児島大学附属図書館、一九八四年)

遊んだことがわかる。 に「木曽看楓記」が収められており、これによって、明濱が大正十二年秋に、十歳ほど年長の彊廬と岐阜に ともに鹿島の地に生まれて藍田の門に学んだ彊廬と明濱の間には、親密な交流があった。 したがって、右の二つめの注は大機ではなく、明濱の手に成るものであり、書き入れ 『明濱文纂』巻六

黙堂の「読孝経」に施した朱注に、「吾兄」(吾が兄)とあることも傍証となる。久布白黙堂(一八六二~

を施したのは大正十五年(一九二六)であることがわかる。

するのは首肯できるが、一八八八年生まれのはるかに若い大機がこのように称するのは考えにくいのである。 一九二六)は明濱より八歳年長にあたり、同じく藍田門下であった明濱が、学兄にあたる黙堂を「兄」と称

『鹿島文学』の特徴

『鹿島文学』 に収められた漢詩文とその作者を概観すると、明濱は鹿島の漢詩文文化に二つの流れを見出

一つは、黄檗僧と鍋島直條に始まる流れである。

ていたと考えられる。

の巻頭を飾るのが福源寺再興を祝した黄檗僧独立性易の漢文であること、また『鹿島文学』に収められた漢 まず、明濱は黄檗僧が鹿島に漢詩文文化をもたらし、発展させたととらえている。そのことは、『鹿島文学』

詩文人の中に黄檗僧が最も多いことに象徴される。

明濱が黄檗僧を重視した背景には、明濱自身の家系が黄檗僧と深く関わっていたこともある。『鹿島文学』

に深 賛が記された肖像画は勝屋家に伝来していたが、大正五年(一九一六)に明濱が福源寺の移転事業を成し遂 明幢を訪ね、また月岑とも三十年以上の交流を持つなど、深く黄檗宗に帰依していた。 画 には正徳三年(一七一三)に月岑実皎が記した「題自画像偈」が収められており、これは月岑が自身の肖像 の上に、明濱の祖勝屋無参(安玄)に与えた偈を記したものである。これによると、無参は普明寺に桂巌 い関心を寄せ、向学心に燃える黄檗僧の大機を自らの後継者として厳しく育てた。ちなみに、月岑の自 明濱自身も黄檗文化

的に発展した。『鹿島文学』に収められた鹿島藩主家の関係者は、幕末の直彬を除くと、断橋和尚(直孝)・ 次に鍋島直條であるが、先に述べたように、直條の文事は福源寺で梅嶺道雪と出会ったことにより、 飛躍 げた大機に記念として贈ったので、現在福源寺に蔵されている。

直條兄弟のみである。 している。 直條の文事の源流をどこに見出すかについては異論があろうが、 両者はともに福源寺での黄檗僧 (梅嶺と桂巌) との出会いにより、 少なくとも明濱は黄檗 本格的に文事の道

僧をその源流と位置づけているのである。

もう一つの流れは、古賀精里に始まるものである。

地に広がり、定着したのである。 と親しく交わっており、 西鼓岳・谷口藍田によって鹿島にもたらされた。 佐賀の漢詩文文化にとって、精里はきわめて重要な存在であり、その影響は精里の薫陶を受けた草場 精里に発する流れは佩川から鹿島藩校の教授に伝わり、 鹿島藩の藩校で教授を務めた石橋潤・星野源兵衛は、 さらに藩校を通して鹿 佩川 Ш

招かれ、 文学』に収められた鹿島藩士久布白虚堂・久布白黙堂・最所樸斎はいずれも藍田の門下生というべき存在 教授として招かれ、 れている。こうした往来の途上で、鹿島の人々との交流がもたれた。さらに、 なお、 多久と諫早を往来している。また藍田は有田と長崎を往復し、 具体的には往来の途次での交流と鹿島藩校への招聘が挙げられる。 直接鹿島の漢詩文人の育成に携った。特に、 鹿島に定着した藍田 あるい 佩川や鼓岳は諫早家 鼓岳・藍田は鹿島藩の藩校に は妻の実家がある能古見を訪 0) 影響は大きい。 の好古館 『鹿島

広瀬淡窓· ていたことは、『鹿島文学』の頭注に広瀬淡窓の評語が少なからず引かれていること、また鼓岳の作品のうち、 藍田 は、 広瀬! 明濱も学んだ咸宜園にゆかりの深い人物である。 旭荘など咸宜園 .の関係者に贈られた詩が選ばれていることからも窺える。 藍田と明濱にとって咸宜園が特別な意味を持つ

田が結成した海鷗吟社は、そのルーツを途れば古賀精里の子穀堂を盟主とした「海鷗文社」に行きつく。こ 藍田と明濱にとって咸宜園よりもさらに重要な意味を持つのは、 やはり佐賀の学統であった。

ものとして、肥前島原藩儒、 れは文政九年(一八二六)一月、穀堂が江戸で組織した詩文創作の結社である。その結成の経緯を窺わせる 長いが、佐賀の漢詩文文化と深く関わるので、煩を厭わず左に掲げよう。 川北雲山(一七九三~一八五三)の「葉室敬輿を送る序」が挙げられる。

藩の間に摂す。栄城を距つること二百里、熊府の如きは則ち一葦(舟一艘)もて航るべし。 政教脩治、威武斉整を論ずる亡くして、文章の盛んなること、他藩に敻絶(超絶)す。敝邑島原は、二 東西(東肥・西肥)を以て称す。偃戈(元和偃武)以来、侯国を建置すること若干、其の最も大なるも 肥州は京の西、千有餘里に在り。分かちて二と為し、或いは前後 東は熊府 (熊本)と曰い、西は栄城(佐賀)と曰う。内は以て藩屛と為り、外は以て海寇に備う。 (肥前・肥後)を以て称し、或いは

摂(管理)するを以て、余も亦た扈従し、因りて清商江芸閣等と傾蓋の交わりを為すを得るのみにして、まった。 他は一握として与に語る者無し。 予、島原に在りて、竊かに二藩に士多きを欽む。而れども邑制、外交を許さず。唯だ寡君の長崎を管

政十一年)、敬輿、将に其の君の本藩に還るに従わんとし、言を同社の諸君に請う。予や敬輿と交わりを に「海鷗」と名づく。幾も無くして、又た東肥の葉室敬輿を得たり。予の喜び知るべし。今茲戊子(文 則ち愈いよ益ます其の人を慕う。近ごろ謀りて文社を創り、西肥の穀堂氏を推して盟長と為し、其の社 ||ぶ所以を叙べんと欲して、覚えず憮然たること、之れを久しくす。| (江戸)に帰りて後、都下の諸名公に従遊すと雖も、紫溟(有明海)の風景、時に胸次を往来せば、

し予の西に之くや、宜しく栄城・熊府の諸賢を見るべくして見ず、僅かに来舶の 商 賈に遇いて歓を為す

のみ。 其の東に帰るや、又た宜しく肥人を見ること無かるべくして、累ねて穀堂・敬輿の諸君と同盟を

機を忘れて相い親しむ。海鷗の名、固より誣いざるなり。 (後略

す当地の文人たちが慕わしくなったので、古賀穀堂を盟主に祭り上げて「海鷗文社」を結成したという。 がいないことを遺憾に思っていた。江戸に帰って諸文士と交わりつつも、 ことが許されず、文事といえば主君に随行して訪れる長崎で清の客商江芸閣と交流する以外に、共に語る者 山は、 島原の地が佐賀・熊本の雄藩と境を接しながら、藩の制度上、両地の文人たちと自由に往来する (川北温山「葉室敬輿を送る序」、『温山文』巻上、 肥前・肥後の風土を思うとますま 原漢文)

温

文草を作り卒うれば、期に趨きて遑遽の憂い無からん。会日、午(午の刻)に聚まり、酉(酉の刻)に散ず、 |席上、課するに小文若しくは詩を以てし、其の成らざる者は追いて作ること三日を出でざること」 (以上 海鷗文社の規約を見れば、「会は毎月一次、予め十七日に定めて以て常期と為す。会せんことを庶う者は

原漢文)などの六箇条が定められている。

濱が海鷗吟社を再興したのも、 士や久留米藩士等、九州出身者が多く目に付く。そもそも温山の文章からも窺えるように、海鷗文社は温 のことを知っていたはずであり、それゆえに自らの詩社にも「海鷗」の二字を冠したのであろう。そして明 が「文運が盛んである」と評価した肥前・肥後の文人儒者を中心とする結社であった。藍田は当然この結社 その活動の詳細はわからないが、江戸に集った各藩の士人のうち、佐賀本藩の穀堂を盟主として、熊本藩 先師藍田の志を受け継いで、肥前佐賀の学統を継承するためであったと考え

未完の『鹿島文学』

下三巻の構成で編纂が行われたと見られる。ただ上巻が草稿の段階で終わっているのを考えると、下巻また 現段階で発見された 『鹿島文学』は一冊のみで、 内題に「上巻」とあるので、上・下二巻または上

は中・下巻は構想の段階に留まっていた可能性も排除できない。

等は、必ずしもすべてこの上巻には収められていないことに気づかされる。 大機の日記『滴水庵日乗』の記録とつき合わせて見れば、『鹿島文学』の編纂に際して蒐集した碑文・漢詩

光寺はのち普明寺の末寺として黄檗宗寺院となる。右記の 元禄九年(一六九六)に元鹿島藩主の鍋島直朝が父勝茂の菩提を弔うために観音堂(大士山勝光寺)を建立 今西行と称されるほど文才に恵まれた人物であった。著作としては『水庵日記』や 例えば、昭和八年四月十二日に大機は普明寺から梁山宗秀の遺稿集を借りている。 開山に迎えられた。そして梁山の跡を継いだのが「断橋和尚年譜」を編纂した元徳大愚である。 『滴水庵日乗』の記録から、梁山の詩文も『鹿島 宗秀は佐賀藩士の子で、 『普陀山略志』 がある。

でもあり、 また、 昭和七年十二月五日に浄林寺に建つ織田良山の寿碑を書写している。良山 当然 鹿島 の医会の重鎮であると同時に、 『鹿島文学』の収録対象であったはずだが、やはり上巻には収められていない。 海鷗吟社に属する漢詩人であった。良山の寿碑は (良益)は鹿島藩 明濱

文学』の収録対象であったと推測されるが、上巻にその作品は見あたらない

史の中で大切に培ってきた感性、品性、教養という知的財産がいま音を立てながらくずれ落ちている。先人 脱亜入欧 明濱は命の尽きる直前まで、意のままに動かなくなった体を駆使して、『鹿島文学』の完成を目指していた。 和魂洋才が叫ばれる時代風潮の中で、 明濱の抱いていた危機感は、今日の我々にとっても決して他人事ではない。日本人が長い歴 湮滅の危機に瀕した地域の歴史遺産を、後世に伝えようと

たちの営んだ「文学」という貴重な文化遺産がどんどん置きざりにされているからだ。物資の豊かさと引き

換えに、我々は心の豊かさを失いつつあるのだ。

すく伝える努力が必要であり、地域住民には積極的に地元の文化遺産に関心を持ち、その価値を認識して郷 はずである。地道な努力の積み重ねによって、やがて先人たちの培ってきた豊かな文化遺産が佐賀の誇るべ 土の誇りとする気持ちが必要である。そうした両者の協働の先にこそ、地域社会の新たな魅力の発見がある このような状況の下、地域研究に携わる者には埋もれた文化遺産を次々と発掘して、その価値をわかりや

き宝として広く認識される日が来ることを、堅く信じている。そしてこの『鹿島文学』がささやかながらも

その一翼を担うことを願ってやまない。

『鹿島文学』の調査に際しては、福源寺第十八代住職の田中浩樹禅師、

地域学歴史文化研究センターの伊藤昭弘先生と大同印刷に大変お世話になった。 井上鉄一氏、 井手口愛子氏に親切なご配慮とご協力を賜った。また編集と出版に際しては、佐賀大学

心より感謝申し上げたい。

高橋 研 一中尾 友香梨

中尾 健一郎

並びに同寺総代の馬場喜彦氏、

- 寿寺に現存する。当寺院は二世売茶翁方厳禅師ゆかりの地であり、 三河国の八橋でカキツバタの花を見て望郷の思いを募らせたという。石碑は愛知県知立市八橋町 「八橋鼇頭碑」は『伊勢物語』に登場する在原業平にまつわる伝説を記した碑文。業平は東下りの途上、 てふれられている。 明濱の『八橋之開眼』にも禅 師
- 書館、 内に居住していた縁により、 が多いが、 松本亦 一九八四年)を見れば、彼の旧蔵書はその経歴と相俟って医書、漢籍と日本漢文学に関わるもの 一の旧蔵書は、 勝屋明濱の『南行記』や明濱が校閲した『藍田谷口先生全集』も含まれている。 子の述之が旧制第七高等学校 鹿児島大学附属図書館に寄贈された。『松本文庫目録』(鹿児島大学附属 (鹿児島大学の前身) 出身であり、 また鹿児島県
- 3 生馬寛信 『古賀穀堂』 (佐賀偉人伝15、佐賀県立佐賀城本丸歴史館、二〇一五年) 六一頁を参照
- $\widehat{4}$ 庫、二〇一七年)二三八~二三九頁に簡単に言及されている。 川北温山と「海鷗文社」との関わりについては、 中村真一郎 『頼山陽とその時代・下』(ちくま学芸文
- (5)「海鷗社文会規約」は、その全文と参会者の名簿が『佐賀県近世史料』 前掲の生馬寛信『古賀穀堂』にその書影が一部掲載されている。 二〇一三年)四一一~四一八頁に掲載されている。 原本は公益財団法人鍋島報效会に所蔵されており、 第八編第四巻 (佐賀県立図書館

凡例

本書は円通山福源寺滴水文庫所蔵『鹿島文学』を翻刻したものである。

一 底本に従い、本文を下段に、頭注の書き入れを上段に配した。

漢字は原則として新字体・通行の字体を用いたが、人名など固有名詞に関しては、底本の字体をそのまま用

いたものもある。例えば、「明濱」「直條」など。また、「弁」と「辨」「辯」、「余」と「餘」、「芸」と「藝」な

ど、字体によって意味が異なるものは区別した。

通読の便を考慮して、文意に従って適宜改行し、句読点を補った。

底本の割書きは、〔〕内に一行書きした。

書き入れ中の書名には『 』、漢詩の題と語句等には「 」を附した。漢字と仮名の遣い分け、送り仮名、仮名遣い等は底本に従った。

校訂者による注記は、すべて()内に示した。

朱筆の書き入れはゴシック体で示した。

文字が脱落している箇所、及び判読不能な箇所については□で示し、補うことが出来るものについては、 頭

注欄に () 付きで示した。

鹿島文学

徳島大機写

勝屋驂子駿撰

肥鹿 前島

天間独立(独立性易)

1 重建円通山福源寺記

広寿罷参遠山。行告太守、乞坐具地、寄自是地也、近為泉太守方隅分治。公性愛竹、是地也、近為泉太守方隅分治。公性愛竹、中、忽聞人誦経声、猟人心恐、不敢再至、中、忽聞人誦経声、猟人心恐、不敢再至、 之地。 滴水菴。 日本夢窓疎石国師、 用広中天之教化。 妄乖真。 鏡中之真妙用、 即心即仏而已。 仏法者真常一念而已、 民受業之地、 同枝以並其秀。 師嗣 還一念之本始、従来不昧、於攸帰嚮往。而至其祖、 而創発福源、 《秀。承源広系、則有高峰日、方外円、月庭忠[径山無準範、範嗣破菴先、一源溯本、列映分[無難師] (破稽祖先) (破稽祖先) (破稽祖先) (破稽祖先) (被稽祖先) 及後当代更者三百餘禩。 有待仏運中興。従是蕪堙日 成天地人三才合発、 頓超一念、本空至徹、 緒垂東海、 祖道者真如一 啓一滴之光風也。 光耀一天。 帰一性之真常設教而已。 性 一日荊榛変成樹藝之場、 真如一性、 后 已。 个。則元禅師者、日本法光之祖始也。 (無学祖元) 方外円、月庭忠、正命以演**其**流。高(方外宏遠か)(月庭正忠) 原方外宏遠か)(月庭正忠) 積、 当陽啓祚、 経声亦絶。 嘉護渭川、 人之生 本始、 適有猟人、夜施殺具、 歴歴明明。 山擁屏 遂成琳琅一 可見地霊呵護、 分灯。則有雪巌欽、別山智、以《雪」(雪巖祖欽)(別山祖地)(明祖祖)(別山祖地)(明山祖地)(明山祖地)(明山祖地)(明祖、祖開基、永新不朽、跡)(明祖、祖開基、永新不朽、跡)(明祖、祖開基、永新不朽、跡) 真常大道、 囲 陽雨時和、 教広流行、 祖命仏道之大法、 界。 峰隔水護、 待掩獣群。 性 歳戊申秋、梅嶺禅兄、(寛文八年)(梅領道雪)自不忽於日夕其厳耳。 率機 一中九 歳不獲登。 高峰日 先。 故出大匠開 昔繇建刹、 於曠然四際 惟此 有、 而 跡見当陽 、断橋岭() (断橋妙倫) 下、 同 由非生 是大円 不以非 念之 再出 拓

隔

原文作停。

蓋頭

時荷太守、

嘗存顧問。

寺基蕪没、

寄息其傍。

祇存観音太士宝相、暨華 1.息其傍。感荷券施復至、

暨善財・龍女三尊。

里隣併力誄鋤

得成把茅

日久風磨

有者、九州也。 按一中者、中天九

佛添祖道之重光於東海者其大哉 矣中與福源盡由顧友一念真常成天地人三才合發 事官身而說法典其心之無限量應自發福之無限量 施之無限量令者太守公待轉濟縣以奉宣王可謂現 得格外撑天乃現園通勝境候予谷圖金为日重縣新公顧扇死日室王故姓顧幼报榛上即佛題下縣民力 寫信云意至長其斯之以威秀昔聞監髮州連利威心 自擘道不容城地居人四至職禮合掌曰此本授樂場 衛首朝日幸荷季部不勝親切始扇友之手續等益天行 園通乃敢嗣同太守公枯香設供即其在而安其位季 始欲請到養不敢安承投誠三占三言者有慈九以你火發咸東本殺光忽運派如斯三夕以是送敢酯兄死 把第品頭時荷太守曾存顧問寺恭義沒紙存 遊及經典國即黃重編婦将来成合掌三拜見威傲之 他院主燃見衰落竊皈供奉其夕光生短斟四遠見為 觀音大士實相壓善財龍女三事日之風惠而蝕曾右 東京 東國民後月之最至日 天間稱立易模撰書上章閣民後月之最至日 天間稱立易模撰書 『円通山滴水福源禅寺重興編』(福源寺蔵)

成 至哉。 謝曰、 披榛、 忽遽泯 可謂現宰官身而説法。 以啓円通。 雨 合掌曰、 時在上章閣茂復月之長至日 天間独立易、燦天地人三才合発、以応仏法祖道之重光於東海者。 蝕。 其斯之以感焉。 幸荷季諾、 上仰 曽有他院主、 此本極楽場、 如 仰仏恩、下瞻民力、乃敢粛同太守公、 斯三夕、 不勝親切。 以是送帰嶺兄居。始然慘見衰落、竊帰供奉。 昔聞竪茎艸建刹、感心施之無限量。 与其心之無限量、 還成極楽国。 始嶺友之、手縛茅蓋、矢自垂遺、不容垢地。居人四至、得格外撐天。乃現円通勝境、俟予徐図、全力呂重鼎新 拈香設供、 即黄童孺婦時来、 始欲請到菴、 即其座而安其位焉。 応自護福之無限量矣。 其夕、 光生烜赫、 其大哉。 不敢妄拳、 量。今者太守公待瞻済勝、以奉宍咸合掌三拝、見威儀之篤信云。 公顧嶺兄曰、 四遠見為火発、 投誠三占三吉、 中興福源、 空王故趾、 居人四至、 蓋由嶺友真常 咸来奔救、 若荷慈允 以奉空王 瞻礼 嶺首 願 噫 効 光

- 22 -

撰併書

桂嚴明 幢

2 頌古・ 見星悟道

冷光一点現眉端 大地衆生毛竅寒 惟有瞿雲不瞬目 和星撲砕鉄囲山

未会不二法門的

多向毘耶

影跡尋

成群成隊自沈吟

籌 冷坐少室 還逞風流

賺

人断臂機未瞥

睥睨扶桑六六州

酬梁王問

恰輸

4

初祖

未挙筆前

看破骨髄

已挙筆了

全体不是

従来個壱胆毛長 不接梁王接断

西乾東土 費尽精神 末稍敗闕 隻履随身

鍋島泉州老檀越小影

六十年来霖雨手

不施寸刃撫辺郷

尋常

様鳥章冕

吞却毘耶玉払光

5

西

|天蕉種

震旦春風

華五葉

結果日本

東

瞥爾和身桶底脱 祐徳院瑞顔実麟大師 方知龍女度時人 小影

6

娘生面目居然別

莫怪辺! 2郷現瑞隣1村

7 題山 水

霜免松煙如 有意 時時呼起栗翁慵 窓前 七椀茶罷後 写出終南四 五峰

招提依約接天門 下有漁家比向喧 日暮船横人不見 定知買酒去前村

8 條主杖白鄰皺 月岑皎請(月岑実皎)

堂堂巍巍誰能敵

条棒撑天日月長

這老古錐

喜怒無常

挙角和龍子

没跡似蟱羊

9

龍海珠計 (龍海実珠)

特地拂空疎与親 将謂没塵長靠壁 無端跳出動天人

独坐長年扶杖藜 日暮寒岩人不見 孤雲吹送数峰西

富門争似我幽栖

10

江島悟山居士請

諸禅 .人請

11

横吹無孔笛 倒彈没絃琴 這回風顚漢 焉応供養心

未了涅槃堂裡旨

百般醜拙送朝昏

向渠或問西来意

徒以無言当有言

者癡奴不知十十元百 有時満盆悪水驀頭澆 有時無孔鉄鎚当面

築着磕着得人憎 左之右之独自適 若是恁麼不唧噌 許儞高唱少林曲

有時問 口忉怛地 有時開目湛不揺 有時懸羊頭売狗肉 有時御風唱歌謡

恁麼活計都壊了 只許画工驀面描

出 Ш 12 何似入山好 師河州金剛山之麓、 自愧身貧道亦貧 誅茅菴居者既十餘期、 只有清風兼明月 適応肥前高城之請、 他時留与住菴人 書偈留壁間

13 示木食長青道者

覆飜法喜与禅悦 木食中辺逈不同 白屋草丁無可待

鼎羹剰得栗逢濃

14

高城寺退院

領此 名 藍十四年 中喫頂常住地 愧龍天 自今柱杖総無事

何処閒雲不勝眠

毘耶城裡人 15 次韻 岩田一 白払絶疎親 鼎居士 偈語: 此詩応在高城寺退院前 品如陽日 忽生獅座春

16 次韻格峰上座、(断橋実外) 謝過訪福 源

行尽乱雲重畳山 特来扣寂尉春寒 山茶自有山童煮 狼籍菜盤也不干

雲埋霧罩旧家山 細雨如糸天転寒 須識梅花枝上雪 風光不与世相干

17 館園 看花

蕭然 雨洗 林巒 好在花 園眼底寛 嘗尽玉盤金鼎美 深紅浅白自由看

次韻 仏国高泉和尚(高泉性激)

鼎有山茶爐有柴 18 任佗年去又年来 見寄 偶然収接荊山玉

几上払塵眼益開

幾渉崎嶇自拾柴 栄枯高東下山来 若逢道者家風問 向道高兄仏国開

微笑菴仮山裡、 産霊芝数茎、 偈以示月休徒

点開空劫已前春 彰祥呈瑞真消息

合付破顏微笑人

蓋是黄金幹是鉄

19

翹石脚頭高 数数弄秋毫 蓬島又安在 山色罘罳拆 無由見六鼇 風声琴筑交

嗽泉胸次潔 幽亭頻題句

20

石壁亭

21

山居

翠巒風起鳳笙近 千株松下大僧生 黄土雨濡仙草栄 楽説清閒 味情 苟不渓声演妙偈 茶共山翁 囲 鼎 啜 人間恐負逸民名 田 随農父帯雲耕 本は「済」とする (□を中川文庫蔵

> 22 水居

浮

寄生水 国幾涼燠 訖得官塘植柳 年 糧食尽時菱角熟 盞灯空処月痕円

帰海幻家夢 白浪滔天活祖 禅 唯個形骸無可 述 夕陽翡翠弄寒煙

23 謝梅嶺和尚過訪

踏過山路懸崖遠 多謝吾兄訪寂辺 八字眉毛揚子道 一条鉄錫振 郷天

劇談喚覚孤雲夢 盛事親聞四海禅 対榻不漸茶銚尽 開懷共話旧 因縁

24 春日遊岩屋 石楠花名所

激雪河辺春昼長 崔嵬胸次共相忘

追尋洞 \Box 一不須問 数朶石楠仙骨香

中秋

山花閒愛月

不覚動吟心

趙茗数斟了

忽驚露霑襟

25

題松田氏奇雨亭

26

室容千界 主賓厮結眉 塵緣吟裏尽 閒

味

座 来随

茶続盧仝蹟 27 休耕: 徒建耕雲菴、 禅参□ 北師 仍設香饍為落成之慶山野、 尋常 様雨 何 似 K此時. 奇 与祐徳格峰養主応請偈以賀

万縁都放下

縛屋倚岩根

鬚髮雖皆白

身心不敢煩

晒衣閒日月 曳履一乾坤 只麽能休去 貴図報四恩

28 朝日歳朝口占

朝日 流輝野老家 更無 句紀年華 東風吹送春王印 印破白梅 远花

29 贈禅灯賢姪随 師 上黄檗

訪道尋師真丈夫 又凌秋浪侍中盂 只須憐殺蒼生渴 莫使活龍臥草廬

参須還箇実参漢 豈学諸方五味禅 送出柴門重握手 叮嚀且使祖灯伝

別、 多久茂炬檀越、 不勝感激、 以宰官身潜心於此道久矣。 卒賦一偈、 以伸餞意云 茲辛酉秋従府君赴于燕都、(天和元年)

30

活麗界中活麗人 馬啼撥刺不留塵 須知万里江城月 半片影分寂寞浜

躋攀翠壁一 層層 絶巓別有役師語(役小角) 合付天台羅漢僧

煌燿

和

31

遊彦山

光千古騰 · 口占

茆店少留倚竹欄

主翁取意慰嶮艱

更無

句記漫景

山色渓光灌肺肝

32

途中

此日特枉駕告

33 通玄橋 普明十景其

不得殿兮不得前 中間 一歩始通玄 君看橋下寒渓水 净緑如苔涵九天

34 暮春登山

初疑迷路入仙家 窈窕懸崖樹影斜 老嫗待吾酌茗 渓辺苔厚坐看花

祝華頂老檀越稀年(鍋島直朝)

老檀初度契新元 35 至徳恰如春日

山寿考豈能測 天道退閒未足論 華頂築成多少景 安禅上界一乾坤

暄

枯涸黎民霑恵沫

芬芳蘭桂壮家門

南

声声天外鶴 点点寺前梅 不猜巨霊手 仰看宇宙恢 吾年六十四

満鬢雪咸堆

考暦老懐惨

啜茶酔

酿 開 36

庚午試毫

37

鉄関禅人和余歳旦韻用前韻示之(鉄関元参)

若個寄身幻化家

教佗鬢髮変霜華

獅林行楽春来別

不弄人間桃李花

38 普明月岑法子至山、(月岑実皎) 偈以志喜

棒頭挑出少林月 喝下走奔□北雷 半夏至山増意気 番雨洗碧崔嵬

39 黄檗開· 山先老和尚、 本山第五代高和尚承旨、江府開緘、和尚、先朝特賜大光普照国師之号、 而老祖在世蔵而不出。今迄二十三 示四衆敬述小偈賀之

周示寂之辰、 以

欽 師 在世化風尊 賜号親封降檗園 筐裡蔵光蔵不得 放為日月耀乾坤

讃並: 作、 伝附之、 恩遇之深不堪感愧、 賦之奉謝云

|松平綱茂公之金湯宗門不讓、裴張遐爾所咸知也。(鍋島)

茲特命画工描余、

陋質賜以題

40

州主

元是信陽童□子 育王恩沢灑蒼顔 一朝愧落丹青手 **鬢鬢雪高不尽山**

41 過鉄関上率 座山菴

幻居随処楽 松根抱石古 瘦杖 雲影映花丹 一条寒 鉄做高情士 破夢還成夢 出 招余開竹 山 |又入山

42 息心菴即景

尼

簷楹横岳気 師 棲隠地 苔滑径 画壁見池心 難尋 寄語 移榻樹 虚寰士 間静 此 繙経 来 燈影 濯 深

43 栗棘早春

満胸無室礙 新春今幾日 双眼 栗苑愜心情 1 転円明 白鷺翹泥 小子為来賀 暖 午窓夢数驚 蔓著穿土

44 広寿開· |山即老和尚小祥忌(即非如一)

末運: 扶桑能 幾儔 蚤哉回棹転慈舟 雖然台嶠記三世 走却須弥軽

漚 愁

堂上輥毬光忽滅 風顛筯斗影長留 棒頭更為冤讎切 **忝得今年梅雨**

45 同七周忌

既是鈍置 雪峰老頭陀 因什麼拈香慶讃 両寿峰が 雑 劇 滅後 入画 図 鈍置人不息

46 同三十三回忌

買金須還金 将錯好就錯

47

禅門句子片言無

徒剝栗蓬欲作珠

忽聴吾師

臨 遠忌

拈香卒唱[·]

唵 蘇爐

吾兄英気別 朝日翠峰和尚(翠峰性覚) 豈混末運才 入塔 認得曹源路

今日黄金骨 随気月印水 和光送入来 処世心如灰 〔諸人還見霊骨光麼、以払指塔云〕 一朝報緣尽 飜身入輪 激馳滹沱雷 廻

湘 南潭北外 卒堵倚崔嵬

竊期恵日照桑東 48 同小祥忌 豈識獅絃曲

調終

歳週来春夢裡

松梢月落起悲風

- 31 -

49 同七周忌

歳月蹉跪去不留 吉祥峰下句難収 七年閒夢怒原也 弟為師兄薦茗甌

50 万提侍者塔前香語

金以火試、人以言試。汝道一見忘所知、 何曽労孤疑。

大雄山下虎、為狗又作獅。

侍者良遂云、 我今為汝証明作虎声。顧視左右云、大衆護惜性命。 禍事禍事、 師便帰方丈。

51 朝日山安国禅寺掛大鐘

下云、 第一声通耳根。又鳴一下云、第二声徹心根。

鳴鐘

又鳴一下云、 第三声落在何処。

良久云、

東迎日兮西送月 晨昏考擊福無量

52

不堕金銀銅鉄数 大檀越信州太守綱茂公、(鍋島) 大姉二尊霊 一輪高. 転涅槃城 求薦先考乗輪院殿全機良運大居士・先妣柳線院殿正室寿貞(鍋島光茂) 驀然一 句投機処 釈梵吞声共漆行

雖然如是畢竟何以為験以払打卓云

風吹楊柳千秋色

魚躍寒氷波浪平

53 普明寺殿高岳紹龍老居士掩: 土

経 賞弄的。 現成受用的。 歴官途、 即今移在無影樹頭、 功成名遂、 誰敢得怪老僧者番特来、 逸老花峰、 更向何処栽培去。 坐花眠 同入如幻 月。 此 三昧。 是普明· 何故師資有誼護法。 等殿高岳紹龍老居士、 有憑且道、 八十八年間、

生前

挙 钁子云、

便掩。 好手開基基尚堅 桂翁添力培那辺



鍋島直朝墓塔 (普明寺)

54 祐徳院瑞 顔 実鱗大師 入 塔

多年閑却薜蘿闥 昨 夜踏飜明鏡台 莫向聖凡問蹤跡 従来祐徳碧崔嵬

謂 而

桂老今日為院主。 挙著豫嘱後事於岩泉菴主、 女流之中丈夫児矣。 惟祐徳院瑞 顔大姉、 挙著拽柱杖、 依之老僧、 雖処高貴家、 畢能瞥然蛻蛻。 **遶前卓一** 向付一枝鉄如意、 不為高貴。 豈不是善知善終者耶。 匝云、 所牢 籠 以表他日信也。 朝、 毀形披緇、 雖然如此、 聞染沈痾、 法齢 末後 競 知其不起、 垂 著子、 八 旬、 不妨 可

巑岏石壁劈空去

華厳玄門八字開

55 撮空軒賢忠居士鎖龕

此是撮空軒主、三十年来、受用底様子。 要来便来 要去便去 空裏日影 水上浮漚 即今栗棘老人、 攪之無跡 矢上加尖去也。 取之忽空

看看、亀毛払子打筋斗。

56 本寺鐘銘 有序

完。 也。廼為銘云、 母次之。今微誠欲報其万一耳、 鍋島和泉守藤直朝老檀越、 復有渋川氏信女真常院者、 同格峰上座、延山僧於本邑開山。 餘匪所知矣。 発心捐俸、 鋳造大鐘施之、 猗歟言也、 至孝至順、 扣其所志。 山云円福、 与鐘弗磨、 則云、 寺名普明、 君恩如 以同悠久者 営構大 Ш 父

渋氏啓信 徳化磅礴 無応而応 万類咸若迷趣頑蒙 如同瓦礫 考撃以時 靡不省覚欲振綱宗 無先警策 警策之大 鐘是多益

57 法華経石字墖銘

霜清月白

従茲国基

共山

|円福

彼所志、 言也。 復蹙然。 佐嘉県有清信士、 既成、 登山、 則不然。可謂夙有信根、 蔵于垂井山滴清禅寺、 就予乞銘。 頃聚石繕、 予陰視、 写法華妙典。一石写一字、 能種福田者也。 世之修福者、 而建石浮図於其上層級。明朗宛類、 信士、法諱道参、字宣玄、姓野口、 猶如鬻市者。 一字作一礼。衷誠之篤、 既獲重価而貪心不已。 江東阿育王宝塔、 殆乎不可 全家 而扣

無感激 大 為併 書以勒諸塔上。 庶幾無愧 辞矣。 銘 云

奉仏甚

謹。

先是以酤酒為家産。

適聞

人説、

酤酒

過

患。

翕然棄之、

軽於脱髮矣。

予由是不克

有 男子 城乾 隅 克操心 情 為物 |不駆

蔵之以塔 日 二奮然 聚石 家 観者覬覦 代 觚 写巻凡: 而此 功徳 八 寧繫有 祈救: 金 無

通貫 **疇業酤酒** 独妙脱 今霑醍 摸 醐 譬如 中辺 Ħ 昇 味 不偏

不 枯

又似蓮花 出 泥 開 敷 我心 亦 爾 猶摩尼珠 遍照昏衢

此処在処 故心写経 百妖锤 函蓋 合 浦 符 後人随 若人信受 喜 莫憚 無不越逾 . 崎

詩銘

刻以巴歈

禅 58 桂巖朔(桂巖明幢) 小伝

守者、 親。寛永戊寅、禅師年紀不知厥系統之審詳也。 師 諱 自暦応及康永之年際、 明幢 号光巨、 信陽松本産也。 自此以来二十有五代而畢、 後村上天皇御宇、 誕于寛永丁卯元 (四年) (四年) 属仕尊氏将軍弟直義朝臣之幕下(足利) (足利) (足利) (足利) (足利) 不丁卯正月望日也。俗姓之祖先、

下。

往

歳 久

戚 遠 有淵

辺伊賀

光仏頂 国師 号惟岳、 況又恭点震墨、 後改謼光巨。 年十有二而出 以尊賜霊源之寺名。 原夫一絲和尚者、 家、 岩倉亜相表弟也。 既而 玉 [師不計罹疾病。 疾病。正保乙酉之年、(三年) 拝称 端 崩 廬

居焉、 之親。

以 故欲 然於江 旬 賀祝乎。 底 歴摂陽難波之津。 上黄檗道場、 到 褝 為感佩、 封 | (長崎) (長崎) | (長崎) 招禅 師 国 有九齢之寿像、 富 騰 宇之禅室、 年 視 说煙. 漓北之浪 師於本城 七十有七、 城 国 牧豎野 且 Ш 永源寺化蛻。 要密 寺。 水 是時 等、 餐飲蔬 遍加崇尊、 故有許客来職 錬潜服無違其和 而号見桃。 而始謁即非和尚于豊之前州広寿。十一年辛亥、(即非如二)(豊前国広寿山)(北川朱尊、日礼月拝。寔哉、仁慈孝友、是則天一 并賦 棒 国師賜桂岩之別称、故今也遍龥矣。 于時禅師不図芳訊旅館、始為会談。 淹然挹対。 而乞余於寺院之名。 以伝道於即 頭敲出嶺南之春。 泉、 陋 故禅師追念渥恩垂 .讃 開熊野之嶙峋。 停住十有二、于時一派一挙赴愬。 恵 貺 熟察禅師平日之機用 也。 非和尚。 焉。 則可開 自爾高城之道風振郡邑、 時惟宝永二歳次乙酉肇秋初浣、 其大活現前 故附荒堂旧跆之遺名遷移之、 故今也遍龥矣。元禄丙子之春、寛文十二壬子復月四蓂、禅師 頤養上寿慶筵、 一灑泣涕。 ト 居 箇年、 甚哉、 何啻尸 可 然後不接眉宇八年、于茲癸未之孟夏、元禄丙子之春、吾賜本州之休暇、途 證甚者也。 于茲豫窺風林、 是其所期也。 懐恨之切也。 居龍見淵黙、 法露之徳光輝田墅也。 吾先考云、 性一者乎。 禅師為賀普照国師之誕辰, (隱元隆琦) 禅師年四十五、而開法眼, 耋前 以喚円珠寺。 肥 之容 前拾遺 故約使画 其誰 復於河林 庶幾夫禅師 而 1貌強: 雷轟之類 寛文七年丁未 敢述於禅師乎。 綱 茂識 工製禅 健、 金剛 厥後有所 児童走卒 謎席於 豈夫不 乎。 山 師 麓 舌

貿

峰鬟凝雪寿山峻 何模図中法眼明杖響無蹤杖有声 丹娑黄袖徳輝生

泊 如上人

59

興教大師

碑銘

並序

飾也 錽、 鍐、 祖叢切、馬冠也

携へテ上京ス」 十三歳ヨリ、 院旧記」ニ、「上人 集鈔』 六巻、 解」二之四、 『元享釈書』 一葉至十五葉、『撰 Ŧi. 自十 一恵 ŀ

夢高野明神、

慰諭曰、

来何暮乎。

至冬登高野山

遇明寂・永尋等囦匠。

機鋒相扣、

不少譲

洛シ、仁和寺ニ到 円林坊ニ随ヒテ入 十八歳ヨリ、 是、実説ニアラズ。 ト伝へタリ。 当山

野河辺、

必果所願。

詰朝之南紀、

果於河辺得石手荘契券。

尋於此荘、

立一祠。

即根

来寺之

伝フ。

囦 明 算琳賀」、 髻也。 淵古文。 「釈

蓮花生殿中。

上人到必座蓮所。

師輒謝之曰、

非微僧戒徳所使、

乃陛下

誠信所感耳。

於是

大師諱覚鑁、 宇正覚、 肥 前 渆 人。 桓武帝 五世孫、 平将門之裔。 家世武略、 父伊佐平次兼

識 識携投仁和寺寛助大僧正 有勇名。 俱舎於興福恵暁公、 師 幼而 聡敏 聞 三論五教於東大某公、 仏及人天之尊、 助知為大法器、 求仏之志甚篤。 依祖 恵解日進。 師 遺滅、 先遣入南京、 毎不茹葷腥、 師嘗夢一貴婦人、 兼学性相 焚香礼仏。 抱於膝 一 両 宗、 甫 干三 Ļ 習 塺 催 知 元

仁和、 頂曰、 鏟桑受息慈戒、 汝雖大法器、 恨非吾寺之宝。 修習瑜伽軌。 於他山必興密教。 十有九重遊南京、 我当護助。 益深権実之幽頤。 我即春日明神也。 翌歳昇東大戒檀 十六帰

度、 二十有七旋仁和、 未獲見悉地相、 従本師僧正受灌頂。 及承覚秘訣。 始見焉一日、 又謁理性賢覚僧都、 永尋諭之曰、 究一流秘奥、 此山大師入定之後、 初修求門持法者八 廃圮相仍

宏偉、 祈親 必須任其責。 明算・ 琳賀等、 盍努力乎。 踵継修葺。 自是志願崛起、潜図営造。 然尚不能復古之輪奐、 且講学陵替。 聞稲荷明神握福柄、 良可歎也。 輒祷之一日 師之器字

因幹事将赴海西。 先詣稲 嗣 乞加衛。 神附女巫、 謁之曰、 上人不必遠遊、 宜速帰。 紀州

権輿也。 大治中、 花蔵聖恵親王登野山、 談及営興之願。 曰勿慮、 吾賛襄之。 還京、 啓鳥 羽

上皇。 日。 因憶夢事、 上皇臨幸並慶密厳院。 上皇先是不豫、 速召之。 見其儀貌、 心祷弘法大師。 日詣白河離宮、 不殊所夢。 俄夢一沙門自南来、 甚重之、 天顏怡然曰、 即勅為: 手執柳枝、灑香水。 御願 上人来臨 無幾、 朕先知之。 大伝法院成落慶之 覚後病即差 前夕夢白

晝作 念加 不知孰 乞加衛」 釈書』、「遊 『釈書』 護忽一 維範 似勝 云云 作行 作「持 蚏 女託 九

必坐蓮 某所。 上皇詔 因 夢白蓮、 茲、 鎫、 所、常如此。 鎫応 云 華生 入宮先 詔 鳥羽 殿 来、

院、

聖慧親 Ę 号華

山

号一

乗、

寺名

|円明。

根

Ш

勃興之由漸也。

康治二年、

師染風疾、

十二月十二

一日趺坐

一於円

崩

号鳥羽 〇三井 勧 広沢六流之 僧 修 寺 覚 派 初

正。 海、 正。 勧 三宝流 号三宝院 修 醍 野 寺 本祖 醐 實 流 寺 大僧 也 定 僧

乃

邁気衰、

断

無文思。

公勤請不止

於是為之銘

銘

E

凡 昔、 皆先遣 遇 処於伽楼羅 聖 益 夢大唐慧果和 **離殊**、 加 中 優渥尋蒙旨。 ·使宣命、 炎中。 志 願 萴 尚。 或見満堂澄 各建曼荼羅、 0 就聖 至今見師之貌、 想丹衷、 恵親王及三 水凝渟。 傾底付之。 符青龍歟。 不異所夢。 井覚猷、 時見真然僧正、 保延 日 動修寛仁、 動修寛仁、 往藤相 以後、 師豈果之後身乎。 国 影現於艮隅 常座室中。 思 醍醐定 通 第。 海等名徳院、 相国 楓樹上。 自孔 師曰、 下 隙 -庭迎 某自少誓弘密教 窺之、 語之日 拝 稟密蔵秘旨。 日 成 矛 仗師 弟子疇 動 尊 賉

専寺、 営興新 急往 駆之。 周 聯室 院 恢張宗教、 屯 跨越 弟子往視之、 唯見 本寺、 吾願足矣。 徐歩赴根山。 欲配高祖永鎖定扉、 果然。 弟 蓋眼 子聖 奸黠者、 战根清浄. 順 親見之。 以矢鏃 不若 力也。 取 又師曽喚弟子曰、 鑚 出 師平素禁見人。 **其膝、** 枯 骸。 矯事論 則見彫· 訴、 木像 六群 有狗入伝法院、 率 輩 数 血 疑 流 百 而 至 三嫉之。 地 競 汙燈 師心 入密厳 議 油 日 悲

崛、 之、 者三十六人、 形勝不譲 輒 起定復本身、 配流 野 峰 遐島、 ·豫締: 構 残党誓伏被免。 宇、 為終焉之所。 今号錐鎖 而勅師帰本山 不 -動者、 伏望留 是也。 此 奏曰、 永祈宝祚。 時六群兇暴、 根山 田乃昔役優婆塞経行兄暴、達天聴、 鞫# 勅允之、 即為御 行之霊 捕 願 巨猾 等

根 寺 Ш 귪 |之始 廂 袖 祖 也。 中 -結印、 師自記云、 恬 然而 昔大広智三 寂。 行年 四十 |蔵依金剛智三蔵、 ·有九。 嗚呼、 宿智自啓、 伝 五字義、 定恵均成、 修及千日、 実広沢之一 対秋夜 満月

申報五蓋 障三 昧。 弟子 亦受此秘訣、 深 信精 修、 得 初位 三昧。 師不 測之徳、 応 推 此 而 知。 今茲

大夫備 壬完得 師 降 前 .涎 Ħ. 百五十. 太守 之 地 鍋島直 ·年遠忌。 後人慕其 條公、 徳、 越庚午 懼其霊 就 其 完 跡 基 廃 趾 禄三年也〕 絶 建精 除 地 舎、 冬、 建 石 \mathbf{H} 誕 勅 生 欲 諡興教大師 院。 示 諸 以年 不 朽 代悠遠、 价 肥 人索予銘 前 荊 今為林 藤津 郡 莽 子 能 辞以 美荘 朝

五字。 有一 受秘教也 釈書、「 釈書』、「和 徳」字、疑 鎫 可従。 以問故 迎 拝 尚 相 諸 玉 作

||今見||云云、『釈 阿闍梨 ` 五字似勝。 : [今師至恐

地

解代

:設

恐忘

霊

跡

大守遠図

乞銘

勒

石

兀

釈書」、「願」作 想」云云、『釈書』 釈書』、「宗」作「密」。 如相国夢闍梨、 趣。

青龍」 寺、 慧果。 似劣。

六人 世時、 婆沙論』。 納愚衷乎」。 ·六群比丘」、出『毗 真然」、弘法之徒。 比 成群行非法 丘 釈尊在 也。 單

陀

黒

難

馬

師

栖 非

遅巌壑、

以尽餘喘。

蓋此時既有披緇之想、

為親戚所繫留、

[頓舎。

禅師

知其意、

乃将

有大丈夫気概、

安能臻此。

大師

日語吾兄格峰禅師

云

念対境起、 末由

塵中決不

-可処

也。

啓伝 大権 法会 行 蔵 證初 自昔. 無方 三昧 法 青 門擅 龍 再 誕 利 見扶桑 辯 無 凝

遠忌回 沢流 於戲奇矣 薄 源 肥前 根家鼻祖 藤津 ·半百 勅 子条孫枝 Ш Ш 諡 挺粋 興教 蔓延率 産 勒 斯 徳 徫 金 人 #

禄 Ĭ. 年歳 在玄默君 灘春三月穀 日

瑞応 七十 九翁泊 如 運 敞

龍 海 実 珠

60

祐徳開·

山

瑞顏大師

行業記

後身」。

藤公、 時。 公女。 大師、 若有夙契者。 藤公、謁吾師桂老和尚於郡之福源、 (桂巖明幢) 於大師為祖母也。大師未笄、早知三 屋宗寛〕。 苦自何而生。 大師 諱実 皆不幸早卒。 年甫二 鱗 先是大師生子男二人。 号瑞 況生 一歳、 顔、 平承誨和尚。 大師深為哀悼、 前准后清子内親王自養為子、 洛陽人。 早知三宝之可敬、 俗 長曰文丸〔法号淡月幽照〕、 扣以出世之要。 失之今日者、不亦自愧乎。 姓 藤氏、 日夜哭泣。有至喪明、 父花山院前左丞相定好公、 香華供仏、 因受戒法、併求法名。 恩踰餘子。 以為常業。 一旦慨念、 由是一 次日式部 准后乃後陽成院帝第三女 断 洎帰前泉州 永断、 母 愛為苦本、 篤法門師資之誼 〔名朝清、 鷹司 不復続二念、 前 刺 関白 利史 直朝 (鍋島) 法号仁 愛若断 信 尚

行業、 亭側、 為加 月也。 鋭志斯道、 可不謂之得法喜禅悦之楽乎。 初其喪二子之時、 和尚嘗題其像賛、 閫、并不許尼輩出門、俗客往来。其他規矩森厳、雖大方叢林也所不聞。 所居院、 證明、 誌諸 造自寿蔵、 於是大師領尼数十輩、 延之居焉。 蔵次者、 於世誠難得。 称為季世異人。又格峰禅師承命和尚、 以備百年之後。 憂悶之極、 有瞥時和身桶底脱、 即祐徳是也。 庶使後世読之、 況又変形服、 大師今歳春秋七十有九、 晨誦夜禅、 鬱結為疾、 此日工竣、請余視之。 越明年、 知尼流中也有其人云耳。 追蹤鉄磨、 娘生面目今既別之句。 猛省之後、 弗敢少懈即起。 特請和尚於院、 自匪従般若中而来、 将大師立為本院開 所患頓除。 自念残生之不可久存、 惟大師生於華胄、 自是歳掩関逮今一十七歳、 薙染以遂所志。 大師所得之過人、 而其強健、 山始祖。 疇能爾耶。 和尚見其操守如斯 不為富貴所籠絡 実貞享戊辰夏四(五年) 猶少壮之時。 乃就院後石 蓋尊其行也 以此 余今略其 迹不越 可知。 壁

大興沙門珠龍海、和南譔時元禄十七年歳次甲申端月吉旦

佐賀神野町大興寺乎。大興寺、普明寺末也

鍋島直條

61 肥前国能美庄誕生院記 鍋島直览

所産 肥 則此寺伝名与旧記、 唯茂林深奥之処、 前 地 玉 |藤津 也。 . 郡能美庄 故往昔創寺名焉。 小 合可以證之。嗚呼、 石碑僅存而已。 深木村、 ·而已。按禅僧虎関所撰:元享釈書曰、今不得其縁起、則未詳其営建之始。 余伝襲之邑内也。 覚鑁者密宗一派之祖、 村有寺蹟、 日誕生院。 而其道化之隆、 爾来世移時変、 覚鑁上人、 村民伝言、 肥前州 継誉於海師(空海) 堂宇皆壊 覚鑁上人

伐林木、 以再興之。 因記其起云。

者也。

後世誰不敬宗乎。

余毎歴此寺蹟、

慨然頻起懷古之感、

常思我幸為邑主。

宜待時而運



也。 有矣。

寤与寐所以恒一者、吾仏也。孔子奠両楹、

要聴遺嘱。 君告余曰、

源君曰、

或曰、

西来師。

或曰、

是我家所嘱也。

覚後以謂希

死生天所命也。

順是天命而卒、人之大順也。

且休、 新殿、

勿以相囂焉。余曰、各在傍、

乃請釈氏、

占所夢。釈氏歎曰、 懸額于祠堂。

夫知夢之所以為夢者、

賢也。

知夢之所以無夢者、

高宗得傅説。

乃至荘周為胡蝶、謂之物化耳。

寛文甲辰仲秋念八夜、

夢余先妣高源君疾病也、

以薬餌不進、

豪族侍傍者、

不耐哀哭焉。源

62

泰智寺祠堂記

鍋島直

朝

非夢矣。

何暇占之哉。昔者達磨大師、

者所以正性也。正性者所以新民也。

新民所以修徳也。

徳始于譲、

譲為徳行之端、

如進而殿 師 也

観震旦有大乗根機、

艤海得得来。

謂之西来師。

肥前国能美庄誕生院記碑 (誕生院)



誕生院外観

殿(ママ) 源君所以嘱大守、 蓋取于此歟。 余然其説、 遂以為額

断橋実外

左丞相定好公、母鷹司前関白信尚公之女。銘曰:家而成其志。銘非余為而孰宜為之。是所以余不言 褓中失恃、 其弘願如此。 復建楼葺、 之修冥福。 淡月幽照童子、 63 西海道肥前州藤津郡永渓山泰智禅寺鐘銘並 老孺人自処室、 4°。厳君直朝翁、同老孺人相議、以余為浮屠氏、嘱余為之銘。 ^(鍋島) 以時扣撃、俾其所薦亡者、与其人天幽明異類、由音聞以返聞 且自謀曰、 於余為家弟、号文丸。年甫十歳、 鐘者所以肅叢林斉教令。而寺未有鉅鐘、 A宜為之。是所以余不以不文辞也。老孺人姓藤氏、父継志鞠養。于是吾儕兄弟至得成人、其恩已為罔極。 因病而卒。慈母老孺人哀悼不置、乃欲為 序 、嘱余為之銘。嘗想余与直條在襁由音聞以返聞自性、斉成無上道、

宜補苴之。

因命鳧氏鋳造

耳根 無常 霊光不昧 善哉母氏 乃考乃撃 此方教体 無我 歴 如月在 成斯勝縁 厥利無辺 苦空真詮 有声鍠焉 音聞為先 猶広長舌 惟仏設化 爰鋳法器 薦福亡者 醒爾昏夢 闡出 出爾迷纏 仮之而宣 台簾高懸 遍覆大千 九泉

時貞享二年龍飛乙丑七月二十五 普明比丘実外格峰、 Н 和南

父為花山院前 況又許我出

64 寿性院円成実相大姉墓碣**墖**師分骨

茲。 桂老人、為開山始祖(桂巖明幢) 先妣 不愜余意。 至此既 又有所思、 太夫人、 延宝四年丙辰秋七月、 由是今歳秋七月、 得四十七 将万治三年庚子秋七月念三日掩妝。 請于開 Ш 即 [和尚、 本山是也。 同開基寿墖、 值先妣一十七周諱辰。 将大姉改為大師、 然本山為先妣旧 重新造之。 法号曰寿性院円成実相大姉。 蓋以追贈也。 所造墖 因分泰智禅寺所蔵先妣霊骨、 余為薦其冥福、 暨開基高岳老居士惠(鍋島直朝) 故筆之墖次若此。 葬于邑之泰 寿墖 延請本 自先妣 入墖 制

掩

度 師

于

時宝永三年歳次丙戌七月念三日

男格峰実外、 和南謹識

藤津 65 || | | | | 藤津郡鮒越天満宮縁起 邑菅神殿縁起、 記左

酒 以徳村民不忘霊像、姉聞之大喜曰、菅原 松岡 陰賜。 本郡 髮号自寬〕、 見 五. 社 鮒 務染川 越村 Ę 右衛門教明·堤市良兵衛宗澄、 故以為建一社于郡内、 此社未無縁起。 天満宮、 請神像於洛之吉田、 「盛貞、 菅原乃神之姓也。 永設祭祀、 司社職矣。 扁菅神殿者、 若不記厥由、 以報神徳。 於是僉言、 則威徳日新矣。 相攸于此 嘗請神像、 祐徳院殿老大姉所草創也。 此三輩鮒越田畯 他日恐失大姉所草創、 而寄言花山院前内府 Ш 越山中始有多名焉。 及造霊祠。 締構神祠矣。 頃余登越山謁神祠。 [司農之役]、 然地名合神姓者、 l焉。今天神地、菅原者也 延宝八年九月二十六日也 府定誠公〔大姉宮 (^{藤原)} 先是大姉者夙照 可以每村天神擬之。乞師 仕大姉蒙恩渥者也。 時多多良正兵衛宗俊 〔大姉実家之弟、 豈非自然冥感耶 願、 祈之天神蒙 後薙 願 大

因藤公時平之讒、. 故所不辞也。按左: 順 記 被悲士、 神号云。 本大政威徳天、 来由、 而 正暦年間、 兼書 今作西都雪恥屍。 併塗鴉菅神殿之三字、 按左大臣、名道真、字三、 扁額、留之殿内、不亦宜哉。 尊重仏法擁護、 左遷太宰府都督而薨。公未死之日、自裁疏訴天帝。故其霊奮激、 遣勅使于宰府安楽寺、 之三字、塞其需爾云。 生恨死歓我其奈、従今望足護皇基。 而救済衆生也。 天穂日命之裔、菅原是善之子也。 余以不文不果、多多良・酒見之二氏、請之再三。 詔贈太政大臣正一位。時神託而 如夫天満天神、 託禰宜良種、 菅公始末、 詩曰、 于時昌泰四年 九牛 現大内 昔為北闕 毛顕之、]北野之 而 為日

⊯時寛永二 (宝) 併: 歳躔乙酉九月吉禎日、 天開断 橋、 誌焉

梅 :嶺道

66 禅林口実混名集序

高岳太守長子、(直朝) 知也。為法用心 列以世次、 其人或自称之、 原夫古来諸聖賢、 馬鳴大士、各得其称者、 為法用心、 普明断橋外公禅師、精通 (断橋実外) 日称之、以作当時口実者、 係以小伝、 嗣法桂巖幢大師。 (桂巖明幢) (七) 本名之外、 分成二巻、 因其事焉。又如泉万巻南匾頭之類、 他日殺青、 別有表徳号。 精通禅学、 名曰禅林口実混名集。 亦多矣。江湖之間、 以公同好、 牧衆之暇、 有因事号、 欲便学者之稽考、 孰曰無補宗門哉。 慣呼異名、 能仁寂黙具十号者、 誠先徳奇迹異名、 因才識指形容、 於其真名実号、 而採録る百九十人、 公名実外 等閒開 表其徳也。 無不品藻 肥前 巻、 還失所本 鍋島 蓋 脇 皦 尊

時正徳辛卯元年仲秋吉旦、 住江左法王山正宗寿国禅寺 雪梅嶺、和 (梅嶺道雪) 其別号也。 和 南書于 思古軒

前住州之普明寺、

断橋

有 也。 铆法利之大、足播数百年之下矣。 钾不出世、然与古来称菴居知識、 普明之山瘞焉。 酸嘆弗已。 使翫古之士、 断橋和尚、 不起色。 67 唯 病既篤、 跋断橋和尚所著禅林口(断橋実外) 於戱、 乃称賞古人格外之挙指、而[橋和尚所著禅林口実混名集 六月十八日、 而知其徳行也。於是竊取附之剞劂氏、以公諸世焉。 先是翁捨第為寺、 而莫矚版本、 是歳春三月、 右脇而 是為憾耳。 逝。 翁預嘱以後事、 又如斯集、 幻住華頂諸祖、 与父公同延桂老師(鍋島直朝)(桂巌明幢)。寿六十又四。闍維 而間与門下納子拊掌清潭、

越遷寂之後数月、 輔翼宗門、

自然同其軌躅、

則豈特矯正一時泛濫之弊。

混名著者、

捃摭為集。

苟欲

惟翁四十餘年、

抱病嚴壑

不必待翁之登籍、 至自京師書林、

亦撾雷鼓而為得

親書遺嘱、

蔵諸書櫃。 遵其遺命、

夏五月、

遽示微恙

海

開巻、

竟奉霊

骨、

建塔於

閣維之後、

祝国請法之由、

詳載在夫開堂録中

·陳希夷睡像上進記

.

華蔵世界

今略其細。

翁之所述、

東渡南遊録併詳略図·重編枯崖漫録



『禅林口実混名集』 序 (鹿島市民図書館蔵)

実海界輪

図等、 秘在普明。海荷法門猶子之誼、納誨多年于茲。 況於此撰哉、 遂述其概、 以識歳月云。

正徳乙未孟冬上澣日

劣姪実海界輪、稽首九拝、書于肥前州円福山下法泉禅房



『禅林口実混名集』跋 (鹿島市民図書館蔵)

68 高嶽山断橋和尚年譜序元徳大愚 (断橋実外)

之迦葉、 余云、 而廃実義耶。 実義者也。夫和尚列祖通称、 有客問云、師編断橋禅師年譜、 大徳不踰閑、 迦葉伝之阿難、 客曰、 然則仮義与実義之辨、 小徳出入可也。蓋於此一法中、 爾来祖祖相伝。至菩提達磨、带来震旦、伝之慧可、慧可伝之僧璨 其来尚矣。如巡寮者、 以和尚称。 吾聞檗山未巡寮人、不可称和尚。 可得聞乎。 有仮義、有実義、不得二者全、 余云、 時仮義、 直指単伝、出於釈尊、釈尊伝 不足貴也。汝何執仮義耳、 不是違清規乎。 則吾取

序。 家流、 不包大。 有黄河向北流、 時維享保六年歳次辛丑林鐘望日 大美人包小小小不包大 素做是可盡小種好了次提的人的更 医鸡猪河即是 南南州不及南河谷經可此此 女學 百九河 無米 五八新東 獨有 黄河 后批流水石 將維寺不保六年出次幸五林鐘望且住丁不上五次經 一時段并即見一余所以如為一種,打接四字唱者,任住九十種東流地京地大樓 **鮮用級信用指法司者と我者大機可以公正等係及** 不避免落門城南置是所謂彼其所同又愛耶六中其和淮縣入林等我在今落不言天下皆為 省得之折據如是的日相美未,曾間断,是所讀官 在院元傅之即外即非後, 箭光,本六傳之程嚴,極 傳之整能 慧能大情 無臨藻 雞濟三丁二情 至下後 司傅之借整,僧整傅五道信道信傅之弘為弘悉 義。宣司不尚即失巡察納丁今代其回魏不遇 超宗越格。 貴仮義者小機也。 以不朝東。 有時呵仏罵祖 『高獄山断橋和尚年譜』 于大士山法姪、 (普明寺蔵) 可以 可謂非河耶。 接声聞縁覚部。 何拘 元徳大愚、 時仮義耶。 尚実義者大機也。 投伍 是余所以和尚称断橋也。 拝 書 断橋和尚墓

伝 天下皆然。不覚落利域商量 豈可不尚耶。 即非復帯来本土、 夫巡寮者、 伝之桂巌、巌伝 弘忍伝之慧能、 始于今代、 是所謂仮義也。 、巌伝之断橋。如是內勺哥?√慧能、慧能六伝至臨済。臨?(臨済義玄) 是禹力所不及、而黄河名越于九河。大真包小、 其間纔不過六七世。 何足貴耶。 是的的相承、 支那 其初濫觴入楚無底、 有九 可以至菩薩及仏位。 河、 未曽閒断、 無水不朝 客唯去。 今滔 是所 東。 是為 況禅 独 滔 謂 小

僧璨伝

道信伝之弘忍、

臨済三十二伝至隠元、爲《隱元隆琦》

兀



豸。 安父翁、 箇 吾願 罪。 瑞 飛金 紅 明于千 賸蒙怒罵呵 奇異思。 東渡南遊記 辞住持、 于宇宙 廉退且公者矣。 1来名 有 鷹道友、 元年辛酉、 :方便。 足矣。 不感心乎。 錫 希読者其勿以徳之言 間焉。 亦慕三登九詣之武。 寄跡乎石壁、 歳之下。 世之人、 自此発出家志、 尋師 韜光乎嚴泉、 看 徳観 咄鞭撻不知幾多。 今専拾集矣。 徳聞父言、 房乎普明、 · 専拾集矣。雖以徳不敏、 (元徳大愚) 陳希夷睡像上進記・道和 - 。 恭惟吾法叔断橋外翁和尚、 ^(断橋実外) 雖然至其自行化他、差別因婦 因事去故里、 乎海外、 凡師所経歴、 非千人之英、 師 兼得博渉俊才、 :席。師与円珠和尚相議、 (桂巖明幢) (意徹底老婆、乃止行脚。 捨第宅、 養聖胎、 不勝雀躍之至。 全化儀、 事老母、 拙 向父語巴鼻。 率家人隠葛谷。 再擬遊湖 雖中年発憤南詢、 自然成寺院、 則 非師之徳至也。 建寺乎久保山 ・道祖神記、 古篆和歌之名。 終身乎天開。 万人之傑也。 徙居乎乾城。 閉関乎祐徳。 差別因縁、 海。 父云、 有所親見聞、 乃礼師翁剃髮、 師止之云、 未幾、 後来安静為居住者、 遠貪愛、 元禄十六年癸未、 姓名 又追憶曩昔、 便学者稽古、 嗟、 其道其徳、 答吾被謫失家計、 強三請、 勉礼誦、 重師命、 無端却 如其篆字金剛経 嗣続、 辱師卓錫于此地、 雖於師之徳不敢妄議、 吾已老衰。 忘其孤陋、 交肩乎僧倫、 回 結不思議因縁。 董席乎安国。 開堂乎本師、 薦福乎先妣、 載在 区而 亦非 復喫熱拳。 徳之父者勝氏、 有分者、 \Box 弊師梁山以大士山(梁山宗秀) 汝亦多病。 皆係師之餘光。 采而 碑、 每欲使汝出家。 • 端。 抛身命、 華蔵世界図説 輯之。 作近隣。 不待仮文字顕 正宗眼、 坐荊 菲飲食、 然師未以徳為箇中 其餘文字語言、 蓋不依筆硯功、 因親 考古今、 棘 不宜 極知 其先小城 敲法乎福 師 徳 席得聴未聞 尽力乎大衆 致美乎法門。 創菴乎葛谷。 豈可瞻之仰 遠遊、 層踰 幸汝遂之、 後住無人 瞻 未有如此 混名集 無所 源。 礼 加 族吾 還乎 焉 顕 屯 天 逃 厭 著 赫

再三就師請

得徳輔席

竟遣徳塞責。徳固辞不許、

勉強従命

爾来雖

眨、不知何字。

他家韲甕裡、 旧痛未忘、 粉骨砕身、何足報答。 敬記六十餘年不宰之功、 用酬蓋天蓋地罔極

之恩。雖然不免大寂光中、大被呵責。

讃日

確定金剛因烈焰 大願乗輪応化仁 娑婆来往八千身 区分華蔵顕全真 要瞻格外人真相 眼光離見蓋天地 独露威音那畔辰 朕跡断橋 周 刹 塵

享保六年歳在辛丑仲春日

住于大士山法姪、元徳大愚、拝手敬書

永寿寺祖隆

永寿退注 明王雲 70 上棟銘

永寿根柱 明王霊蹤 沐厥名者 無不尊崇

方祝寺門增光華、古壇也一新矣。更祈保祐檀越家門興隆、武運亨通、 親命工匠等、 於本殿之南、 伝聆当山所権輿者、 重令修造之、不日落慶。 晨香夕灯莫以怠也。歳月深遠、 凡一百有餘歳也乎。 宝閣結構兮、煥然改観。 維時寬永十三龍在丙子秋七月初三日、 傳兮、煥然改観。得旼合家胥攅、 (畴) 而堂宇朽頽矣。享保壬子春、当 桂子蘭孫、 当邑君增房公、 踊躍仰瞻耳。 新拝移尊像 福寿兼全。

時享保十七歳舎壬子夏五月十一蓂至祷。

当寺第四代沙門祖隆

敬識

鶴山野節 (人見竹洞)

釆

疑来。

而如望其景。 且問其風土、

因記之所謂。

昔者有肥州伐筑後之軍。

不知何人、

其及旋旆、

海路晦暝、

不辨

而山

水之美、

宮社之事、

歴歴悉備。

足未躡其境、

而如入其境。

目未睹

其景、

余聞其所話之縁起

名帳、 也。 三嶽 不伝焉。嗚呼、古書不伝而難考之。然有古縁起之説、則其来由既晣矣。 川玄雲為介、 余曰、有古縁起而足矣。況我無大手筆。何以得塞其需乎。信安固請不止。 其社務森信安者、 Ш 乃無此社。 在 請余以其社緣起曰、此社雖有古緣起、 肥前国 既聞信安所語、 藤津郡木庭村之上。 有志於欲紀其事。 古縁起之説、 今茲来于江府、以藤津郡主備州牧藤直條君 山有三峰、 似有来由之旧者。 然詞太鄙野。 故名焉。 一号藤嶺蔵王権現、 伏請以奇文麗詞伝於後世 因欲考肥前風土記、 余於是考神 霊 応之地 侍医立 然今

71

三嶽

Ш

I 縁起

有之。 郡曰 津涯、 訓称之。下宮以字音称之。今社務之父信次、 於上宮・下宮之中路、 辛丑二月、初造斯宮。 因肇開斯山 即我采格之所也。 宮以卜神之冥助。 藤津。 雨請晴、 此時村中老少咸集、 舟中士卒皆失色。 而建祠。 有佐藤氏者。 必有応焉。 佐藤氏便登藤嶺験之、果如其夢。 乃取宝琴、投之下流、 寔光仁天皇宝亀二年辛亥二月也。其山上社畔、 即琴路是也。後花園帝長禄三年己卯二月、 有妨祭事。故有此経営云。 昔聞毎年二月十五日、 夢和州芳野神告曰、 忽見山上放光、 共唱神楽、其詞朴実而有古風。 琴停能古見庄。 由此軍艦得達于岸、 万方経営、 我欲降跡藤嶺。汝試尋蘆葦生処。 有泰山府君祭、 以三嶽別称琴路獄。 於是信知向之山上放光、 建社致祭。 仍其地為下宮。 昔致祭之日、 而後認其山則三獄藤嶺也。 無伝之。 初建中宮。 前国主拾遺信濃守藤勝 至今有蘆葦。 自古上宮・中宮以字 時四條院仁治二年 唯有御 以其地窮僻、 先是洪水汎濫 亦蔵王霊験也。 田祭、 有三幣帛 自後一州 至今 造別 再

感其霊蹟、

寄附山林、於今存之、其山也。披荊棘、

渉石径一里餘、

其宮殿皆以茅茨

公

村外、恐村南。山南、恐山西。

号両岩 錫 焉。 歳十 風道 称焉。 刹 北 賦詩. 於彼。 鑁嘗住 蓋 澗 登又降、 山 青松翠柏、 有負柴者、 連栽 深 之、 傍河畔而 流 人稀、 骨、 蛍 因 亦 日 泛授之。 当其 有焉、 月朔 [滴水] 権現。 此峰 其制: 為之縁起。 俗呼称吉野、 桜樹数万株、 樵歌近 豈能棲止 日 丑刻、 而又一 北 福 連枝交色。 淳素 隣寺暮鐘 至叢祠。 云。 傾笠者、 集之在社務之家。其南有吹野村。 這源寺。伝称仏光国師西 (無学祖元) 是三嶽之末社也。自華 斯 有岩窟 其 下 Щ 報、 也。 於茲乎。 多遠近之勝、 信安又請好書之人題: 佳 社務詣上宮、 喬木成: 境也。 毎其 則郊 倚 牧笛遥聞、 其景如睹 実似分金峰之一 前 高 山 日 野村 四望、 花開 本城遠村、 可三四丈、 面両岩突兀、 或云、 南入山· 林、 堇 画図。 揭之為八景。 託神於榊奉之。 自華表西転 苺苔封逕、 爛漫撩乱 共寓塵外之志。 而 昔有一 中、 遠近 偃 勝也。 |蹇隠: 日 其形魁奇、 来之時、 馬場之東数百歩、 下臨碧潭。 諸 石 扁 至大野村。 尼棲、 潭明 然、 額 峰、 幽 香風郁 来遊賞花者、 不可 森列. 月 偶 暫居斯地 出民家。 僻 日桜蹊白 故俗称比丘 及中卯 通田畝之中、農父樵老屢来還焉。 有朝鮮 皆是社之前 如 河水 開 郁 ,具状 在目 就東則池 日 三 嶽晴 画 屏。 也。 雲 信使 Ė 是木庭村也。 彩雲片片、 也。 曰松山宮。 有石華表。 帯従其間 特有 日不知幾千人、 尼窟。 寺後滴-雪。 、来聘、 後山 行祭祀之事。 田 曰吹野帰樵、 不知往昔何人之所窟宅。 Ш 麓 各請諸 中之景 本城也 峰 有薬師堂、 従此 出 彩仮銀: 水激 秀者、 余使其写字官雪月堂 又山南謂 木庭茂吉建之。 村外経岩径絶巓 踰 縈林絡岸、 、勝也。 儒官 石 Ш 其間 似 城於此、 日 大凡古来伝 日岩屋。 |梁 涓涓 苦田! 為壮 其前 松 題 此 坂路屈 山 有村名梯 詠 啼 社 不絶 村。 観。 開 其急如箭 有牽牛者 鶯 自 望群玉 伝 馬 華表外、 若非 或唱 舌以 説 曲 有 場 謂 有古 季三 昭 因 釈 前 毎 社 覚 昭 稍 仙 以 歌 府 左.

和二年壬戌冬十月十五日和二年壬戌冬十月十五日

天

三嶽山八景 (題は 巻五十四による)

72 林 整宇 [鳳岡全集]

叢社春深一路斜 桜蹊白雲 満林韶色奪明霞 神風添得化工力 花染晴雲雲染花

吹野帰樵 林鶏峰(林春宗)

松山鶯声 木貞幹億 柴楚何須巾

小車

茫茫吹野路猶遐

檐頭日落暮煙遠

不識前村何処家

満山松樹入春深 黄鳥遷喬自好音 縦得丘隅岑蔚処

莫忘澗底歳寒心

前澗 流蛍 荷渓狛庸

蛍火熒熒何処帰 岩局雨過夜光微 山人不用臨書卷 又傍澗陰自在飛

萩隠伊聚 (未詳、伊庭春貞か)

隣寺暮鐘

殷殷鐘声送夕陽 本城遠村 紺園樹色隔隣荘 (深尾春庵) 晚風吹落満林露 結作豊山 夜霜

石潭明月 東皐逸夫 相逢行処説桑麻

平野迢迢小路斜

縷炊煙晚風遠

料知山下有民家

印得潭心月一規 晚来風度絕軽漪 石頭兀坐天光発 初覚従前捉影癡

三嶽晴雪 鶴山野節 (人見竹洞)

嶽 雪高佳気浮 寒光耀日与天侔 神山疑是蓬萊島 雲峙瓊瑶十二楼

鍋島直條

73 先妣淑人寿性院大師小伝

適家君帰自東都、見其樵悴枯齎、屢延群医而薬、治療無験。及病革、(鍋島直朝) 城。 肥主拾遺勝茂公、知妣淑聡。乃与高源月甲寅、生于肥州佐賀城。天性純懿、 実七月二十三日巳時也。享年三十二。如其家人、固不在言。凡聞者無貴無賤、靡不哀悼焉 猶生之年也。 況世相無常、 妣即以手加額、 内助之暇、好読本朝簡篇、 鹿邑士庶民黎、 先妣藤氏、 於是命屏群婢、 妣克守家訓、 諱彦、 又与家君及兄弟妹訣別、 誰保長久。 惟留老女三四輩侍側。 恭謝鞠育之恩而 亦咸称徳。家君仕官于東武。隔年在外、 未嘗挟貴以加人。婦道尽誠、温柔撫下。 父曰意安、 仰願双尊大人、寛解此理、 又詠倭歌、妙于翰墨。素信仏業、礼像誦経、孜孜不怠。万治庚子(三年) 母清光。 乃与高源太夫人相議、以嬪家君。慶安己丑六月納聘、(二年) 日、妾今西帰決矣。 屢延群医而薬、治療無験。及病革、大父母親傍枕辺歔欷 既而設几焚香、正念合掌、高唱弥陀仏号、安然而逝。 侍女擁余兄弟而到前、 故龍造寺五州太守隆信公之孫女也。 自幼事父母孝謹、及長挙止寛和、言詞蔵静。 使慈親痛悲、雖不孝之甚、 専修浄業、 妣居其室、 以故侍婢家隷、 妣引首側視、 則是蓮池一会、 持以堅貞、 処置後事、 妣以寛永己巳五 皆懷其恵、至於 又若無顧念者。 是命也。而 行以善須。 雖死之日 丁寧遺嘱 来帰鹿 顕祖 考

是歳元禄壬申七月、正当先妣三十三回之忌辰。第由幹以春季覲于江(五年) (五年) (直條) (直條) (直條) 一女早卒。直孝出塵為僧、号格峰、不) 證涅槃也。 就泰智寺、 家君為命治 斎諸緇侶、 幹幼而孤矣。 [直孝、曰孟幹。一女早卒。直孝出塵為僧、号(鍋島) (鍋島直條) 大人一循古礼、治日殯于‧永渓山泰智禅寺之後岡。 特臨忌日、 毎念懿徳、 啓建道場、 神喪魂隕 少申供養、 無任哀慟。 謹修一奠于霊次、 茲逢遠忌、 忍死書梗概、 預自客冬至今月、 名。幹継家仕官。 庶成高超十地円 以告後 也

藤孟幹、(鍋島直條)

世云。

謹誌

孺

74

宝善院寂湛孺人墓誌

請普明桂老和尚、受菩薩大戒。今年丙辰春、余嬰重疾、は侍婢懷其恵、家人慕其徳、至奴隷民黎、無不尊敬之。一 東遊、 称美之。其稟質寛柔貞正、 之如生之日。 観音二像、 故内外信服焉。 殊加撫愛。寛文九年己酉春、 六月十三日、 則温顔和語以諭之、 孺人留守。 姓藤 旦夕課経瞻礼。 聞者咸感至孝之志。内治之暇、好倭歌、 生于本州佐嘉城。 鍋島氏、 亦能事我家君華頂翁、極尽其誠、無懈無闕。 《編島直朝》、 極尽其誠、無懈無闕。 恭謹整治家務、取舎適宜。然無事不敢私決、 諱千代娘。 見貧窶者、 其傍設先考及余先妣之牌位、毎月忌辰、 孔有慈愛。厭紛奢守倹、 喪父。 喪父。辛亥秋、(寛文十一年)自幼聡慧、知志 肥州拾遺勝茂孫、(鍋島) 則施衣糧而裕之。或為病者助医薬、 知事仏而奉親、 今州主拾遺光茂、養為子嫁余。 疑忌不萌於心、 甲州刺· 学日野亜相弘資卿。 一出於仁慈之所感也。 和史直澄第四点 (鍋島) 見尊像必拝、 曽就屋後構小堂、 或与家幹議、或遠問余承旨。 忿懥不見於容。見反戻 自供香火、 [女也。 未嘗背父命。 或為亡者修冥福 見所詠之歌、 余仕官、 承応二年癸巳 貞享丁卯秋、 羞菜果、 安奉弥陀 直澄 隔歳 甚 祀

東行遅滞、孺人深憂之。雖身懐胎



宝善院淑湛孺人 (普明寺蔵)

Щ 中 於普明、 天乎命乎、 病甚革、妾命不過今日。 H 孺 万方求之無効、 日夜待疾、 又云、 旨貞享五年歳在戊辰時宝善院寂湛浄空。 而馳使円福、 人産児。 貞享五年歳在戊辰四月中澣 期已至也。 闍維于東北之小丘。火後無餘骨、 侍婢数輩、 哀哉悼哉 + 不解衣带、 啓陳其事。 禅師命左右、 十四日謂余云、 日俄発熱腹痛、 等。;; 《願請普明岑禅師、使徳福冬 《原岑寒皎》 無言, 無言, 国 無恃頼者。 孺人秉炬、 人無貴賤、 不離枕席、 禅師即至、示以末後心要。 唱弥陀号。 妾疾不起、 気宇不快。 哀夫藤孟幹 (鍋島直條) 無親疎、 薬必自嘗、食必先試、 孺人端坐合掌、 唯見青白如舎利者、 使聴臨終心要。 自是逐日大漸弥留。 聞計慨嘆。 掩籹之後、 余聞嗟嘆 余不堪愛慕、 孺人唯唯、 葬儀敢煩君子。 依其遺言、 余猶豫未果、 而退。 如寐而逝。享年三十六。 而後進之。 収拾葬之。 十五. 滴淚以記事実之梗概云 拾葬之。桂老和尚為、二十八日之夜、兴 余刻意労思為療養 若有所深信者。 日味 頻請弗已。 願以遺骨葬之円 余病少間、 爽、 謂余云、 比已時、 乃察其 為安法 送霊 嗚呼 四月七 更数

福

格峰議、挙其高(断橋実外) 大喜、乃以 直朝) 乃以 治室 中 也。 就山 法席 保山 竊聞 身嬰重恙、 尊慈墖 踐其言、 学徒雲集、 余兄直孝、愛其形勝、 其方便接化、 **捨宅為寺、** 也。 昔者呂公蒙正、 間 仏 種從 扣出世之要。 余今為斯記者、 構子院、 乃以寺号為自法諱。 峰後聳、小崗並峙、 為建墖蔵焉。 日玉泉谿、 挙其高弟岑禅師継席。 気困 縁起、 士庶風偃。 延和尚為開山 鐘楼、 不亦大哉。 (月岑実皎) **亶有時乎**。 体疲、 曰法泉、 故浮屠氏之崇梵刹、厳像設、 遂断髪披緇、 家世為法藩籬。 曰絶凡橋、 凡叢林所宜有者、 移宅居焉。 懶操筆硯。 余又造寿域於其側。 余鹿城、 庶幾此寺之法脈、 然其興而廃、 E 始祖。 日 東 楽、 更割古枝村膏腴若干畝、 和尚住山数歳、 店焉。頃桂老和尚得法於聖寿之後、晦: (∉巖明幢) 如門排闥。其間林樾蒼鬱、渓流清泚。 余細君法諱浄空、 辺境絶域、 日晴雨林、 由是余輩勠力、 以格峰為号、 茲将力病東行、 **日聖福** 顧余薄官之身、 畢備焉。 廃而興、 伝之悠久、 寺有十境、 素未嘗聞有正法。 日万古松、 日東明。 有厭繁之心、 師資之誼最厚。 非徒為夸飾。 因用故寺名、 専事興建。 在乎時与人而已矣。 強以書之。蓋又有所思也。 今夏抱病而卒。 力不逮古、 永充常住僧糧。 天和三年癸亥夏五月、 余家之瞻仰、 日独坐峰 曰般若松、 不数歳間、 旦謝事、 蓋欲使人人従縁、 自是嚮徳化発正信者夥矣。 榜山曰円福、 更為薦先妣実相太夫人冥福 晦迹於郡之福源。 而以護法以念、 日獅子石。 臨終遺言、 日 居民相伝為円福寺故址 貽之後昆。 和尚 鹿城之南十里許、 豁眼嶺、 退居東堂。 仏殿・禅堂・方丈・ 門徒若干人、 寺曰普明。 和尚祝国開 是為記 皆和尚之所名 葬於普明。 余自春已来 而入仏知見。 屏 則無以愧於 風 於是余与 余兄屢詣 崗 家鍋 君島 地曰 鳥 余

旨貞享五年龍飛戊辰九月下

護法弟子、

朝散大夫備州刺史、

藤孟幹、(鍋島直條)

敬書于鹿城

- 56 -

又思写 知君箇 万古松声談 置功全憑賢州牧 程翁闡法住此際 (鍋島直條) 相說肥陽霊気鍾 橋隔 是弟 間星希多佳境 76 経張 裡逍 君富 偶閲 潭道 断 兑 設般若 塵絶 || 才雅 鍋 澂 島 (直條) 揮毫収: 翰墨風 崇信 瑯 世 遐 鹿 雲根獅子振威雄 泉 念消 邇嚮 琊 鳴寒玉響淙淙 城 Щ 亿 南 [裡悟前] 拾入記 流 無家世 風 畔 融法喜濃 気吐 来憧

中 虹 隆 憬

独

遐矚

崗

列 坐

錦

筆 豁 話 願

頭 眼

万象 (王維) 不労摩詰等

瞳 空 同

政暇.

Ě

刹 在 粛

忻逢毳侶

心

緇

素二

難

為内

外

護

力 脈

況

Щ

檀擅桂柱閒

晨鐘:

暮鼓

薬規

喜少林

仏 且.

閣

僧

房

華構 正

重 涌

太守普 有梵宮 崩 禅 寺 詑 寺 喜 扁 而 普明 作、 Ш 寄以 闩 福 博 粲

月

IIII

A state of the control of the

『普明禅寺記』(普明寺蔵)

自古賢仁多如 因億当年呂蒙 此 Ĩ 倚 現宰官身度迷蒙 世 雨 冊 晴 僧 林 園 柲 植 Ħ 福 輪 洪 紅

尊慈

墖 画 峰 毎

側 屏 頭 遊

聊 花 散 彼

徙 似

韙

哉揭:

此記

章麗

永使後昆仰芳蹤

躬

戊辰仲冬日 峨 山 月 月潭頭陀、 書于所居含玉

林(鳳岡)

キ織物

「後漢書」、

一符伝

ネリギヌト、 綺紈〔アヤギヌト、

美シ

賓客ヲ敬スル

「錦繡

1

1 コト

蕃

۲

陳蕃伝、「為 下榻

以礼待

77 故朝 散大夫備 前 刺 和史藤公墓碑(編島直條) 銘

鵞株鵞蜂(製、 簟冬缸、 後、 矣。 茂、 寮廡悉備、 孫女也。 泉守忠茂、 以鍋島為家号也 以少弐為家号。 前 其先出自鎮守府将 譲二万石。 無遠 国 而今信其言也。 隔 寛文十一 全領家禄。 号龍造 歳 而不聞、 明暦元年乙未 明暦元年乙未 東 詩 傾 載 蓋 西往還。 分附五千石於次男帯刀正恭、 酒 分領封邑二万石。 寺也。 |通志、 年辛亥、 相 問 B。四世孫直茂、 為西海道豪族。 語 年乙未二月二日、 正茂曽養肥前守勝茂五男和泉守直朝為継 軍秀郷。秀耶如…… (編原) と。故朝散大夫備前大守藤原氏 (編島) 行無隠而 字。 條行曽孫曰景頼、 翰墨論文、為體而設、如旧相識。逐月歴年、如日相識。 謹倹奉己、 或号泰窩、 大夫十七歳為家督、 開悟心機。 秀郷曽孫文行有二子、 忠茂有故近侍台徳公幕下、(徳川秀忠) (徳川秀忠) (徳川秀忠) 孝養尽誠、 経資十 或称蒙山 直朝乞骸隠居、 生于肥前 有子曰 別建一家。 世教頼、 始参江 託情文学、 国 拍肩挹袂、 下榻而待。 或名楓園 1頼平。 [鹿島。 氏、 言則 諱 府。 帰休肥前。 人 日公光、 始住肥前鍋島邑、 頼平曽孫経資、 宣條、 、知之。 有兄為僧、 大夫者、 覃思詩歌、 翌年叙爵。 嫡男信濃守勝茂、 両情無隠、 其来也鄭崇知履、 或 曰 嗣。 特賜五千石。 字孟幹、 惟不為也、 曰條行。 | 臥隠 僧、号格峰。創 (断橋実外) 乃直朝之子。 致仕之日、 起臥任心、 也。 其明 義等骨肉。 楽耽泉石、 任太宰少弐。 蓋此其人乎。 公光曽孫季益 任大弐。 我与老父弘文院学 年賜 為則 以 伝承封籍。 頣 創 不幾而卒。 其去也陳遵投轄 養精: 直朝 暇 建 母龍造寺隆 人見之。 念絶 普 花晨月夕、 帰 至其子経直 明寺。 為主 紳 国 子孫相! 按家譜 綺綺 其子正 西住 嘗聞 紈 自 以 次男和 此 寿終 堂 信 夏 肥 斯 而 而

釋 来、

特設

徐穉為功曹。 豫章太守、

不接賓客。

去則懸之」

履声」、『漢書』云、

賓客満堂、

、輒関門、

遵嗜酒、

書履声』

上

我識鄭尚

「漢書」

陳

除遵伝云、 毎大飲、

庾亮、 タル 六射天地四方。 色承顔 ハラウ也。 方ヲ射ル。 ヨモギヲ以テ作 ラワヌ様ニスル 雖有急不得 ノ顔色ヲ見テサカ 『晋書』孝友伝、「柔 承顔候色」、他人 皮陸 唐ノ人、 郭子 嵆叔夜、 矢ニテ天地 以桑弧蓬矢 陵 、怡々尽楽 字 /١ 分日休 直條 信篤 竹林 元 厄 1]

動

クニ礼

歳

承続采邑。

及十五歳

叙爵

改名和泉守直堅。

嘗葬大夫肥!

前円福山普明

寺

題墓日

正

取客

車

-轄投

井中

也、 益 禍 而時之屯也。大夫之為善也、難三同ジ 易云、遠也爾、義気凛然。而群小以四爾、義 也、 夫阿権 脆随 拭涙而· 寄心仏 不 見之矣。 聞于当時、 以此疑大夫之不幸也。 死善道。 如仇讐。 衣食知足、 臥牀告謝。 宝永二年乙酉之春、大夫罹病、 福 信之。大夫不与貪鄙者同貴、 知晷之移、 可以修己據徳、 乗、 附勢、 去。 又何疑乎。 非在器者也。 其柔如韋。 志 小人以此疑大夫、 噫、 聞 其行彰于後来。 不可負、 悠然自娯。 噫乎、大夫之生也人疑之、大夫之死也人益疑之。 執我手曰、亡之命矣。 話論義也。 善 利禄所在、 不覚漏之尽。 人称難矣。 然則何哭於大夫之不永世乎。 大夫不然、 大夫於此将何為哉。 而不得行於世。 気不可屈。 我則以為人之疑、 此 娶同族甲斐守直澄女、《鍋島》 (鍋島) 為善、 承顔 為迂為妄。 夫如 慍、 夫独加於大夫無愧焉。 可以福禄永終、 閑靖無言、 候色、 孟夏晦 事情 此 不与姦佞者同 小人以此疑大夫之道与衆相乖異也。 雖為匹夫之賤、 夫多年旧交、於心不忘。 其善人乎。 大夫之為学也、 為闊。 因其所好以悦導之。 Ĕ 人皆畏死重生、 守正不与時推移。 行其義而已矣。大夫之生也我信之、 皆非也。 易簀江府。 蔑以及焉。 上不 而不得享其寿。 生 無子。 伝曰、 哭於我無所取交也。 好之如芝蘭。 以 九原 則其死乃所以保其身、 不知大夫者也。 可以訂正是非、 聞 享年五十一。 侍妾生数子、 大夫暇 鳴咽悲泣。 如可作、 善人国之紀也。 下 大夫不然、 形容枯槁、 小人以此疑大夫、 不 可以積善一家、 凡俗賢利口、其巧如簧。 彼為悪、 日 日 以化。 我其与帰歟。 道之行不行、 大夫不然、 講習射御、 皆夭没。 我聞其危急、 君子亦! 大夫不言不為、 而不得信於人。 塵視軒冕、 以 対語 語曰、 雖 此 "有趙孟· 其不貴乃所 如常。 疑 Ė 而 季子岩松独存。 大夫之死也我 大夫命 居安俟命、 嗣 為訥為遅。 善人吾 不忘武事。 不得保其身。 子岩 時也。 之勢、 大夫之有道 銖看 銜悲抑憂 飛駕訪問 風標卓 然其 松十 不得而 以為栄 之戻、 方鍾, 時尚 死 疾之 或 且. 守 牛

節 由 ル。 楼二登 秋夜

ル義。 「義方」、 方正ナラシムル 『左伝』隠公二年、 愛子教之以義方、 父ノ子ニ教 義 ラ以

蘋蘩薀藻之菜」、 弗納于邪」。 澗渓沼沚之毛、

進退

世 閲

ミツグサノコト。 左伝』隠公三年。

潢汙行潦之水」、 [左伝隠公三年]。 筐筥鋳釜之器

族及国 国子学ノ校長。 教育スル処。 天子ノ都城内、 物ヲ盛ル竹器。 以 上 中ノ秀オヲ 作 :品番 貴

0

頭

注

銘

統院泰窩実春大居士。

請碑誌于我。

昔者観其度量孤立、今也期其実履永存。

豈其可無辞乎。

藤氏餘流 野鶴之儔 久鎮西州 誦文講 蓬矢以射 武 継晷: 蘭芽早抽 焚油

嵆侶. 敷島 雲鵠之志 命駕 渺 渺 李郭 詞源悠悠 间 舟 陳雷膠黍 為我結契 皮陸 与君修遊 唱 醻

松風 約花刁塢 竹露消 弄月庾 憂 楼 眠対野 煙霞兄弟 鹿 酔 泉石 随 好逑 睡 鷗

薀藻言釆 逝者不返 有路 管宮可差が形円難留 行蔵無求 4 令聞千七 天奪騏 孝子奉祀 驥 楽哉斯丘 義方貽謀 蜉 蝣

正 徳元. 年辛 卯 五 月

前侍読学士朝散大夫国子監祭酒藤原 凉朝臣信篤誌 (林鳳岡)



鍋島直條墓碑

78 秀天霊社之碑

有焉。 恤民、 奉旨爵従五位下朝散大夫、任甲斐守。歲丁丑、西洋教賊、聚反於後肥天草地。有策応命。兄、曰忠直、已在主器矣。寛永乙亥春、卒于東都邸。先侯乃命公之代朝覲。是歳冬十二月、三子也。母岡部氏、神祖為子、以配于先侯。以元和乙卯十一月十二日、生公於佐嘉城。公三子也。母問部氏、神祖為子、以配于先侯。以元和乙卯十一月十二日、生公於佐嘉城。公三子也。母問部氏、神祖為天霊社者、蓮池侯始祖直澄公之祠也。公、本州先侯藤原勝茂公第前肥塩田郷吉浦至誠山秀天霊社者、蓮池侯始祖直澄公之祠也。公、本州先侯藤原勝茂公第前肥塩田郷吉浦至誠山秀天霊社者、蓮池侯始祖直澄公之祠也。公、本州先侯藤原勝茂公第 下之感徳也。公之薨也、 従釈氏葬、三分霊殖、 寛文丙午、公年五十有二、告老伝国直之公。乃卜隠於此、遂落髹、以義峰自称焉。 (宍年) 甚者矣。 長而治邦家、 證真諦。 嘉奨厥烈。寛永十六年、 于時公甫二十有三、代勝茂公、将兵往征之。越明年賊平。 不知老之将至。 寛大則簡易。 五十有五。薨前一夕、澡浴更衣、 自奉以倹、 公崇神道、 語在霖禅師所譔祠後碣。 至誠也者、忠之実也。士大夫之重義軽命、惟恐其後。作人之效、豈非茝芷之薫耶 孰非至道、 寛大簡易、 嘗学于駿州浅間廟祝宮内少輔昌賢、 待人必豊。而至其察臧否而黜陟之、 常語暬御臣曰、 以其一蔵於茲山。 先侯遂割郡邑、分封公于蓮池城。 闔郷如喪考妣、 以至誠名山。公之於神道、有取於茲焉。 政之善物也。夫威厳而慈仁、至誠以行之、上之所好、 神之与釈、是似不純矣。 百年之後、 屏婦人、 其二則瘞潜龍・慶誾二刹。 久之不諠、不啻甘棠之不剪敗也。 与子弟各永訣、 吾必休於是山矣。九年己酉春三月五日薨。 則不毫有仮貸。 神解妙悟、 蓋道雖殊乎、各有所長。 公、 咸劉之功、 性厳而仁、 黎明安然而逝。 禅者不拘泥。 深造厥奥。 潜龍、 所謂庸庸威威、 冠乎西諸侯云。 今宗眼也。 納諫任能、 里老邑人、 又旁通禅、 不拘泥則寛 乃奉遺命 取其所 逍遥自 下必有 甚哉 朝大 公斯 愛士 夙

曳筇而祠奉之。威霊顕赫、

錫福除災、不可殫而述也。直之公時、特築壇立祠、扁曰秀天義

徳、 今猶如在、民之不能忘、 歳歳勿替、 峰霊社。則係於神祇曹所命、 更以公生辰、大行祭会、 毋以歳豊歉増減。 非盛徳至善、 所以褒其徳也。於是歳時祭不怠。寛保癸亥之冬、(三年) 追遠之徳、豈不厚乎。嗚乎、距公之世八十年矣。 遍饗里老邑民、民以大悦。乃下令曰、自今之後、 孰能与於此。公子女八人。嫡曰直之。直之公有一男? 今侯欽崇神 (鍋島直恒) 霊威凜然 与夫春祭

祠之言思 民不能忘 嗚虖公徳 川川 無疆 先卒。乃立其弟。是為直称公。今侯則其嫡長也。銘曰、

延享丙寅八月十二日

儒臣岡白駒、 拝手稽首、 奉命敬誌

月岑実皎)

79 題自 画像偈

以随身供養也。 棒与乱喝、 名。又就予遊殆垂三十年、雖不隣舎而住、 忘礼法。 居士法諱実眼、 型身供養也。予 唯 参之不以忘其報本之義而益勤、不辞而泚筆、輒題:実非今時浅識之所宜跂及、可謂勤矣。一日遠寄白絹、預需予真賛。 弱冠発正心、深崇禅法。逮先師曾開山於鹿之円福、時来礼時実眼、号無参、姓勝屋氏。肥州鹿城人、世為鹿府君家臣。 電激雷亦奔。不管弥天過、 深結仏祖冤。 数数来訪、 無参無参、 風雨不渝也。 時来礼謁、 慎勿効伊悪辣。 輒題其上如左。 於戱、 無参為人端 蓋欲他日絵予衰影 咨詢法要、 **覩参之厥為法之** 効伊、 謹 詞云、胡 求稟法 動静不 恐累

正 正徳癸巳仲秋既望(三年)(咄。

寓湖南 粟苑、 七十翁月岑、手書贈

作とおねが、またのあ不断人政取程者之際 如此有所能主要四方同主朝接入礼以室城窗 解前行数重月本の城 原名時間 法清 実践年在各被陽位氏把司原领人世五 以京都今次以下三将軍 終之名情為其一 小質補下連体操係 經常華泰丁傷物 被軍不是被盖取公司衛子表行行

月岑実皎像 (福源寺蔵)

草場佩川

君諱敬、 80 渡辺源大夫敬墓表 源姓、 渡辺氏、 称源大夫。父曰勘右衛門、 在泰智寺

至。

特褒賜宝刀、会在其歿前三日。又嘗有増禄之賞云。今也学剣之徒、共聚賢以立其墓表、属駅泰智寺。年六十有六。歴仕五世、忠労実多。且其武備文事、以教育士子亦已久矣。是以 韡紀行徳。 能以剣法率人、有賜物品。既帰、 皆得其蘊奥。又善国風、 邸十餘歳、扈還郷藩、 享和元年、 壬寅如月、泮林守株草場韡、拝書 韡重其輸報之義、 従君侯之述職、 服勤如故、 圖藩人士、蓋莫不蒙其薫陶矣。及己亥秋、復東。柳生君嘉其在薬版勤如故、兼掌度支。嘗在都下、学剣於柳生君。又就田村君講兵 按状聊綴其概。 能幹手蠱。文政三年、 無幾而病歿。時天保十二年辛丑秋七月十三日也。葬於浜 筆力謭劣、亦焉足以賛不朽哉 為儲君用人、再従其東覲、在江戸之 復東。柳生君嘉其在藩

世事鹿島侯。

君為人静黙謹愿、

孝奉備

81 日渉園記

家諭、 其中、 之非可格也。 不足異焉。故余曰、 取富貴如拾者必焉。 淵明曽為彭沢令、無幾、 至要也。 驕奢淫逸敗俗乱倫之徒、 何有剪伐之患哉。 昔名吾園。 男成章、 其大者也。 去鹿島之治下南十里、 有大勲労于 大監察犬塚貞綱之所居也。州公往来于長崎、必憩且宿、園林之光輝莫大焉。貞綱之 孜孜夜以継日之為。子之父既為大監察、 余日、子之言、 請名其園林。 柿栗橘柚、 詩云、 政事之失可論也。 国家可庶幾也。 蔽芾甘棠、 而亦日日渉以戒之、防事未然之前、 人能知園日渉以成趣、 而能脱然 余日、 浜駅之北端、 梨桑棗柳、其小者也。有草有竹、花之可愛、亦甚夥矣。 解印綬而去。其学之才也。徳之綽綽有餘、是也。但我之所取、則異於此。淵明帰去求 而亦戸暁家諭、 勿伐勿剪、 日渉園可乎。成章默而去、若不悦者。 成章曰、 苟能論政事之失、格君心之非、 抛 日渉園、 蒼然如煙、 召伯所茇。我民之愛戴州公、即今日召伯 善。 孜孜夜以継日、則文武之治可致也。是吾父官務之 而後始可仕也。 以告吾父。 欣欣楽以成趣、 且有園林。 鬱然如雲者、群木之成園林也。 不亦善乎。若夫国家亦然。 淵明帰去来賦曰、 故能知日渉以成趣、 何則能知退也。 其襟胸可想也。 則国家不足治也。 他日復来曰、 設為苟容、 能知退、 園日渉以成趣。 終不仕劉宋 則他 夏屋儼然在 松楠樗檪 日月累遷 旨哉、 何必戸 雖未曾 也。 則君心 日能 袁 展 暁 有 林 疇

安政丙辰孟春、

鼓岳西賛

拝具

年五十五。明濱按、先生、

畤

82 西鼓岳先生小伝

帰 宥 推 西賛、 春蘭秋菊各才情。 鼓岳衾中吟、 限韻課題、 庠、受業草場佩川、 敏有気概。 後以邑学助教兼監察。 十三、入侗庵古賀博士門、 途而卒。 偶 大雪、 適有 字叔襄、 適有鹿島侯之嘱、教経 ・淡窓及吉田平陽、 ・淡窓及吉田平陽、 ・淡窓自口、嗣鎮西詰 邑人無子者、 鼓岳被衾而臥、 動輒驚人。 時人惜之。 四山戴白数尺。 号鼓岳、 所著芳隣舎詩抄三巻。 嗣鎮西詩家三傑之後者、得西鼓岳為其一、而未得其二人。蓋当時詞人、治著芳隣舎詩抄三巻。頼山陽・亀井昭陽・広瀬淡窓、其他当時碩儒、多 略通経史、遂入藩学、学復大進。 後進之士、 侗庵有詩曰、 教授鹿藩生徒。 多愛其才、 又号芳隣舎。父曰忠能。 為鎮西三傑云。 迨起而下筆、 居三載而帰、 奇勝 頼以就材者多矣。 欲養而為嗣、 佩川別後得西生、 **麤豪好奇之癖、** 意思雋逸、 職于邑学。邑主給世禄若干、使別興一家成其志。 鼓岳酬詩、 衆留之不可。 皆不肯曰、丈夫宜自立、 世居肥前多久邑。 鼓岳工詩、 生、誰敵丹邱多善鳴。欲識二人優与劣、構造奇巧、莫不出意表。諸子相謂曰、 文政乙酉邑主命遊学于江都。時年二(八年) 深謝其不当。 老而不減。 乃独行抵多羅絶 一演。安政丁巳春、 一演。安政丁巳春、 一(家身) 其在江都、 鼓岳其第四子。 同窓諸子、 安依人熱。 遂傷于 幼而 陳早将 無幾得 月次 入邑 頴

姪鶴田皓玄縞、謹撰

于ノ字、恐干字乎。 民人靡疾」。 交綏、軍隊ガ退ク。 リテ安ラカ。 禅書、「方内乂安、 治

中

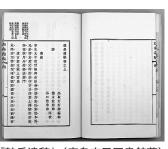
史』(『史記』)封

正

83 元可神廟碑 (嬉野)

其孫五郎通益、 関白道長公六世之孫、 夫聖王之制祭祀也、 Ę 日向太郎通良者、 有功烈於民者祀之矣。 、大将軍頼経命為杵島郡白石地頭。 有忠勲于皇朝、 越嬉野公諱直資、 賜之我藩神埼郡坂本邑、以為采地 称淡路守、 其先出於藤氏(藤原) 世守其職。至

生也 無罷敝、 猶存焉。 能脩武事、 十三世、 将 覇海 在昔亶父去邠至岐、 西徙于宇礼志野郷、従封更氏。其後裔但馬守通久、新築城于湯野田山、治益益、嘉禎年中、大将軍頼経命為杵島郡白石地頭。因以其地氏焉。世史 民無凶饉、武威方熾、 通久以天年終、 西 土豪屈服、 旗鉾 西指、 百姓嚮従。常信仏経、始精舎於大草野及川瀬、以祈国家乂安、而今 謚宗源居士。其嗣公是也。公五材兼備、 侵之疆。然素念公武力交緣、即遺使媾和。公意冷熾、震翼于郡県。当是時海内騒擾、于戈日尋、 恐傷其民也。今者天下匈匈、 丁壮苦軍旅、 克継世業、 黎民羸転漕、而駆諸公意兵者所以除害養 龍造寺勃起於国 以有天兵、 固其封疆、



『鼓岳遺稿』 (鹿島市民図書館蔵)

守リシ 邠、 移リテ岐ニ 国 周ノ 一居リシ 文王ノ 邠ヨリ

『字典』、不見恞字。

乎。按『楚語』、日 龍尾也。 月会於龍豬。 中八仙歌」韻法者 句不足。 銘文、 日月会干 蓋依「飲 注

謂十月時也。

天保二辛卯日会龍豬

有

田

陶

丘正

司考祺、

謹

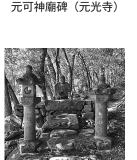
識

所以収而録之也。 族、開鹿島嬉野家。 与先師藍田出於宜 明濱曰、正司碩渓、 嬉野元可支

> 盛也、 七、 困窶、 于今矣。土人眷恋其遺愛、 強不肯下、 鉾鏑之下、 諡元可居士。娶池田侯輝政女、 非臣之願也。今隣境有鳥坂·浅浦村、民人大窮、田荒屋破、 終天而不朽。 属父老諭農業、 我豈欲之哉。 公率兵擊背、 孰得至于此耶。 黜遊惰挙義烈。 抜其城。 苟得保故土奉先祀、 為之建廟。 龍氏大喜、 生三男一女。世仕藩侯、 今茲土人慨然追慕、 於是一境感其仁徳、 歳二月初祭、 命公更氏嬉野、 則復何望哉。竟建降幡焉。 粛然敬享、 欲碑以銘焉、 百姓恞恞安堵云。 保先封、 且賜以邦郡。 如事考妣。 請賑撫之、 連綿不絶二百有餘 請文於余。 龍氏再攻鴻城、 於乎、 公辞日 公享寿九 即問疾苦、 余不勝感 公鴻徳之 功寡賞 年 有 拯 敵

激、 敢記其譜略、 謹銘

永年 子孫允詵 於鑠惟茲神 王室干城臣 -竭精 詵 禋 宗祖軌轍遵チの海が 天眷百禄臻 後胤会風塵 郷民懐其仁 智勇絶等倫 吉蠲供白蘋 文徳撫其民 桓桓兵気振



嬉野元可人形墓

石橋潤

84 聖廟祷雨文

呼、 於廟前、 主藤原直彬、恭用清酌之奠、祭至聖先師文宣王之神、以祈霊眷。冀回降鍳之仁、油然興雲、(編島) 生 化至型之道為然、虎風龍雲、虚実異体、猶能以感而応焉。況於天地鬼神乎。鹿島邑之理、唯至聖之道為然、虎風龍雲、虚実異体、猶能以感而応焉。況於天地鬼神乎。鹿島邑 人也。 境内庶民、 沛然降雨、 有何罪。 時維嘉永五壬子歳夏、 亢陽之為害也、 何有於民哉。然而遺禍於民、民可任其責耶。一二弗類之氓、 且俾善者無知所勧、 以致区区丹誠、 徳沢施于四境、使民穫秋成、 日夜嗷嗷、 人君政治之不善、有以致之乎。或因有司之失職、有以致之乎。責在其 自五月上旬、至六月上旬不雨、旱魃為虐、 不知所為。 且以奉待感応之慈。 而不善者無知所懲、亦為上天所不取也。凡霄壤間、 因此分命吏士、及諸社司曹、 而不罹艱阨焉。 伏尚照鍳。 因令泮林文学之士、誦読孝経千遍 祷請累日、 田疇亀坼、 而並胎禍於万姓、万姓 未得其効也。 稲苗将稿而萎、 因応感動 鹿島邑 嗚

85 釈奠

崇戴徳沢也。 維嘉永四年辛亥二月丁日、 併配享復聖公顏子、 鹿島邑主藤原(鍋島) 宗聖公曽子、 直彬、 恭用清酌之奠、 述聖公子思、 **亜聖公孟子之先師**。 敢昭祭于大聖至聖文宣王、以 尚饗。

谷口藍田

唐泉之山 峻極于天 神86 八天祠華表銘

茲合衆力

建銅華表

永錫福慶

感応昭昭

-明所在

明治三十五年十二月吉辰建之

谷口中秋薫沐、 敬撰

鍋島直彬

曩祖得髓公尊崇極厚、特寄以華表一基。(鍋島忠茂) 籽 八天社華表再造文 歳烈風折樹、 樹枝触其扁額、墜落毀損。 実可惜也。社司請其再造、 経年二百九十、 古色蒼然、 予恭為公之裔孫、誼不 使人自起崇敬之念。去

明治四十四年十二月十五日 遠孫藤原朝臣直彬、

謹記

可坐視、

更造揭焉、

冀永保存于後世云爾。

八天社華表再造文碑 (八天神社)

維時明治三十年十一月六日、旻天不弔、 88 妙法蓮華経全部一字一石之墳

慈親見背。攀号擗踴、

叩地叫天、

逝水不返、

歳月

極。 易遷、 風樹之感、霜露之愴、 何日忘之。謹写法華妙典全部、 一石一字、 聊表衷誠、 以報罔

願頓脱生死之苦海、永安円福之楽土。

明治三十一年一月十三日 不孝児直彬、 謹誌

89 鍋島直朝公贈正四位之記

明治 之尽力於民政、 直彬昕夕拝天威於大纛之下。其月十五日、忽有錫命曰、贈故鍋島直朝以正四位。 為子孫者、宜継承其貽績、 四十四年十一月、 開土田、 聖駕西幸、 通水利、 敬祖愛人、 駐蹕久留米、大閲武於肥筑之野。 流恵遺沢、 聿修公之功徳矣。 百世永頼也。 嗚乎、 吾家之光栄、 軍容粛粛、 士民忺忺矣。 何以加之。 是蓋由公

明治四十五年一月十五 \mathbb{H}

遠孫藤原直彬、 謹記

永 田碧桐

90

久布白·

.虚堂君墓碑銘

之者、官重其選択也。夫七大区、 之区長。区長之位雖卑、 而有吏務政治之才。余為君所知、 肥前国鹿島邑、 人情風俗自相異。 有良吏曰虚堂君。 君公正以臨之、 其任頗重。凡県令之施設·民政之要務、 姓久布白、 管藤津郡全部、 相交有年、 温厚以導之、遂使各部翕然相和帰一律。 諱兼義、 因余亦能知君。 其地曽係佐賀・蓮池・ 通称繁雄、虚堂其号也。君温厚公正、 明治八年、 皆由区長行矣。而以君任 君為佐賀県七大区 鹿島三藩之所領 君又励精勤職

・農産・工業之事、日興月進、

未数年、一区改其観。時旧藩士産業之方猶未立、君見

参事。 之恩。 政之重 酒見某、 長男兼武承家、 有二年也。 惜乎為二豎所侵、 弘文館監察。 其子孫世仕于鹿島藩。 其後至諱兼利之時、 義無可以辞。 欲為乃父計不朽、 篤朋友亦如是。 亦受之。郡長在隣郡、 亦随大、 以致此蹟。 絹始于此。 鹿島地適桑樹、 槍馬及炮術、 其在東松浦也、 職 及廃藩解其職云。 四于古賀某。 郡之民生益開。 則君之為良吏者、 葬於鹿島邑本長寺先塋之次。 豈非良吏乎。 其近傍各村亦倣之、 藩府改軍政、 其如槍馬術、 因閲其状、 此数者、 使之植桑、 二兼虎殤、 明治二十五年二月十六日歿于家。 子乃父所呼以為知己者、 佐賀藩主勝茂公、使其子直朝公、襲鹿島令。 · 夫絅堂公英明、 (鍋島直彬) 虎殤、三譲、四於 其十代孫諱兼能、 郡民服之、 毎有疑而難決者、 余所親見以知、 方政府敷郡制、 君之罷郡長、 則見余所未知者矣。君之先、 最至練達。安政元年、為藩主 絅堂公 近侍在江府。「《鍋島直彬)」「代孫諱兼能、実君之考、而納田中氏、生君於鹿鳥 以開養蚕之業。 之罷郡長、臥帰郷里也、 以君為世襲番頭、又任士 無幾、 **豈独待為区長** 為蚕業者多矣。 亦不与前任地相異。 転于東松浦郡長。 四於菟造、 知人能用、 而常対人称之。 君先配長島氏、生一女。 以君任藤津郡長。 滞而不流者、 君自捐資、 請撰其碑文、 ·郡長之日知之乎。 各成家。長女嫁于田沢某、 又任大監察、 是君之徳能服人、 其被選任者、 不復関世事、 藤津之人惜之、 距天保二辛卯四月二十一日之生、 良吏所以為良吏者、 聘京都織絹工、 輒就君諮之、 出於太宰小弐武藤経資三男諱資俊。 今君之長男兼武、 世雖有能文士、 其職権比区長頗大、 累進参政。 銘日 皆有為士。 会友賦詩、 兼利弟兼鎮為家老輔佐 後配中林氏、生四男三女。 生君於鹿島。 又得其計画・ 君披瀝傾倒以助 贈表徳頌 維新改革之際、 以伝習之。 銘乃父無如子。 二于森野某、 以君行状寄余 益可以見也。 而使虚堂君在参 優遊以送閒日 已而帰 君之用力者 君既長、 以謝其多年 施設之宜 鹿島有織 国 為少 之、 余 為 其

維才与徳

可以牧民

才也成事

徳也服人

- 71 -

事成人服 烏乎亦足 一碑百世 使人矚目

大正二年七月

辱知 碧桐永田暉明、謹撰

大内青巒

91 興教大師誕生遺蹟之碑

井原諸氏、 (喜代太郎) (惠代太郎) 此。 島。 覚鑁、 復興之、有故不果。 豊二山、七千末派、 発大勇猛心、 大伝法院于南山 吾儕未資之罪也。 曾就其地創建梵刹、 勅謚 然遺蹟荒蕪、 以再興之事。 興教。 證最勝覚位、垂化万世者、 更唱頓悟往生秘旨、 初随仁和寺僧寛助、 委于榛莽、 明治四十年、 脈脈継承、 尋余亦過焉、 既而智豊両派諸 称誕生院。 無復顧者、 迨今不衰。 根嶺衆徒正盛日代。中世廃絶、試 仰望多良嶽崢嶸、 苦脩精錬、 修観日新、 人、 我新義真言宗祖興教大師、 可禁慨歎哉。 洵可謂澆世希有也。 亦協力拮据、 長老、 誠為可惜矣。 霊応愈著。 遂得除蓋障三味。 B。 因相与語 旧藩主 (鍋島直彬) (鍋島直彬) (鍋島直彬) 偶訪其地、 拓地建塔、 元禄中、 法流之源、 大師以嘉保之歳生于肥前 泣曰、 蓋亦其人也。大師法諱 夙蒙鳥羽上皇叡 以表霊蹤。 藩主鍋島直條 王及郷之志士永田・(佐次郎) 乃謂此勝境而産彼 発于根嶺 大師霊蹟 嗚呼、 岐成 泯滅 侯、 信 追 如 欲 鹿 智 刱

重修遺蹟 妙幢茲翻 露光赫赫 長照乾坤初地薩埵 卓開法源 頓悟秘観 演奧独尊

遠美風、

報恩浄業、

庶幾人法紹隆

真俗徳化

青巒居士大内退、撰文並書丹

大正二年癸丑四

月

曹渓正 承三要印 這個村僧 93 92 光 嘱梅嶺雪上座 大眉性善 脈流今古 自讃梅嶺上座(梅嶺道雪) 接続還須越格人

百事無能 請 眼空四海

与世

何僧

弘開宝蔵利 鉄眼禅士発心飜刻大蔵、(鉄眼道光) 人天 伝少林灯 続仏慧灯照大千 今日驀逢雪上座 復建宝蔵院於当山、 正法流通綿国祚 聯灯続焰任 騰騰 為鎮蔵版之所。 化風不墜振獅絃

茲値落成、

偈以贈之

94

銅睛鉄眼時時豁

梵韻華音処処宣

滄海可枯名不朽

虚空点首笑忻然



興教大師誕生遺蹟之碑 (誕生院)

歴尽雪霜堅素志

枝梅発嶺南春

95 贈福 世源住巌法姪 (桂巌明幢)

五位君臣休卜度 大丈夫児気壮哉 三玄語要絶疑猜 瞻風覲祖嶺南 来 為人則出 満岩蓊鬱鍾霊 理 無礙 瑞 丹桂香飄遍九垓 出不為人事未該

位嚴明幢

96 題寿性院真蹟百人一 首後

天街小雨潤 普明桂嚴老僧書 地上百花開 点破頭陀咲 装成実相台

断橋禅師(断橋実外)

97 尊僧一律以貽後代

本無種族釈為氏 論舌利鍳多口 **罵詈眼高照白眉** 君父争能臣子之 綴鉢 嘆息後来継僧伝 糞衣超 世宝 嚴栖穴処畏人知 有何才識取名緇

議

界輪実海

98 大士山 八景詩並引

禅刹、 取之勝、 肥前藤津之坤、 名大士山。係于梁山大師手闢之攸。 題詠倶成、 村曰木庭。渓峰巒聯絡、 人以為得也。 頃匂余並伝後世。 而氓屋千餘口。 今之山主別浦 余固辞不免、 縦横 舟和尚、 里、 援毫賦此。 擬古八景、 世 称 寧非 択遐 勝地。 附 爾 驥 胼 中 尾 宜 . 創

之意、

為併博粲嗤

- 74 -

品字河流一道過三河秋月	雨下遠灘声細細貝瀬夜雨	魚龍化去乱蘆葦 池田落雁	嶽襯形雲瞑色寒太良暮雪	千歳招提遠市囂福源晩鐘	崖路凄凄黄葉村吹野晴嵐	鼎脚様高不可磨 三嶽夕照
澄潭影落影如磨	却思暗裡過瀟湘	倦翼畦頭秋作群	飄飄擘絮乱瀰漫	楼頭纔動透雲潮	落霞霽散露朝暾	白雲如遶又如遮
人心争似清光潔	通宵支枕和身冷	一幅是誰縦写去	憶曽破暁斉腰客	也看敲出黄昏月	家家笑傲秋将半	当時慣戦魯陽老
堪笑寒山興転多	滴砕十年愁客腸	横斜点点墨図分	慈動枯禅老壁観	声裡因何披七条	時引山風入竹軒	馬上揮戈光返斜

江野! 帰帆

看看非在非 享保元年秋杪 餘所 雲晒短篷月掛鈎

日夜浮来超物外

誰知天地

虚

舟

謹書于普明法泉禅房六如室

嗣法沙門界輪実海、

大士山からの眺望



大士山跡

99

独木橋横崖壁険 99 題断橋和尚所著禅林口実混名集得運道改

[盧至

合眼跳過活

通

険崖橋断尋常路 博哂。 嚴泉禅師、 峨阜 不許庸常人往 作此寄贈、 還 除却黄巖倫老輩

是誰親到扣禅関

鍋島直 條

愧老成、 並木氏左平童、今茲僅十二歳、 可謂奇也。因摘末字、 作唐詩一絶与之、 詠春初倭歌、 自書以示余。 乃吟誦 数 间

聊励其志云 (貞享三年)

妙歳揮毫雅趣奇

八雲影入一篇詞

詞林春早梅花発

101 竹崎 阻 嵐、 晩登観音閣

梁川星巌

風力遽如此 濤頭一丈強

雲仙立混茫 舎舟登彼岸

天草来縹渺

吾将乗蹻去 与汝共廻

憑閣送斜陽

浜駅 城城趾 古

[賀精]

里

斗絕丹崖飛磴懸 102

塁壁当時唯 扼険 **磬**鐘今日却安禅

憑将蘿蔓樹根纏 屋依 臨風縦目三州尽 流 水 連 山 下

網曬

斜陽満岸辺

無限波濤海上煙

獲漁帰舟急 江 潮

Ë 時

春風花満市

摇曳酒·

家旗旗

103

浜駅城趾 Ш

草場佩

100

風体精緻、

不

応有雛鶯乳燕知

楓園主人(鍋島直條)

- 77 -

百 城 律 師

104 行成 烈村懐· 古

憶昔大師生 誕地 星霜七百有餘年 玉楼徒滅 成平野 金谷空荒変頃田

草満庭花 自注、 復雪 右行成村懐古、 閒雲払 石 開山大師! 誕 生之地。 菴寂寂幾多恨 肥前鹿島、 堪聴風声落照天 于今現有古塚。

村人伝言、

覚鑁

屋 鋪。 而妊 湯池 小 便塚、 在路 傍。

開

Ш

遺

跡誕

生

娅

積石栽松今現存

古塚恋来餘

__-恨

願興梵閣欲

酬 恩

105 登岩 屋山

霊 遠登葱嶺沢 仙 窟古懸円月 、城辺 松樹怪 巖不 記 年 請 五彩 莧 花 煙霞諸界気 開 禅 石 下 六時 果為甘 鳥 囀 雨潤三千 仏楼前

自注、 絶頂 大悲閣 八悲閣、有大師坐端 (覚鑁) 落木風寒鳴細泉 坐禅 岩

何

年

明傷高 所濱日、百: 層祖作岩屋 年冬、 当藩祖 百城 僧祖直彝公之時、 (鍋島) 城律師者、長崎大 万里潮音眼下聴 長崎大徳寺第八代法印 来拝誕生院遺跡、 千歳猶餘大悲徳 一慶満、 慨然有再興之志。 長伝灯火照冥冥 而渓月其号、

百 与佐 城

其字

也。

文化

+

嘉 周

鹿島

哉、 当]時本山 無 個具眼者、 使傑僧百年大計為一篇空案也

又曰、

懐古後聯

岩

屋二聯

殊妙。

錫及一月。 新古派真言・

翌十三年春、

提出

[再興願書於智・豊両本山。深謀遠慮、決非人学館教授相浦五平太・犬塚丈右衛門等、

決非浅輩所及。

借

旋 小 相 城

議

掛

天台・

禅諸僧、

瑞雲悟芳

106 仲夏遊大蔵寺望洋亭

竹簾高捲放双眸 下界東南望転幽

明濱曰、大蔵寺今已廃、 江長群鷺霞間舞 海逈孤帆空 然則大蔵寺、

或在河原一隅乎。

海逈孤帆空裡浮

宕嶺千尋当戸聳

広川一帯枕楼流

不知何処。詩中所云、宕嶺、当筒口愛宕山。広川、当広瀬川。 我意何嫌餐味乏

風光惜席為詩留

是詩託興清遠、叙景穏秀、 非尋常詩人所及。

洪晋城

先君好徳冠文章

辞世百年涙満裳

今日追思断腸処

杜鵑何事哭斜陽

107

正統院一百回諱辰恭賦 (鍋島直條)

108 過鹿洲城

天険金湯合 三里城新就 地形龍虎成 百乗家運栄

丘阿排夏潦

隍水

次溉春耕

君民同楽日 始有霊台名 文陣行無 (勝屋) (勝屋) 泉石平 章事 酔郷遊. 官閒日 是篇、 未還 |不開 訪同門中村嘉田、 安求如李杜 茶名収顧渚 而不遇之作。 使彼在 湯性 取 同 驪 班 Ш 誦後半可知

110

遊嬉

野、

此地

有温

湯、

又産佳

茗



『晋城遺稿』(鹿島市民図書館蔵)

華岡 109 吁 美哉 西南 折趨華岡、 山 水絶 繊埃 蓋 前鹿洲侯之菟裘也 水色菱花照 山

光雲母

崩

電深仙女舞 (勝屋) 百斛、 晋城諱安胤 月迥玉簫催 公子伝真訣 名煒、 字晦卿、 天台遊不回 別号西湟、

殉臣洪浩然之裔也。 采地在藤津郡、 後篇命題日 不知何地。 西南折。 前篇括尽鹿島風土、 古賀精里先生次子、 然則海路来浜、 不浜、而然向華岡也。筆力無比、殊如七点 通称助· 以穀堂為兄、 右 殊如七八所言、 L 衛門。 以侗菴為弟。 佐嘉藩著坐、 道破歴

世 出 禄

藩 .嗣 五.

洪氏。

風、

頌中有規。

- 80 -

111 登虚空蔵 峰

天半 底孤 -攀青壁 城城小 指尖列国開 僕夫色若灰 惜令奇勝地 Щ 形 神怪 集 石勢虎 空在僻遐隈 狼

来

前 田 魯堂

112

詠史

閒釣江魚不釣名

瓦甌斟酒暮山 青

酔歌倒向蘆花裏 却笑無端犯客星

114 値俊英院殿十三 (鍋島直晴) 暁 曽

鶏従 切眷

駕山関月

夜岸泊 仰

E船滄海:

秋 流

腸断

天涯当日

偃

悲風

千 歳

隔

明

幽

顧陪:

書帳

慕辞源倒峡

郷俗談経名教遍

民風佩犢治

功優

113

周忌諱!

辰、

恭賦

近

体 奉追

悼

后 (鍋島直晴) 石橋潤

中歳月遷 口 頭往昔思愴然 回 諱 辰 恭奉追悼 物光経眼

鶴

115

値瑞巖院三-

十三

回

諱

帝基

唳未帰華表月

笙声空慕緱山

仙

飛鴻鳴渡西

風

夕

自

唱

廟前

洄洄淚

人将老

愁緒紫心

自 酌

漣

夢場

百年功業擅英奇 辰、 恭賦 奉薦 拝恩人有 承筐 踵 報 国 身無在

弓影沈波鼎湖月 不譲漢皇固

淚痕霑袂峴

山碑

憐他

北斗以南化

畝棠陰仍旧

滋

野遺

- 81 -

116 竊聞: 柏岡殿毎歳中秋設賞米花之宴、 徵近臣左右使賦詩詠歌、 以対昇平。 微臣潤因亦

做顰: 賦得近体二首、 以献階下

晨閱史書夜績麻 亭扁貧楽警浮誇 殊知恩意加民厚 不賞卉花賞米花

百尺瓊楼倚断霞 肥山筑水眼中賒 秋光何物尤堪賞 羅椏葉頭花結花

117 十二月十三日、 挙塾洒掃、 会飲成詠

駒隙 自己未知顔似墨 匆匆歳将尽 年年此日掃書堂 対人却笑鬢如霜 窓間共酌杯中月 煤煙舞室濛於霧 塵芥堆庭半作

酔陶然興味長

崗

明濱曰、以下(勝屋) 以下、 一段新意、 宜園留学中作。 人所未道。

118 秋興

群 Ш | 澤 | 足 | 層橋 鳴 野樹渓煙晩 雁影横雲外秋 更幽 卍字欄干人未寐 越客苦吟悲故 国 呉江

閒看銀漢向西流

帰 興促

扁舟

寒砧声急城頭月

119 五色詠

髮連山遠邐迤 青 江天逈浸碧琉璃 池頭秋水浮萍合 雨裏春煙弱柳垂

- 82 -

永入東風芳草滋

憂国臣従蒲上 諫 竊香女在鎖中窺 血痕不滅千年恨

日 落江 天含卵色 海 門初 月湧金 濤 山花発処蜂営蜜 梅実熟時 中 撃 解 蟹 著 著 者 青

黄

江 仙遇子房終化石 輪紅 楓射浪秋光早 H 赤 輾炎天 Ш 庭上石榴花似然 雀逢楊宝再生毛 火焼雲暮色鮮 陶家 流 楚子乗舟得萍実 血 何妨漂杵 興籬辺菊 去 仲尼: 巍巍周徳自千年 誰喚麹車 修 史謗! 桓 楹

満 千 庭草色敷氷練 尋瀑布倚 雲水玲瓏 樹栴葩凝玉肌 透碧帷 玩マ(ママ) 風塵 世報 整電服 馬良才芸独 孫眉

白

半夜残灯挑不焔 鳥宿茂林霧中樹 何 近神仙: 煤封 窓前槐影鬱参差 山 河十 古寺 -里雪 壁 蕳 |晴時

城 関

Ш

落月断 黒

雲黧

宛似重陰

剥蝕

時

淡窓曰、石郎長於詠物。(広瀬) (石橋潤) (石橋潤) 陌上風鹿

風塵衣変緇

其使事処、尤覚精巧。

120 月

銀鈎落汐秋湖冷 嫦娥竊薬月宮馳 宝鏡辞奩暮殿披 遍照乾坤夜夜移 浮世変遷何足語 弄扇婕妤倚闌処 請看天上幾盈虧 画眉京兆退朝時

題辞

石郎之詩、 (石橋潤) (淡窓) 可謂清新穏秀矣。 若更読十年書、 則其所至不可測也。

題

八沢章四郎

臨別縦令相惜別 文思如君真俊英 121 留別広瀬菊之助 多情却是似無情 只将齡長漫称兄

殷勤休説平生事 寒衾嘗結百年夢

幾処鶏声欲天明 残燭独知今夜盟

明濱曰、章四郎、諱**信道、名章、字士達、号宕陽、歿年二十四。**与八沢琴岳従兄弟也。^(勝屋) 江口蘆菴曰、無限餘情。 初入藩学、次学於大村松林飯山門、中頃入日田咸宜園。従広瀬林外、

並 |揭而表之。

師事重野成斎。是詩、将去宜園之作也。菊之助後改貞文、号濠田。

余宜園之師也。故 終帯藩命遊薩州、

122 柳園 **澄端午**

也逢佳

鳴蛙近院声如雨 節未帰郷 微月穿林影作霜 枯坐窓前惹恨長 遥想今宵故山友 為客身常甘酒味 傷時心易感風光 一堂相会挙蒲觴

- 84 -

明濱曰、是篇蓋去宜園帰郷途次、 寓南筑柳園時作也。 柳園者井上昆江私墊也。

昆江亦

余宜園之師也。不堪懐旧之情、 因揭而表之。

123 庚午九日、青村広瀬翁同横古城来臨、(明治三年)

席上即作、

恭次其韻

而 呈

秋属重陽節 人皆故国風 虫声断続外 月影有無中

上客是師

交道久而敬 (勝屋) 1、此蓋係矢沢士達、明台、(章四郎) (章四郎) (章四郎) 明治三年九月、 日田広瀬青村・横田古城、 翁

作。

朝日霧隠偶示之。古城後顕達、

任大審院長。

士達同窓之友也。

天如仮士達以年 聯袂来訪鹿島時

又曰、明治三年、当先師藍田先生、 則亦能登廟堂之上。其所大成、豈可 豈可測哉。録以表追悼之意。 鹿島釈褐之時。

青村為淡窓所養、先生任都講、 者蓋欲与先生談旧雨也。 古城亦淡門秀才也。青村·古城之来鹿島也、 時先生宿痾未癒、 属武雄風浴之時、不使文星会一堂。 一者訪士

可惜。

達、

124 述懐

明濱曰、青年(勝屋) 青年是心以登。明治初、 丈夫豈可老陳篇 中 ·原今日未争鹿 政京都権大属 坐事早世。悲夫。 枉事文章二十年

125 八沢棣之進 聞兵庫開港

青村与先生、淡窓門下麒麟児也。

(泰智寺) 八沢棣之進墓

明濱曰、可t (勝屋) 和書元擬払胡塵 兄也。 可称胡澹菴再生。 却覚妖氛汙帝宸 棣之進、 三尺宝刀長在室 諱之保、字定夫、号琴岳。歿年三十一、 空拳猶未斬王倫

行 沢章四郎)

126 晨昏不離眼。 慶応戊辰晩夏念一日、従大将軍嘉彰親王北征、(四年) 偶賦短句、 以録於柏崎陣営 臨発恭拝天顔於紫宸殿下、感喜交至、

且.

天顏咫尺猶存眼 一死酬恩在此行

又曰、是詩、北越柏崎陣中作。 膾炙人口。 転句猶字、即真気流動処。 然序引恐人未見。 流動処。藍田翁改作長字。 (谷口) 故併出以掲此。

而非作者当時自然口吻。

雖佳則佳、

127 凱旋 作

明濱曰、作者勤王、 語屬) 持据鞅掌不辞労 跋渉山 跋渉山川意気豪 自笑嚮時追賊 手 挿梅却弄太平春

乃与梅花百世競芳。

128 加藤肥州公読論語図

結髮従軍憂国深 来豈無匡時略 且繙聖経閒処著 (着) (業) 遺恨長陵土未乾 誰知大雪埋城日

六尺之狐無処詫

食馬噛土

推赤心

八沢琴岳(棣之進)

泣辞帝京逆旅: 春 前途日暮無依処 夜倩花 為主人

馬啼.

無処不煙塵

129

忠度宿花下図(平)

花之薄命不堪詫

却為流人慰飄泊 忽怕東風捲土来 花尚平安人落魄

130 国府台懐古

秋光惨澹寒煙白

古戦場荒森松柏

我来悵然不忍去

下馬彷徨

日

|将夕

百 死生自古人所難 家国興亡不可知 長槍大剣各争鋒 寺門草深虫声多 万豼貅終束手 長使壮士坐慨嘆 鼙鼓震地決河流 Ш 今吾思之首空搔 力尽其奈如楚因 僧罷帚說往昔 昔時 吾軍逡巡敵軍振 天運有数歲幾換 河流于今去滔滔 両雄酣戦秋 江山 水声激風秋更高 虎怒龍斃草木愁 餘勇猶比項与劉 亦異昔時看

131 桜花

薄命: 滋賀浦荒飄煖雪 能 伸旬 日寿 納言姓字冒斯花 奈良都古簇香霞 零丁借宿平忠度 南朝天子今何在 欲望芳山路更賒 吟詠怨風源義家

格峰断橋

132 茲遇華頂高嶽老居士八十八尊誕、(鍋島直朝) 斯佳会。蓋擬応真住世之徳、

方士不経多惑念 殷七七兮陶八八 真人換骨足帰天 十年前後共臨筵 碧霞休授月湖客 何如雁宕一尊者 起乞昭昭祝寿篇 栗石難欺華頂賢

不取道家長生之術也。

恭願垂鑑照、

偈以奉呈

外無物申崇祝、

敢請。

諾矩羅尊者、

於温州

雁 Ш 赴

宝永六龍次屠新赤奮若孟春念

巖泉不孝釈男外断橋拝

星野源兵衛 号蟻峰

133 錦江· 一夜泊

此地美名誰正伝 今観陳跡只浮船 山留一寺苔餘錦 浦別二洲霞映連

月落鹿城鐘惹憶 肥陽鹿洲之文官高朗園終斎、 夜深杵島雁妨眠 行年九十二歳。 荻葭独宿風寒処 星野老翁題之。 漁火燒楓霜満天

134 歳旦 九十三歳、 耕雲亭星野氏

清晨鶏唱未降時

喜見天門開曙曦

世慰朝衣年既改

陽春応和太平時

- 88 -

呈淡窓広瀬先生

135

信宿餐霞在赤城 〔久留米〕

客自四方皆

雨集

名於三傑

詩閒侍松堂晚 穆穆清風満座生

誦

136 初謁侗庵古賀先生

鹿洞

五郎

精巧見才力超倫 曰、垂尾探珠一聯、 1(谷口豊)

難行百舎繭重重

既到燕都始棄筇

垂尾愧如生母狗

腄

驪龍

先生閱余詩巻、走筆題云、 佩草 川場 別後得西生、西鼓岳 誰敵丹邱多善鳴。

欲識

一人優与劣、

蘭秋菊各才情。 亦何等過称。 第四句故及]

楼観富嶽千年雪 地古泮林万丈松 海内文明今正昼 探珠幸遇 誰知風化自

137 呈山陽先生

大名轟世夙 喧 呶 雖是閉門難息交 北斗以南 1人尽望 玄経尚白

秀行穿展 夜月渓空釣坐茅 愧乏英才供一楽 循循教育荷容包

春

風

山

138 湊川 懐古

鹿洞!

E 「、忠肝

義胆、

皦如白日。

月為招魂江上夜 挙目茫茫簇賊塵 孤軍自 花猶 灑 淚雨中春 勢難 振 吾邦最重君臣義 身 帷 死 酬 |天地 三世 海外何能有若人 伝忠質鬼神

- 89 -

西 |鼓岳

求球更向日南行

田田田

多年蓄志期親炙

〔先生与我佩川先生及吉田平陽翁、 (章場)

最雪

速成

並有鎮西三傑名〕 今夕即温将

藍田曰、淡翁小伝。

名山·

再訪

139 (広瀬)

藍田曰、優遇特恩、

君臣之賢、可欽仰。

関門百二鶏餘過

書窓易暁梅花雪 大沢満 南豊 霊秀所鍾生若公 百世 今我再来堪自悔 伝詩唐杜甫

140

吟袂不寒楊柳風

三年東武漫飄蓬

方興学蜀文翁

朝暾杲杲照双旌

穀堂先生扈遊于東武、不与其厳隊、傍探沿路山水、蓋特旨也。

積雨新晴此啓行 名在扈遊探勝跡

官多閒暇見殊栄

賦此送之

道徳五千牛背成

本識出 郷人益貴

簟壺到処日歓迎

誰憶寂寥空谷下 渓澗采毛其有矣 巍然高築素王台 山梁獲雉亦時哉

服

感服。

王台、祭祀不懈。

花皆鞨鼓声中発 暁天残月影徘徊

鳳自簫韶曲裏来 任燎光消作灰

所以出多儒。

感

藍田曰、

丹邱有素

141

恭安殿釈菜

駅同大野梁村賦

穂寒灯焔

不長

142

塩田

依微相照鬢辺霜 因懐三十年前

事 夜学天涯共此光

上羅 Ш

143

手把杯觴豁我胸

松尽大夫連鹵簿 山皆仁者有儀容 登臨終及夕陽春

西肥諸勝曽探遍 是処殊知衆美鍾 破天飛帆小逾小

駕海高城重又重

- 90 -

西郎長技。 淡窓曰、巧用古語:

144 諫 早

百里山 滄海半成今日野 河戸 万餘 豪華誰謂子男居 人民応是昔年魚 封疆 水廻前郭和鸞響 西接瓊瑶 浦 雑貨猶能遠物儲 石駕双橋靉靆虚

〔和鸞、一作佩環。靉靆、一作眼鏡〕

145 至日呈諫早諸子

〔三十餘年前、来遊之日、主諸熊綽夫。而今已逝。及故〕故及

満坐秀才非旧識 老去重投諫水浜 昔年豪気尚嶙峋 枝芳信是新春 正当南至禁行日 看花更欲招魂返 借間何辺葬故人 ^(問) 幸駐北来為客身

46 余来室島、僦野口美備別墅数月、有故将辞去、賦贈

炊爨有時因熱釜 家累門生旧貫仍 咿唔幾夜借餘灯 龍王社外臥 竦 藤 北西 離愁渺渺寒潮満 山塞霜猶暖 咫尺江隣 舟子呼来不忍乗 水亦澄

147 送佐坂子益帰省

復上層楼百尺高 三爵不辞酔以酒 故人依旧 寒如此贈無袍 未除豪 天涯縦結他年約 花成錦処帰栄足 牛馬其風何得遭 雨泣 珠時 莂 意労

148 鹿島祐徳院吹笛

狐王京地歴千斯 伝楽唐廷定有知 笛奏来山殿夕 中庭率舞幾綏綏

開観稲花会、 夫人有賢徳。 明濱曰、 聞柏岡 使公 毎年

149 迎村 Ш

残 山 剰 水 是 丹多仏

吟雖有皆

俗

安得留君三

兀

歳

同業 新

書

樹

使

人幽

誰自遠方来 事相攻復火牛 直 遊 春後老薇供我乏 雪蛍 雨餘

150 有田 途上

桃 花 節 後転離披 求友且儔黄 鳥児 几 面 唯 煙 千 竈 暗 全身是石数 経奇

151

到平

-戸途

Ē

山

Ш

鍾

美如

相待

郷党有名皆旧

知

日行程

能幾許

到

頭留看罪

帰

城 百 花 楼高駕飛鸞島 豊 艶柳 風流 無限 波浪遥漂対馬州 春 光宿 雨 収 筆硯 毎上嶺頭将羽 半 生 甘落托 化 杖鞋千 此身方到自 单 当自(多)近半去優遊

152 呈楠 本意 暁山 通称確蔵、 平門教授、(平戸藩校)

春 外 貌如 服詠帰楊柳 新必自· 風 中 風俗 本継忠臣 朴淳天地 ©臣南木族 [(楠木) 家在針尾島] 別 玻璃小島即位(はりお)長師博士一文 仙 斎藤 翁

153 観稲 花会引

朝

衣坐待扶桑日

君身透徹玉

玲瓏

群 鹿 古 臣有喜色 島老夫人 人曽有語 莫看花 相会侍簾帷 賢旦多奇思 離披 昔年 四顧 此語 -秋七月 無所 雖 有旨 見 忽促 涇以 坐皆. 観 渭 花期 如 濁 癡 之

本。 及公薨、 名篤子、直彝公室。 若直彬公者。夫人 及粒粒辛苦之有 是以後来出賢 落飾、号 住柏岡。

子侍女識稼穡艱 千 是 其乏馥郁者 吾姑以稲花 群臣畏且愧 勿道乏馥郁 頃又万頃 時重伝命 似不佩麝臍 比之夫人来 汗滴自 花正 可以祭百祇 毛吐 満 垂垂 一芳菲 ||四|| 其供食与祭

爾来 捨此: 其花宜 其乏艷麗者 勿道乏艷麗 **此徒取彼** 為永制 識 取 不在 似淡掃蛾 年年会不違 野有賢人遺 可以食群 桃 李枝 眉 黎

154 送瑞 雲和 :尚応 辟、 之仙台大年寺

亦与内

助

斉

如迎正 丽臨 旅装斉整下山 林 六千君路津梁遠 五十吾齢犬馬侵

鹿 東旭.

島

秋声皆別恨

仙台月色即

禅心

155

送僧

雄

峰

之仙

台

已覚徳成隣

日成又月奨

定知随喜人天共 此 日 瑞雲深更深

中 我近来鹿洲 朝忽告別 有桑門徒 将之仙 禅餘来 区開 一言語府 稽古 藝圃

吾儒雖可学

畢竟非君所 足踏手又舞 翹翹幾見楚

自視其袍方 唯去莫復顧 吾為贈 使行中: -其矩 苟有能若斯 自視其頂 Ħ 何与儒旁午 使心不苦窳

156 訪正 司 碩 渓賦 贈

其事 未曽仕称臣 自幼 能好 日夜彈

精 神

君高尚

更逞子貢才 蛍雪供夜読 貨殖累万緡 家貧若不貧 区区 雖行鬻于市 不事利 擔 費 頭 利皆来自 展書編 天

無用為有用 下有千餘戸 其書何所説 而後復抛之 可知君 事在富吾民 老来著作新 不通一点塵 経綸 観水自養智 況復鑿嶄岩 我来視君居 日日数千言

観

Ш [自養仁 百頃墾良田 超然倚嶙 成巻已等身

岶

此其所胚胎 宜乎書足伝

157 伊万里

瓦屋参差西又東 最知街 路費. 人功 数程: 布石

風月総因山水好

舟車能使貨財通 平 如

吾藩已属一方僻 僅卜豪華在此

砥

両道駕橋

斜 似 虹

長島大夫需

顆

猶有赤心存

道弄塵世 題東 方朔図、 漫遊金馬門 摘来桃一

卅歳空為夢 咫尺如千里

羨看黄菊色 我今来白石

猶似曩時秋

158

訪迎敬順

音書久 二毛唯満頭

不修

君昔訪

丹(多)

誰

159

- 94 -

于其人。 藍田曰、 形容、

切

玖

閒

雲帰処暮山遠

倦鳥栖辺老樹喬

十五年間空契濶

陪遊宜且永今宵

|暫相|

招

160 南竹斎呈 | 玩草 先生

城 南 君 自卜 幽居 修竹百竿梅数株

属三餘

漁徒

身曽出谷如遷鳥 心尚首丘同老孤 今日来尋応不厭 六十歳詩踰万首 五千年学 飄蕭 風月旧

161 迎淡窓先生、 時先生自大村帰

城 優待去飄飄 肯許簟壺我輩邀 美王櫃中 猶 未売 黄金台上

162 立野麟卿至、 分韻。近日賓客頗多

連宵吟 酌几筵霑 前 客残樽後客兼 鶏黍約間 他 吉習 交歓. 金蘭簿上 一幾名添

暗

風

平

·地濤生樹

落葉晴天雨繞檐

只願

年三百

 Ξ

如此

継

雪月淡生涯 尚是心思 期十 九乖 三万六千将及半 東 茜 南 北

風花

163

丁未歳晩偶成(弘化四年)

存半官学因人守

舐犢私情為女斎

歳已闌残天亦暮

坐聞

寒雨

滴空堦 未

能皆

164 西瓜

奇瓜 牙能 解 種長言自 充枕忽驚君実眠 (司馬光) (司馬光) 豊用 黒歯 副 我 華随礼 朝 曽 所 貴 剥 赤心 彎彎弦月落刀辺 何 国 不 相

憐

暗 自蛮 想問花尋柳跡 165 166 熊本 夷渡大洋 送犬塚成章赴官于江

多為試礟錬兵場工都庶政已更張 亓 君今千里修行李 須知武備由文事

我昔三年費裹糧

長使所天掲国光

葛履履霜遍尚倹 鬼将擘山曽築城 七 層楼櫓半天擎 佩牛遺俗匹夫勇 射狗旧儀

君子争

淡窓曰、句句記実。

火田行水儘能耕 暮投逆旅先呼酒 灰気衝喉不可傾

167 加藤公廟

殊域曽能探虎穴 馳突無前撥乱初 堅城豈料作鳩居 祠堂今尚認旄旗 **愾然時若聞歎息** 飲思食祭崇何甚 神籟吹松満玉除 眇視跛興霊有餘

陽上。

淡窓日、

遠出頼山

168

(間淡窓先生語-(広瀬) (ママ) 人曰、 継鎮西三 傑之後者、 以鼓岳為一。 其餘、 未知為何 故及第

 \equiv

別来雲樹望悠悠 両地音 塵 風 馬 牛 三傑我寧居伯 仲 六家君最 富春秋

浪津振古梅先発 高屋及今煙更稠 利藪欲崖人蝟集 江 Ш 佳処独回頭

169 塩田 遊朝日練 師 Ш 房

水沈香払払 人賽八天宮 相遇心如結 休言道不同

竹皆無俗気 松更送清風 時覚山林震 法螺吹弄工

170 医王寺村

路過橋斜入峰

万葉集中伝放飲 橘柚花発転穠穠 杵島郡毎歳三四月間、会飲事 闔村茅店多鶏唱

近圃

稲

田

一交鹿蹤

三忠臣裡所遥封 〔古係于重盛之封〕 〔万葉集詠、杵島郡 医王即是育王誤 何以黄金棄外邦

171 所見二首

秋風満圃木綿肥 吐雪団団正欲飛 村婦不知傷媚態 摘来蛟背負山帰

牧童眠熟夕陽斜 老牸悠悠去已賒 噛尽前堤青数畝 就中唯剰曼珠花

栗烈風寒両耳傍 遥識舟中 -人尚睡 老 雅鴉 点領危橋

高橋暁渡履厳霜

172

暁過高橋

甲寅九月念二、有鷹来入納富家賢家、 其妻偶至其所、

173

細君本自機心息 細君偶爾至其所 鷹兮鷹兮気崢嶸 **攫之。人皆以為瑞、** 攫来黄雀与稲併 鷹之所以馴且親 翔而集臂時一鳴 養之三日而放焉。 黄雀啄稲民之賊 其声戛然将裂石 不向九天奮飛去 賦此応需 鷹之所以擢殺生 拳家皆驚鷹不驚 止君室奥果何情 鷹下止手。 視之則併黄雀与稲

吁親可親殺 深林曠野是其所 可殺 人而 可異止奥如鬼神 如此有幾人 郷党父老皆相 世俗夢之猶為吉 賀 吾亦始言祥与禎 況復今日即見真

聞昔文仲祭爰居 奔走徒成不智名 君之所為大異之 割愛放之任所征

放之仁也功徳大 福 禄穣 穣日荐臻

訪淡窓先生

174

老柳逾 垂大幾円 全経二紀叩門扉 方看弟子三千進 不説人生七十稀

175 訪村上仏 Ш

鎮西多少旧

知音

用尽精神付苦吟

君輩已成三足鼎

〔小竹翁、

以仏山及我佩翁・淡翁為(草場佩川)(広瀬淡窓)

葉緑辺魚躍出 梅花白処鳥飛帰

蘋

嗤吾拙稿煩君序 狡猾如狐 仮 虎

絃琴〔世以我佩翁・淡翁及吉田平陽為三傑。 淡翁曽語人曰、 他日継三傑之後者、

西鼎足

以 鼓岳 五 吾人頗似 為其 ____ 餘未知為何 <u>人</u>

·風梅杪鳴黄鳥 春水柳条栖翠禽 把臂再逢今夕酒 初降二十二年心

午

176 畳韻、 再呈 仏科 山上

寧有訑訑声与音 人物風流楊氏柳 相 詩篇光彩孔家禽 迎 笑共呻 吟 二豊諸勝雖探遍 暮山楼外屏 漣障 欲訪 春 雨 擔端 君居是素心 筑 雑琴

177 乙卯正月十二日、(嘉永七年)

風雪殊甚

仏山村上老友、

送余西帰。

過七曲嶺

到香春駅、

賦此

马加深山加高,状尽善裁制不刚,为是雪息疾害急,发以谢

入見仏山以為仏雖是竺寒堕指断 仏村吾 上 葛巾 水已. 嗚呼其情之深無限 聞昔晋代王子猷 吾之帰也不得止 大衾小袵多挟綿 及投駅亭心始舒 雪片入袖重 加之風伯 回 思我今日之跡 加深山 触 樹脱 期難 人不忍別 震 立如椎 猶豫 其威 加 在 柯 高 量 蒼涼顔 訪 即 奇 恰 獣尽潜蔵鳥不 君之送也礼過矣 好与湯婆結紅 七折之坂登則 頭上忽如爛簪: 又撲両目眩幾回 相送忙手鞋韈 雪之堕者吹再 戴興尽空回 是暴虎馮河客 相忽自雪山 及此時将辞去 其義之高 色復其初 可 舟 縁 出 汗 花 結 飛 . 翱 仰 或以我生于丹邱 雖是艱行身已疲 望 失脚 随踏. 況犯白戦場中 況復此行在 為是雪雹来甚急 君之於我今如 苟不頼君扶持 但為多少経険 出門率先行自 雪不折竹風折竹 痛飲自忘為小戸 百声雖! 仆 地 衣 |不汚 可愛 賦 此 危 功 阻 迷 詩 或疑九 奈何 日日日 雪雖 不待細論 甘死肯来三十 転身溝壑百居 夢魂屢驚不能 酒気生暖暖有餘 誤為神仙中之一 前途下坂労不半 歩歩却退亦危: 如個奇景果神助 却似 成奇 山 天崩 路 全堙 風 劣与優 亦 滔 哉 百 諷 滔 滅

178 乙卯元日 視彼.

加高之山与加深之水

皆能仮助于雪亦難比方

陰

雨

無人来拝年

柴門昼

掩

完転蕭然 梅花独向春風笑 似執東皇第一棒

水煙乗 狐子啼飢処 弘業将天部 点点牛羊下 千家皆映水 春晴嵐気起 川秋 179 其七 其五 其三 其 一暁起 雨滴 鹿 島 岩屋 蟻山 高原 八勝 横沢落雁 飛飛雅雁帰 橋影与蜺飛 餘翠染平 遺蹤雲更深 如聴筑 頃刻翠微茫 声高 夕照 晴嵐 晩 鐘 兼琴 虚墟声 其八 其六 其四 落雁 翩翩 暮鐘 是時 前浦花 楼閣 西鼓 夜静殊蕭瑟

當常尋影

仙

子 雨

鄉 帰 睴

高

原

城山秋月 石壁暮雪 琴川 錦浦 岳

夜雨

帰

帆

山

色紫 如錦

秋老逗斜

春帆带 変成

衆楽園・ 谷 衆楽園 口藍 中千樹桜 \mathbb{H} 小孫携手繞花行 春 嵐 日 煖 人張宴

180

枕海狐:

山碧

聞言古

1戦場

輪秋月影 鼓岳

相弔照荒涼

城

Ш́

飛雪影

天暮数峰

一四点

撞起 自異世

仰欽

間

来成画

安知

不带.

書 明 心 <u>.</u> 퍔

横沢 石壁 岩屋 琴川 蟻山 錦浦

応

成章犬塚君需

各処嬌歌和

晩鶯

181 嬉野 沿舟遊

深 潭移 棹宿 |鱗驚 蘋末風生月有 吉 坐覚心· 中清似水 浩然秋気灑空明

暑月未催竹梢雨 幾度来還興不窮 182 秋永氏清集、 遠香忽送藕花 交情一片在斯 次主人懐田 || 君韻、 風 单 夕陽 今時難与今人背 以贈樸拙最 酒醒諸盟散 所 雅 盟、 三席不逢三歳同 更設茗筵吟碧櫳 情 在 詩 中

歌響: 183 音弦 声渡水来 (明治二十三年) 雨崖相対画場 寄答海鷗社教 諸 盟兄

· 対画欄! 開 故園楊柳今何若 春入三条橋

梅

島直彬

184 温泉行

渾忘得喪与栄辱 海渚洲汀皆带熱 南豊之東望悠然 有名山勝水趣 此中曽無俗慮 占得風月無限 潮水処処猶看 三十六灘水接天 牽 権 煙 煙波風月無常主 菡萏湾頭綿岳 万物静観天地 一浴霊泉心身爽 大 下 俯看躍 収拾自在不用銭 痼疾沈痾 道温泉脈 魚仰 無不

況

客舎日長無個事 句不求工任其真

優遊恰是似少年

神井克遺人不老 講 忽忘詩

不老街頭不老泉 閒数前港去来船

飛鳶

脈

連

千里聞君臥養痾 187 犬塚石舟

老樹茫茫雲掩映

寄勝屋兼郷在江戸

残燈耿耿雪滂沱 向寒時節果如何

知不連夜相思夢 天涯尋問音書絶

荒井函嶺容易過 関後光陰歳月多

豈班名苑較妍媸 186 185 竹画 寒梅

琅玕遶屋翠如霞

門掩竹林深処家

幽夢未回北窓下

清風一縷篆煙斜

玉骨氷姿独自持

老幹槎枒風雪裏

暗香何必要人知



鍋島直彬

大隈賓水

188 過田原坂有作

殺気衝空風 雨悪 焼残寺在乱餘村

田原坂上嶮難道

草木猶留戦血痕

189 七浦途上

一子相携歩夕陽

北風射面野渓傍

休言袖手肌生粟

指示農夫争□忙

数里行程半是坡

192 赴名護屋途上 恭整衣襟入寺門

遺霊如在自厳尊

最欽尽力農桑業

一郡生民猶浴恩

191

謁寺沢志州墓 (広高)

不是漫遊風月行

踰山渉水問民情

村翁勿訝為何事

欲使諸君楽太平

余承之東松浦郡長、

巡郡内有作

190

久布白虚堂 (明治十六年) (明治十六年)

人煙稀処路岐多

樵夫不到無由

問 手把針盤凝視過

慇懃促我不如帰

平生自愧吏才微

三歳官遊百事非

半夜杜鵑啼月去

193

客舎聴子規

- 103 -

194 寄伊藤孤雲翁 限韻

功名抛去久帰休 閒処遊優儘自由 山聳檐頭千嶂秀 野連庭下万渓流

195

朝繙古籍雲浮案

暮点新茶月入甌

聞說君家富風景

好駆瘦馬訪栖幽

歳晩感懐 限韻

生理多頽廃 年年覚債増 自嘲才乏術

且親韓愈灯

須酌顔回酒

196

癸丑新年(嘉永六年)

推敲猶未定

乗月訪詩僧

却笑技無能

黄鳥遷喬呈好音 閒迓新年椒酒斟 且喜門前稀賀客 世属文明 無旧習

梅花凌雪放香気 三間茅屋倚松陰

詩追 陶然静鼓五絃琴 時様試新吟

青松欹屋角 197 聴泉亭新年宴席上

翠竹映門楣 春色催吟意

泉流

洗俗詩

迎年先会友

探韻共傾巵

遥想宮中宴

衣冠簇玉墀

携友倶参石壁祠 石壁山清集、 借筵環坐各裁詩 分韻得支

198

春宵一 刻花間月

分影溶溶入硯池

- 104 -

元是菲才辱士徒 199 秋日田家

石鼎煮茶迎好客 200 送谷口藍田先生遊福陵

独抱遺経出故郷 文苑時時振木鐸

江山処処入詩囊 秋風百里路程長

臨行更待帰来早

好誦新詩共挙觴

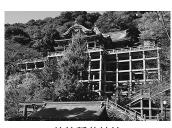
香椎宮外濤声白

伏敵門頭

(海月蒼

飄然拋剣伴農夫 松爐煨芋学寒儒

秋来最喜天恩渥 黄雲簇処晩禾熟 十畝 白露鋪辺残菊癯 田園方減租



祐徳稲荷神社

独有閒· 籬菊漆香新霽雨 人厭市店 初冬閒居 分韻

201

林楓改色欲霜天 村端結屋謝塵縁 凍蝿

詩書閱了渾無事 乗暖 南牖

寒爵怡晴 炷爐煙似老禅 噪 短椽

202 秋夜聴雨 檐頭点滴堪娯耳

支枕幽斎夢未成 起温残酒対秋檠 不是錦城歌吹声

203 寄秋永梅軒在 東京

山鄉残暑恰如焚 人分党派謾談政 誰遁風塵徐読文 料識都門漲火雲 遥想清凉今夜月 秋浅長天稀雁陣 扁舟応棹墨江濱 雨晴蒼海見鷗群

204 贈煙: 草一包于秋梅軒、 副以 絶

謝君前月寄華牋 一函煙草聊酬贈

休笑相思薄似煙

分手京城已隔年

山水三首 定知棲隠在 隔水聴鳴琴

嵐気侵窓滴 題島内鉄叟画 松陰擁屋深

205

最所樸斎

雨餘山色碧 春水漲苔磯 採薬人安在

空看鶴護扉

閉戸先生在 水声和読書

径荒苔色滑

無客訪茅廬

- 106 -

談当快処玉飛屑 秋風吹老欲斜曛 文章詩賦追韓杜 老来致仕臥幽林 208 207 石壁 暮秋偶成 山清集、 国史漢経通古今 耿耿猶存済世心

木落雲癯望始分 詩到窮時酒奏勲 分韻得文

漸有吟情入佳境

清遊好伴海鷗群

満樹蝉声風外乱

盆蘭気坐間薫

誰知濁世屈平醒 (屈原) 秘紛揺落隔窓聴 雨晴 風流有客同吾癖 満野蕎花白

独占閒居君実楽雲映柴門午亦扃

爐畔細評茶器銘 霜浅半林楓樹青

206 呈谷口藍田先生



最所新作

論政曽扶帷内策 色緑 淡濃染出幾青衿 養痾空抱土中金

仰見藍田

Ш

詩始入真。

老年歓煮新茶楽 晚鶯啼絶杜鵑忙

夏日長刪旧稿忘 又是春山変艷妝

時有蚕児眠漸起

好携妻女摘柔桑

花落園林

:樹空緑

雨晴

田畝

麦将黄

藍田曰、年向老境、

209 聞杜 鵑

伏水城高月若鈎 杜鵑啼度淀川流

忽驚十有年前

夢

恍覚扁宮

舟一

夜愁

八月十五

夜、 明月榭清集、

210

呈 藍谷 田口

好迎明月捲紗幃 先生

巨杯酌酒金波閃

先生優待投車轄 清座題詩玉

聴道欲求今日是 数仭門墻俗事稀

読書初覚旧時非

肩飛

揮筆耽吟未敢

刪剰詩篇夜幾更

風吹落葉遶檐鳴

月移樹影林窓白

初識秋声非雨

声

211

聴落

葉

212

首夏新晴

前 田白山 名悦一

213

絙屏石枕竹方床

手捲抛書午夢長 睡起莞然成独笑

数声漁笛在滄浪

- 108 -

稲 垣瓊林

214 送勝屋大華先生東遊

橋頭引袂被人魁 別淚千行亦旧哉 万国儒生看破了

梅花為杖早帰来

215 久布白虚堂 (明治十六年) (明治十六年) 余承之東松浦郡長、 巡視郡内有作 (※190と重複)

不是漫游風月行 踰山渉水問民情 村翁勿訝為何事

欲使諸君楽太平

謁寺沢志州墓 (広高)

216

恭整衣襟入寺門 遺霊如 (※191と重複 在自厳尊 最欣尽力農桑業

郡生民猶

浴恩

赴名古屋途上(※192と重複

217

数里行程半是坡 218 客舎聴子規 人煙稀処路岐多 (※193と重複 樵夫不到無由問 手把針盤凝視過

平生自愧吏才微 三歳官遊百事非 半夜杜 鵑啼月去 慇懃促我不如帰

閒処遊優儘自由 暮点新茶月入甌 聞說君家富風景 山聳檐頭千嶂秀 好駆瘦馬訪栖幽 野連庭下万渓流

朝繙古籍雲浮案 功名抛去久帰休

219

寄伊藤孤雲翁

限韻

(※194と重複

220 歳晩 感懐 限韻 (※195と重複)

須酌顔 生理多頹廃 回酒 且. 年年覚債増 親韓愈灯 推敲猶未定 自嘲才乏術 乗月訪詩 却笑技無能 僧

癸丑新年 (※196と重複)

221

梅花凌雪放香気 三間茅屋倚松陰 黄鳥遷喬呈好音 閒迓新年椒酒斟 且喜門前稀賀客 世属文明無旧 習 詩追 陶然静鼓五絃琴

時様

試新吟

聴泉亭新年宴席上、 分韻得支(※19と重複

222

探韻供傾巵 翠竹映門楣 遥想宮中宴 春色催吟意 泉流洗俗詩 衣冠簇玉墀

迎年先会友 青松欹屋角

携友倶参石 223 石壁山清集、 壁祠 借筵環坐共裁詩 分韻得支(※198と重複 春宵一 刻花 間月

分影溶溶入硯

池

松爐煨芋学寒儒 飄然拋剣伴農夫 秋来最喜天恩渥 黄雲簇処晚禾熟 十畝 白露鋪辺残菊 田 園方減 租 癯

石鼎煮茶迎好客

元是菲才辱士徒

224

秋日

田

家

<u>*</u>

199と重複

- 110 -

225 送谷口藍田先生 (※200と重複)

独抱遺経出 文苑時時振木鐸 故郷 江山処処入詩囊 秋風百里路程長 臨行更待帰来早 香椎宮外濤声白 伏敵 好誦新詩共挙觴 門頭 海月蒼

226 初冬閒居 (※201と重複)

籬菊漆香新霽雨

林楓改色欲霜天

詩書閱了渾無事

炷爐煙似老禅

短椽

独有閒 人厭 市店 村端結屋謝塵縁 凍蠅 乗暖嬉南牖 寒爵怡 晴噪!

227 秋夜聴雨 (※202と重複

支枕幽斎夢未成 寄秋永梅軒在 起温残酒対秋檠 檐頭点滴堪

娯耳

不是錦:

城 歌

吹声

料識都門漲火雲 東京 (※203と重複) 秋浅長天稀雁陣

山鄉残暑恰如焚

228

人分党派漫談政

誰遁風塵徐読文

遥想清凉今夜月

扁舟応棹墨江 雨晴蒼海見鷗群

絶 **%** 204 どを重複

函煙草聊酬贈 休笑相思薄似煙

分手京城已隔年

謝君前月寄華牋

229

贈煙:

草

包于秋梅

軒、

副以

久布白黙堂

230 奥羽

道中

之妙。

悉其人。

北人、不能知是篇 明濱云、非東西南

> 盤山過尽奥山賒 買酔行人不憶家

路春風三百里

馬頭看遍七州花

呈北畠道龍師、 賀法界独断成

231

独断 方成如有神 東溟最喜出殊珍 親鸞之外無其匹

流得以来

惟

津

玉爐香煖伯林春 従今法界雲煙散 万衆何須去問

鉄錫影孤天竺月

画梅

竹外黄枝不受塵 233 唐津 操詩 風標高潔月成 隣 詩人応与梅花等 占領荒山

玉 僅了南遊又北遊 篴凉生松浦月 仙禽影落鶴城秋 身如江海不維舟 疎狂未覚風流尽 **貪看山水常青眼** 買酔重題旧 咬去氷霜欲白頭 酒楼

山門無俗客 琴江江畔寺 風月是良朋 寄跡感愈增 危坐思今昔 食卓分斎飯 孤懷冷于氷 書窓借仏灯

- 112 -

[野水春

玲瓏透徹、 風格自

232

第四、 実歴語、

故

頸聯、綺麗。

234

山寺寓居

淪落還 郷日

相迎一 笑温 寺僧能待客

父老又携樽

清節可尚。

尚友、許由·伯夷。

紅湿前宵雨

青濃旧邑村

僑居朝暮事

翻憶祖宗恩

未抛人事去 却掃掩柴関 洗耳門前水

采薇寺後山

身軽知病減

日永覚心閒

笑看遥林晚

紛紛鳥雀還

落魄江湖歎老齡 235 読孝経

猶無一

事報先霊

立身行道終何日

空対残灯読孝経

236

実矣。

吾兄之学、於是乎

藍田先生紀恩碑成、

勤王心自天資発 宏碑新建彩雲中 長与桜花相映豊 賦此誌喜

衙道言経世故崇 更有恩栄及身後 一代真儒推谷子

後人誰不慕高風

千秋正学仰韓公

谷口藍田記恩碑

- 113 -

下一転語。 対照妙殊、 警余将 É 英

雄回首即漁翁。

所謂知所択。 尚友及顔子·相如、 一瓢、四壁、佳対。

名言。

羊裘不似渭浜熊 237 太公望厳子陵対軸 夢異一

月

中

絶世勲名千古節

漁翁

羽回首即:

英雄

竿風

歳晩書懐

238

不知門外歲嶙峋 閒註遺書友古人

寧図識字常招患 却悟多銭終累身

独有梅花兼我健

笑従籬角已伝春

飲只一瓢回也(顏回)

楽

家徒四壁馬生貧

時応人需、 註論語

探梅 課題

239

褪尽脂粉気、於是

旧

知高

士何

迈訪

脈清香隔水聞

愧我風流非故我

白頭零落又逢君

可与梅友。

240 芳野紀行

芳野紀行 (仮題)

鉄車.

如電過林隈

路入河州平野

開

欲問忠臣楠子跡

金剛山色入窓来

塔尾 御陵

休立花前説廃興

南朝恨事我何勝

春風吹白芳山

路

帯桜雲護御陵

温雅、

別占歩諸家

什、恍如再経其境。 蔵王堂下。今読是 登山、宿佐古屋、在 僕亦往年夏携妻子

貪看南朝天子花 夜帰 浪華

至。

餘情不尽、敦厚之

帰来直欲向人誇

多情也是芳山月

故送詞臣到浪華

図

- 114 -

僕、 亦欲云爾。

> 241 感時 事作

王 道 元 存義与仁

不

知殷鑒

在

西

隣

露宮

風

雪

独

都

TO

忍使後人哀後人

242 観挿 秧

得

豳

風

七

月

梅霖

Ħ. 一 月郭· 南 村 方曙田家農事 | 繁 細細秧歌相 和

起

斯声恐不到朱

243 碓 重

流幾 転

独

在

渓

口 水声 相 和 湿 頹 請 看 礻 断 漸 磨 業 総自

源泉 混 混 来

244 岐木 蘇曽 峡

中

大正八年九月十七日、 自名古屋経峡中、 二十日入京

出 曽 入峡天乍窄 郭 聞 未数里 仙 道勝 既覚山· 宛如入 奇絶海 玉 水殊 内無 壺 鉄車走-飛嶺直 欲償宿昔志 木 如 杪 筍 怪禽 蘇水 迂路 濶 入岐 両 辺 似 呼 湖 蘇

川寺。

山水奇

宿木曽福島、 本彊廬入峡看楓、

遊臨

再昨秋、

僕亦与松

実如是篇所言。

伏 飛 Ш 開 瞰 瀑天半落 臨 自 |成駅 川寺 鶏犬似: 鬼設誰 盤渦 跳 仙 敢 白 区 誣 珠 伝云 初知 板屋多戴 (浦島太郎) 石 莫乃欺 土人総著 虹影水中 衆 襦 愚 孤

去意到筆随、 乍而戦迹。 而田産、乍□

殊如 韻叙

峡

中

望只

、桑株

蚕繭 一窮矣

年年

海

外

勢如

虎負嵎

末路 生業依

雖

雄風

何凜乎

2挿議論、

忙

迹

乍而風俗、

乍 仙

乍而奇勝、

乍而

万壑喬木合

沈黒昼

似

晡

急湍

得

雨

激

群

峰

攫雲駆

- 115 -

識非凡。 有閒、又可以見才

行 馬泛及姥捨 到分水嶺 涓涓 山 容又清癯 南 北趨

都盧経過地 景勝豈欺吾 蒼茫川· 黄昏投山 海抜三千尺 中 島 館 市古独蜘蹰 奇寒欲粟膚 呼酒対篝 爐

剪燭記 |梗概 煙嵐毫端紆

本長寺改築落慶式、

喜而

賦此

〔寺也、

我祖長教君所創建也

慈 三界万霊帰妙法 雨 245 如酥注礎頭 重看堂宇半空浮 天四海仰餘流 簷牙高啄禽声喜 1子修前 棟尾遥騰瓦色稠 長使仏灯輝幾秋

最歓諸

緒

246 初冬

門卷今猶旧

蕭条常不開 寒厨唯一 味 薄酒或三杯

推窓山月来 聖賢多歳学 蹭蹬 愧 顏 口

憑机書灯細

到斯味。 非読書人、

不得参

哭以学上人、

和絶筆韻

247

不朽其人。

残 横沢 夜啼鵑頻吐血 Ш 中欲尽春 何 空堂落月独傷神 図此日哭斯人 臨風尤恨公亡後 詩如賈仏超千首 法界依誰 寿似釈尊躋八旬 復 簡

津

248 梅 雨 中作

黄梅天気促耕耘 従此秧歌喜可聞

雨

俄添三尺水

千峰

忽入万里雲

帰窠燕子諳洋語

上壁蝸牛写籀文

頸聯、

斬新妙。

豈有新詩資勧業 先生依旧只醺醺

颗 神聡、作聡官。 悉仁八。 頷

奇。 快作

能記徳、不負知己。

249 贈池 田 仁八翁二首

並引

在職、前後五十四年矣。今茲七十四、矍鑠如壮者。嘗聴藍田仁八翁、肥前鹿島人也。性仁而好義、弱冠為藩校弘文館僕。 先生講義、 館廃而為鹿島中学、 略通孔孟之教、

不作樵今不作漁 却為黌僕掃庭除 眼無丁字猶知道 耳有神聡能 誦 書

頗有古人之風。余与翁相識有年矣、

而負其厚誼特多矣。

賦 此 謝

今猶

又能記経史之語。

擊節時歎名教墜 伍童常喜世 塵疎 如君真個快男子 応是前身狂接輿

能 知祖考又知吾 (永布白繁雄) (入布白繁雄) 君是通家好丈夫 雪澗伐氷扶母 痛 翁嘗為我母採氷于深 Ш

郡 多年桂玉有 斎撃析進爺厨 誰 帯 幾度米塩逢子輸 翁事之頗恪勤 如此 温情何日忘 聊呈短句表忱偷

250 買屋

囊 中詩 酒銭 買廬半市半村間 楼居尤好看青巘 帰岫孤雲与我閒

251 早春 雑 興

紅花未含蕾 閒居宜拙者 黄蝶已尋芳 乗 、興即 徜徉 隙地: 濯 "足晩呼 移 春草 洒 陶 廃簾 然遊 防 晩 郷 霜

252 村居

窮巻無車轍 席 **門不** ·用関 置身牛 李外 養志呂厳間 (呂尚、 厳光]

253 閒居

移居屈指八年春 生何願秦陽富 楽聖自安原憲貧 已覚鬚眉半作銀 時有村童来問道 地近酒家宜買酔 門臨 灯前 一笑釈新民 流水足垂綸

猶憶垂髫嬉帳下 九宝山前松柏寰 何図短髮哭墦間 乾翁父子墓田閒 心香一瓣聊相奠 碑陰苔厚字空蝕 神籟吹煙涙自濽 華表雲寒鶴不還

(余、童時与令嗣保袈裟。君友善、

常蒙翁眷顧。

第五故及

択友託児其眼炯 曽自乾翁遊帝郷 一昨日茂、昨日茂今日茂、 眺天茂 、(おととひも、きのふも けふも、 ながめても、 強痾赴義此心剛、 更推爛漫桜花詠 鹿陽詞苑久荒涼(鹿島) 学方該博通和漢 阿如奴波花乃、佐久良奈利計あかぬははなの さくらなりけ 絶調長令人口香 書是沈遒逼晋唐

鞭笞恩義如師父 碑前稽首涙先傾 、翁嘗戲著賴嚇一奇談。書中記余事、屢向人称之云〕 竹馬親交似弟兄 也是通家累世情 回憶当年濫推奨 一角丘墳空暮色 白頭今日愧無名 千章墓木尽秋声

十四受漢学谷口藍田先生、十七遊東京、入福沢先生門、学洋文。二十四就北畠道龍師、修散士、名兼武、字士文、久布白氏、号黙堂、又老船。鹿島人。生文久壬戌、歿□□□□年。(二年) 255 黙堂散士墓碣銘

咄窮措大 攸読何書 弗行諸身 負師忝親 攸学何道 不孝之子 弗諸施人 文僅存。嗟乎、才疏而不修徳、志大而不由道、

仏典。而一無所成也。

中年帰家、数企事業、

又出入政社。然皆不得志。家道為衰、

晩年売

一生沈淪、

落于人後。豈天也哉。賛曰、

不忠之臣

- 119 -

附 録

『鹿島文学』の作者群像

高橋 研一

事蹟が不詳な人物は掲出してい

ない。

鹿島文学』に収められた漢詩文の作者について紹介する。ただ、

る。なお、「泰智寺祠堂記」は『鹿島文学』に収められた最も古い漢詩文である。 七二)に隠居し、宝永六年(一七〇九)に没する。『鹿島文学』には「泰智寺祠堂記」を収める。底本は泰智寺蔵 直孝(断橋実外)・直條が生まれる。彦千代没後、花山院定好女萬(祐徳院)を継室に迎える。寛文十二年(一六 三代藩主となる。承応元年(一六五二)名を直朝に改める。慶安二年(一六四九)彦千代(寿性院)と結婚し、 鹿島藩二代藩主鍋島正茂の養子となり、この頃は茂継と名乗る。寛永十九年勝茂が正茂と義絶すると、 鍋島直朝 の「永渓山旧記」である。寛文四年に作られた「泰智寺祠堂記」は作者が明記されていないが、「先妣高源君」と いう表現が見られることから、高源院(佐賀藩主鍋島勝茂の継室)の子であった鍋島直朝の作であることがわ 鹿島藩主。元和八年(一六二二)佐賀藩主鍋島勝茂の九男として生まれる。寛永十三年(一六三六) 鹿島藩の

千代と結婚するが、千代は貞享五年(一六八八)に没する(法名は宝善院)。妻の死を悼んだ直條は 嶺道雪に出会う。直朝に従い、江戸に登り、寛文十二年島原藩主松平忠房邸で、林鵞峰・鳳岡親子、人見竹洞 親しみ、 鍋島直條 .野節)、狛高庸と出会い、終生親しく交流する。同年鹿島藩の四代藩主となる。 人墓誌」を著す。 学問に励む。 鹿島藩主。 宝永二年(一七〇五)に没する。『鹿島文学』には漢文四篇と漢詩一首を収める。 承応四年(一六五五)鹿島藩三代藩主鍋島直朝の次男として生まれる。幼い頃より詩文に 兄直孝が病弱であったため、兄に代わり、 継嗣となる。寛文九年(一六六九)福源寺で梅 寛文十年蓮池藩主鍋島直澄の娘 「肥前 玉 能

鍋島子爵家が所蔵していた『楓園家塵』 漢詩文は 美庄誕生院記」は大正二年(一九一三)に鍋島直彬が誕生院に建てた石碑、 自筆巻子本が底本である。 「宝善院淑湛孺人墓誌」は普明寺に建つ宝善院墓石の碑文、「肥前州藤津郡円福山普明禅寺記」 (直條母) 自筆の「百人一首」に添えた直條自筆書 『楓園家塵』に収められている。しかし、明濱は鹿島鍋島家の周辺人物との関係が円滑ではなく、 漢詩は貞享三年(一六八六)に直條が侍臣並木氏に贈ったものである。 の閲覧を認められた痕跡がない。そのため、 (編纂時は法泉寺にあったが、 「先妣 [淑人寿性院大姉小伝] 現在は個人蔵となってい 底本となった漢詩は は普明寺蔵 直條の膨大な は寿 0) 直條 性院 園

ではない可能性が高い。

る。 を可能な限り収集して編纂されたと考えられる。そのため、『鹿島文学』の直彬漢詩も『絅堂遺稿』ではなく、 これらの石碑は現存している。漢詩文はすべて『絅堂遺稿』に収められている。『絅堂遺稿』の編纂過程は不明だ 建つ石碑、 四八)鹿島藩主となり、藩政改革に取り組む。 鍋島直彬 の周辺にあった直彬の漢詩文が底本であった可能性が高い。 鹿島の発展に尽くし、明君と慕われた。大正四年(一九一五)に没する。漢詩文集として『絅堂遺稿 を刊行する。 現存する直彬の書画・詩箋等の状況をふまえると、 『鹿島文学』には漢文三篇と漢詩文三首を収める。このうち、漢文の「八天社華表再造文」は八天神社中宮に 「妙法蓮華経全部一字一石之墳」「鍋島直朝公贈正四位之記」は普明寺に建つ石碑を底本としている。 鹿島藩主。 明治十二年には初代沖縄県令となる。 天保十四年 (一八四三) 明治維新後の明治五年(一八七二)アメリカ視察に赴き、『米政 鹿島藩十代藩主鍋島直永の三男として生まれる。 編纂当時 近世には藩主として、近代には鹿島鍋島子爵家当主とし (大正末年) に現存する掛け軸や詩箋、 嘉永元年 があ 明

福 源寺記」を寄せる。寛文十二年に没する。 した隠元隆琦のもとで黄檗僧となる。 黄檗僧。 万曆二十四年 (一五九六) 梅嶺道雪が福源寺を再興すると、寛文十年(一六七〇) 能書家として知られている。 浙江省で生まれる。 承応三年(一六五四)に来日する。 『鹿島文学』には「重建円通山福源寺記 に「重建円 同年に来

を収める。底本は福源寺蔵の「円通山滴水福源禅寺重興編」である

となると、 嗣法した。延宝元年(一六七三)に没する。『鹿島文学』には漢詩四首を収める。 承応二年(一六五三)に来日する。翌年、隠元に従い、再び来日する。寛文元年(一六六一)隠元が万福寺開 大眉性善 従って万福寺に入る。翌二年寺内に東林庵を構え、その法系は東林派と呼ばれる。 黄檗僧。 万暦四十四年(一六一六)福建省で生まれる。 隠元隆琦の来日に先立ち、 底本は刊本の 梅嶺道雪は大眉 情勢視察 『東林大眉和尚 のため 山

普明禅寺喜而寄以博粲」は普明寺蔵の巻子本、「題断橋和尚所著禅林口実混名集」は刊本の『禅林口実混名集』を 直 と、黄檗宗に帰依する。寛文十三年(一六七三)独照性円に嗣法した。鹿島藩四代藩主鍋島直條と親しく交流し、 |條の墓碑銘を記す。正徳三年(一七一三)に没する。 『鹿島文学』には漢文二篇を収める。 「偶閱鍋島備州太守 黄檗僧。寛永十三年(一六三六)近江国彦根に生まれる。承応三年(一六五四)隠元隆琦が来日する

学』には「禅林口実混名集序」を収める。底本は刊本の『禅林口実混名集』である。 源寺を退き、延宝元年(一六七三)大眉性善に嗣法した。享保二年(一七一七)伊勢の法泉寺で没する。 興を祝して、各地の黄檗僧から寄せられた詩偈をまとめた「円通山滴水福源禅寺重興編」を編む。寛文十年に福 ら梅嶺の法号を与えられる。寛文八年に鹿島藩三代藩主鍋島直朝の援助を受けて、福源寺を再興する。福源寺再 梅嶺道雪 黄檗僧。寛永十八年(一六四一)小城で生まれる。万福寺に登り、寛文三年(一六六三)即非如一か

きで、佐賀の高城寺に入る。寛文十一年 桂巌明幢 黄檗僧。寛永四年(一六二七)信濃国松本で生まれる。 (一六七一) 即非如一に嗣法した。 明暦三年(一六五七)佐賀藩主鍋島光茂の招 同年、 梅嶺道雪の跡を受けて、

年(一七一〇)に没する。『鹿島文学』には二ヶ所に分かれて収める。前者の漢詩文五十七点は普明寺が所蔵して 父直朝・弟直條の協力を得て、普明寺の創建を始めると、開山に招かれる。貞享二年(一六八五)普明寺を退き、 寺に入る。寛文十二年万福寺に登り、隠元隆琦から桂巌の法号を与えられる。延宝四年(一六七六) 人一首」に添えられたもので、編纂時には法泉寺が所蔵していた。 いた「普明桂巖禅師語録」が底本である(中川文庫本とは別本)。なお、直後に配された佐賀藩三代藩主鍋島綱茂 野の医福寺、 「桂岩禅師小伝」も「普明桂巌禅師語録」を底本としている。後者の漢詩一首は寿性院 のち佐賀の円珠寺に移る。元禄十六年(一七〇三)佐賀の大興寺を再興し、 (直條母) 開山となる。宝永七 自筆の

という詞書をもつ漢詩の底本は不明である。 とする。「本無種族釈為氏」から始まる七言律詩は刊本の に存在していたが、現在は確認できない。「寿性院円成実相大師分骨墖」は普明寺に建つ寿性院墓石の碑文を底本 寺を創建しはじめ、普明寺は鹿島鍋島家の菩提寺となる。元禄十年(一六九七)桂巌明幢から断橋の別号を賜う。 名を賜い、 源寺での梅嶺道雪との出会いをきっかけに、黄檗宗に傾倒する。翌九年福源寺に来住した桂巌明幢から実外の法 坊城大納言の娘と結婚するなど、藩主の継嗣と位置づけられる。 断橋実外 〇五)に著した「藤津郡鮒越天満宮」と宝永六年父直朝の米寿を祝い詠んだ「茲遇華頂高嶽老居士八十八尊誕 |西海道肥前州藤津郡永渓山泰智禅寺鐘銘並序」 は徳島大機が泰智寺で書写していることから、編纂時には泰智寺 徳五年 (一七一五) に没する。『禅林口実混名集』を著す。『鹿島文学』には漢文三篇と漢詩文二首を収める。 格峰を号とする。延宝四年(一六七六)福源寺で剃髪し、桂巌明幢に嗣法した。同年から居宅に普明 黄檗僧。承応元年(一六五二) 鹿島藩三代藩主鍋島直朝の長男として生まれる。寛文六年(一六六六) 『禅林口実混名集』から採られている。宝永二年(一七 しかし、病弱であったこともあり、寛文八年福

月岑実皎 貞享四年桂巌の跡を受けて、 黄檗僧。正保二年(一六四五)佐賀藩士の家に生まれる。貞享元年(一六八四) 普明寺二世となる。元禄十三年(一七○四)普明寺を退き、 福源寺に移る。元禄十 桂巌明幢に嗣法した。

保四年(一七一九)に没する。『鹿島文学』には正徳三年(一七一三) 六年四代藩主鍋島直條の請を受けて、再び普明寺に住す。宝永二年 画像偈」を収める。底本は福源寺蔵の月岑着賛肖像画である。 勝屋明濱の祖勝屋無参 (一七〇五) 普明寺の塔頭慶福院に退く。 (安玄) に与えた「題

年(一七〇九)に没する。『鹿島文学』には元禄十七年に著した 龍海実珠 黄檗僧。元禄五年(一六九二) 桂巌明幢に嗣法した。 「祐徳開山瑞顔大師行業記」を収める。 桂巖の跡を受けて、大興寺二世となる。宝永六 底本は祐

徳博物館蔵の自筆書である。

界輪実海 八景詩並引」は大機が明濱所持の書物を書写しており、 寺六世となる。寛保三年(一七四三)に没する。『鹿島文学』には「跋断橋和尚所著禅林口実混名集」と「大士山 八景詩并引」を収める。「跋断橋和尚所著禅林口実混名集」の底本は刊本の『禅林口実混名集』である。「大士山 士山八景詩並引」「鹿陽治内三十三観音霊跡之詩歌」を遺す。のち道号を蔵山と改め、元文元年(一七三六)普明 黄檗僧。元禄十一年(一六九八)嶺堂海山に嗣法した。普明寺の塔頭法泉寺に住す。詩文に優れ、「大 明濱所持本が底本であるが、明濱がどこから入手したの

かは不明である。

文と跋文である。底本は普明寺蔵の断橋和尚年譜である。 を著す。享保六年(一七二一)断橋和尚年譜を編纂する。 元徳大愚 山宗秀の推挙で、元禄十六年(一七〇三)大士山勝光寺(観音堂)二世となる。宝永五年(一七〇八)「大士山記」 黄檗僧。貞享元年(一六八四)頃、断橋実外が佐賀の葛谷に滞在していた折に出会い、出家する。 『鹿島文学』には漢文二篇を収める。 断橋和尚年譜の序

瑞雲悟芳 五六)仙台伊達家の菩提寺大年寺の住職に迎えられ、 黄檗僧。寛政十年(一七九八)に生まれる。 慧亮達雲に嗣法し、普明寺十六世となる。安政三年 のち本山万福寺三十四世となる。 明治二年(一八六九)

八

に没する。 『鹿島文学』には漢詩一首を収める。伝本がなく、明濱が入手した経緯を含めて不明である。

に贈られた漢詩であることから、明濱が大華から提供されて収めたと考えられる。 明寺十九世となる。明治三十七年(一九〇四)に没する。『鹿島文学』には漢詩一首を収める。 稲垣瓊林 黄檗僧。 天保八年(一八三七)下古枝に生まれる。普明寺の瑞雲悟芳に従い、 万福寺に登る。 勝屋明濱の兄大華

る。 て、 江戸に登り、林羅山に師事する。幕府の儒者となり、幕政にも深く関わる。漢詩文に優れ、林家をはじめ、多く の諸大名と交流する。寛文十二年(一六七二)江戸の松平忠房邸で、鍋島直條と初めて出会い、親しく交流する。 山縁起」を収める。竹洞自筆の原本は所在不明で、複数の伝本があるが、明濱がどれを底本としたかは不明であ 條は竹洞に三嶽神社の縁起執筆を依頼する。また天和二年(一六八二)朝鮮通信使が来日すると、竹洞を介し 写字官雪月堂に三嶽神社の扁額の染筆を依頼する。元禄九年(一六九六)に没する。『鹿島文学』には「三嶽 幕府の儒者・漢詩文人。『鹿島文学』においては鶴山野節。寛永十四年(一六三八)京都で生まれる。

林鳳岡 る。享保十七年(一七三二)に没する。『鹿島文学』には正徳元年(一七一一)に著した直條の墓碑銘である 朝散大夫肥前刺史藤公墓碑銘」を収める。底本は普明寺の直條墓域に建つ石碑である。 戸に生まれる。 幕府の儒者・漢詩文人。名は信篤、号は鳳岡・整宇。寛永二十一年(一六四五) 幕府の儒者として、幕政に深く関わる。元禄四年(一六九一)家塾が移転し、のち湯島聖堂とな 林鵞峰の次男として江

泊如上人 てる予定の興教大師碑の撰文を泊如に依頼する。 (住職) となる。元禄三年(一六九〇)覚鑁に興教大師の諡号が贈られると、 真言僧。名は運敞。慶長十九年(一六一四)大坂で生まれる。真言宗智山派総本山である智積院 泊如は元禄五年に「興教大師碑銘並序」を記す。 鍋島直條は覚鑁の古蹟誕生院に 元禄六年に の化

碑銘並序」が収められており、直彬自筆の「興教大師遺蹟再興録」が底本であると考えられる。 九一三)に著した「興教大師遺蹟再興録」を考拠書目としてあげている。『興教大師遺蹟再興録 没する。『鹿島文学』には「興教大師碑銘並序」を収める。 明濱は「直彬公伝」編纂時に、鍋島直彬が大正二年 |興教大師

になった原本を誕生院から提供されて底本としたと考えられる。 『鹿島文学』が先に完成していることから、『鹿嶋誕生院復興史』自体を底本としたのではなく、 首を収める。大正期の誕生院復興事業にあたり、智積院が所蔵する誕生院関係史料が誕生院に送られており、 翌年再興の願書を智山派 再興を志す。 百城律師 誕生院復興史』に収められている。『鹿嶋誕生院復興史』と『鹿島文学』を比較すると、 の中に『野草』と題する百城律師の漢詩文集があった。原本は存在していないが、昭和九年に刊行された『鹿嶋 真言僧。法印慶満。長崎大徳寺の住職で、文化十二年(一八一五)、覚鑁ゆかりの誕生院を訪れ、 佐賀藩・小 ・豊山派の両本山に提出する。弘化四年(一八四七)に没する。『鹿島文学』には漢詩四 ・城藩・鹿島藩の諸宗、 鹿島藩の藩校学館の教授相浦五平太・犬塚丈右衛門等と協議 自注までも同じである。 同書編纂のもと

に臥竜ヶ岡公園に建てられた歌碑である。なお、この漢詩は 譲館と表記された同時代史料は見つかっていない)。文化十四年(一八一七)に没する。漢詩文集として『精里集 は祐徳院 けると、教授に招かれる。 古賀精里 』がある。『鹿島文学』には「浜駅城趾」と題する七言律詩の漢詩一首を収める。底本は大正五年(一九一六) (現在の祐徳稲荷神社) 佐賀の儒者・漢詩文人。寛延三年(一七五〇)佐賀に生まれる。佐賀藩主鍋島治茂が藩校弘道館を設 寛政八年(一七九六)には幕府の昌平黌に招かれ、寛政の三博士に数えられ の神門銘を撰文し、また鹿島藩の藩校を徳譲館と命名したといわれる 『精里集抄』にも「登浜駅城趾」の題で収められて る。 (但し徳

洪晋城 佐賀の儒者・漢詩文人。 天明元年 (一七八一) 古賀精里の次男として生まれ、 洪家の養子となる。

三年(一八三二)に没する。 める。底本は 『晋城遺稿』である。 漢詩文集として明濱が編纂した『晋城遺稿』 がある。『鹿島文学』には漢詩四首を収

学』には「渡辺源大夫敬墓表」と漢詩一首を収める。「渡辺源大夫敬墓表」は天保十三年(一八四二)鹿島藩士渡 その途次にある鹿島を往来した。慶応三年(一八六七)に没する。漢詩文集として『珮川詩鈔』 道 草場佩川 鈔』にも「浜駅」 五言絶句で、底本は大正五年(一九一六)に臥竜ヶ岡公園に建てられた歌碑である。なお、この漢詩は 辺敬のために著した墓碑銘で、編纂時は泰智寺にあったが、現存していない。漢詩一首は「浜駅城趾」と題する 館、江戸の昌平黌で学ぶ。古賀精里・穀堂父子に師事する。 多久の儒者・漢詩文人。名は韡。天明七年(一七八七)多久で生まれる。 の題で収められている。 弘道館の教授のほか、 諫早家の好古館にも招かれ、 多久の東原庠舎、 | がある。 『鹿島文 佐賀の弘 堀 ĴΪΪ

西鼓岳 もしくはその写本を入手して底本としたと考えられる。 犬塚成章の求めに応じて記されたもので、『鼓岳遺稿』には収録されていない。明濱は犬塚家が所持していた原 収める。漢詩文四十三首は『鼓岳遺稿』を底本とする。「鹿島八勝」と題する漢詩群、安政三年の「日渉園 文集として『鼓岳遺稿』がある。『鹿島文学』には二ヶ所に分けて、漢文一篇(「日渉園記」)と漢詩文四十四 藩の藩校学館に招聘される。安政四年(一八五七)諫早から多久への帰路、多良岳山麓で遭難して没する。 「西鼓岳先生小伝」が収められている。 多久の儒者・漢詩文人。享和三年(一八〇三)多久で生まれる。草場佩川・古賀侗庵に学ぶ。 なお、『鹿島文学』には『鼓岳遺稿』を底本とする鶴田 のち鹿島 本

草場佩川に学ぶ。 [に入る。 江戸で羽倉簡堂・佐藤一斎・古賀侗庵・佐久間象山などに学んだ後、佐賀に帰り、 有田の儒者・漢詩文人。文政五年(一八二二) 慶応元年(一八六五)には長崎に移り、 有田で生まれる。天保十一年(一八四〇)日 フルベッキと交流する。 慶応四年鍋島直彬に謁し、 弘道館で武富圯南 0

田谷口先生全集』にも収められているが、底本は明濱の周辺に伝来していた藍田自筆の漢詩である可能性が高 を収める。 明治二年(一八六九)鹿島藩に招聘され、弘文館教授・権大参事となる。また明治九年には鹿島で藍田私塾を開 明治三十五年に没する。 漢文の「八天祠華表銘」は八天神社中宮の鳥居の銘文が底本であり、現存している。 漢詩文集として『藍田谷口先生全集』がある。『鹿島文学』には漢文一篇と漢詩 漢詩四

ある。明濱は正司が藍田と同じ咸宜園の出身であるため、採録したと記している。 (一八三一)浅浦を領する嬉野家の初代嬉野元可(直資)を寿いで著した碑文である。底本は元光寺に建つ石碑で 正司考棋 '佩川との交流もあった。安政四年(一八五七)に没する。『鹿島文学』には「元可神廟碑」を収める。天保二年 有田出身の学者。寛政五年(一七九三)有田に生まれる。『経済問答秘録』など多数の著作を遺し、

石橋潤 文学』にも用いたことがわかる。なお現在、 纂した「直彬公伝」の考拠書目に「石橋平蔵遺稿抄本」があることから、「直彬公伝」編纂時の収集史料を『 島藩主鍋島直彬の師範となる。嘉永五年に没する。『鹿島文学』には漢文二篇と漢詩文八首を収める。明濱が編 鹿島藩士石橋家の養子となり、鹿島藩の藩校学館の学頭にまでなる。嘉永元年(一八四八)には幼少であった鹿 鹿島藩士。通称は平蔵。享和三年(一八〇三)多久で生まれ、多久の東原庠舎、 原本の所在は不明である。 日田の咸宜園で学ぶ。

慶応元年(一八六五)に没する。『鹿島文学』には漢詩二首を収める。 **星野源兵衛** 鹿島藩士。号は蟻峰・耕雲。鹿島藩の藩校である学館の教授となり、九十七歳まで学頭を勤める。 「星野源兵衛遺詩若干篇」があることから、 なお現在、 原本の所在は不明である。 「直彬公伝」編纂時の収集史料を『鹿島文学』にも用いたことがわか 明濱が編纂した「直彬公伝」 一の考拠書目に

犬塚石舟 鹿島藩士。 名は綱領。 犬塚家の屋敷は浜の本陣となっており、 佐賀藩主が長崎警備で往来する際 の休

舟が勝屋明濱の祖先と思われる勝屋兼郷に贈った漢詩であることから、明濱が自分の家に伝来していた漢詩を底 屋敷を度々訪れ、 憩所であった。草場佩川・広瀬淡窓・佐藤一斎に学び、谷口藍田・西鼓岳と親しく交流する。特に鼓岳は石舟の 日渉園と名づける。その漢詩文が「日渉園記」である。『鹿島文学』には漢詩一首を収める。

本としたと考えられる。

学』には文化元年(一八〇四) 勝屋久諦 鹿島藩士。鹿島藩士犬塚豊敬の次男として生まれ、勝屋家の養子となる。勝屋明濱の祖父。『鹿島文 鍋島直條百回忌に詠んだ漢詩一首を収める。勝屋家に伝来していたものが底本と

は不明である。 彬公伝」に棣之進が父八沢仲安に送った書状を掲載している。このことから、明濱は「直彬公伝」と『鹿島文学』 藩して、新政府軍に従軍する。明治二年(一八六九)に没する。『鹿島文学』には漢詩七首を収める。 学び、江戸に登ると、水本成美に師事し、慶応元年(一八六五)には昌平黌に入る。戊辰戦争の際、 の編纂にあたり、 八沢家に伝来する諸史料を閲覧し、採録したと考えられる。なお現在、八沢家伝来史料の所在 明濱は 鹿島藩を脱

鹿島藩士。天保十年(一八三九)に生まれる。号は琴岳。佐賀で武富圯南・松本退蔵・草場船山

八沢棣之進

詩四首を収める。八沢棣之進と同じく、八沢家伝来の漢詩文を底本としたと考えられる。 物が京都権大属となっており、章四郎が安沢範蔵と名を改めたと考えられる。同年に没する。『鹿島文学』には漢 重 八沢章四郎 |野安繹に学ぶ。明治初年に京都権大属となったといわれる。明治三年(一八七〇)鹿島藩の安沢範蔵という人 鹿島藩士。弘化四年(一八四七)に生まれる。号は宕陽。大村の松林飯山、日田の咸宜園、

久布白虚堂 鹿島藩士。 名は繁雄。天保二年(一八三一)に生まれる。 鹿島藩の藩校弘文館の監察を経て、 幕末

は、 綴じられたものと考えられる。 文学』に虚堂の二部の詩稿が同時に収められているのは、編纂の各段階に応じて作られた草稿が誤って重複して これを書き直したものを明濱にわたし、明濱がこれに朱批を入れて大機に返却したものが①と見られる。 ると、前者が正確である。「送谷口藍田先生遊福陵」詩についても同様である。①が詩題に「遊福陵」の三字を有 ある。 を借りて書写していることから、底本は明濱が所持していた虚堂の漢詩文集であることがわかる。『鹿島文学』に 東松浦郡長となる。明治二十五年に没する。『鹿島文学』には漢詩文十五首を収める。 には鹿島藩の参政となる。 かは不明である。 永田暉明 するのに対し、 正は一箇所、墨筆による訂正は三箇所に止まり、 ていることに明らかなので、やはり①が正しいと考えられる。以上のことから、大機は下書きとして②を作成し、 「名護屋」(肥前名護屋のこと)、②は「名古屋」とあり、 虚堂の漢詩文十五首が同じ排列で二回掲出されている。①朱点が書き加えられたものと②朱点がないもので ②には墨筆で書き損じの訂正及び見せ消ちの箇所が、 (号は碧桐) ②はこれを欠いているが、「福陵」が「福岡」を指していることは「香椎宮」「伏敵門」が詠まれ が著した「久布白虚堂君墓碑銘」 明治七年(一八七四) なお、原本の所在は確認できていない。『鹿島文学』には大正二年(一九一三)に ①の方が訂正は少ない。また「赴名護屋途上」詩の題が、 の佐賀の乱で除族処分を受けるが、のちに赦され、 も収めるが、墓碑は確認できず、明濱がどこで採録した 東松浦郡長を務めたという虚堂の経歴や詩 九箇所と比較的多いのと比べて、①は朱筆による訂 大機が明濱から『虚堂詩稿 の内容から見 藤津郡長

ていた樸斎の漢詩文集である。 最所樸斎 『鹿島文学』には漢詩文八首を収める。大機が明濱から『樸斎詩稿』を借りて書写しており、底本は明濱が所持し 「繁雄の弟。 鹿島藩士。 明治維新後は、 名は新作。天保五年(一八三四) 弘文館の訓導を経て、初代古枝村村長となる。 谷口藍田の評も転記されており、 鹿島藩士久布白家に生まれ、最所家の養子となる。 原本の形態をうかがうことができる。 明治二十五年(一八九二)に没する。 久布

本の所在は確認できていない。

していた『黙堂遺稿』であるが、現在その所在は確認できない。なお、「黙堂散士墓碣銘」が『鹿島文学』の中で 文学』には漢詩二十五首と自撰の墓碑銘である「黙堂散士墓碣銘」を収める。漢詩と墓碑銘の底本は明濱が所持 学ぶ。大正十五年(一九二六)直彬の股肱の臣原忠順の伝記である『原応侯』を出版する。同年に没する。『鹿島 久布白黙堂 鹿島藩士。名は兼武。文久二年(一八六二)久布白繁雄の長男として生まれる。谷口藍田に漢学を

最も新しい漢詩文である。

- 131 -

編者紹介

中尾 友香梨 (なかお・ゆかり)

大名庭園―観頤荘』(佐賀学ブックレット、同センター、二〇一八年)など。 ンター、二〇一一年)、『文人大名鍋島直條の詩箋巻』(共著、同センター、二〇一四年)、『佐賀城下にあった幻の 佐賀大学全学教育機構准教授。関連編著に、『歴史に埋もれた名医―徳永雨卿』 (佐賀大学地域学歴史文化研究セ

高橋 研一(たかはし・けんいち)

提示—」(『鍋島報效会助成研究報告書』第六号、二〇一四年)、『肥前鹿島円福山普明禅寺誌』(井上敏幸・ 鹿島市民図書館学芸員。主要論著に、「鹿島鍋島家文書の基礎的研究―総合目録の作成による全容把握と課題の 伊香賀

隆との共編、佐賀大学地域学歴史文化研究センター、二〇一六年)など。

中尾 健一郎(なかお・けんいちろう)

における『梅花無尽蔵』」(『国語国文 研究と教育』第五十六号、熊本大学教育学部国文学会、二〇一八年)など。 りまく江戸文壇―林門と加藤勿斎を中心に」(『風絮』第十二号、日本詞曲学会、二〇一五年)、「『江戸名所図会』 熊本大学教育学部准教授。主要論著に、『古都洛陽と唐宋文人』(汲古書院、二〇一二年)、「近世前期の詞作をと

鹿島文学 ―甦る地域の文化遺産

平成三〇年(二〇一八)三月三〇日

編者

中尾友香梨

高橋

研一

中尾健一郎

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

発行

電話 〇九五二-二八-八三七八 〒八四〇-八五〇二 佐賀市本庄一番地

佐賀市久保泉町大字上和泉一八四八-二〇 〒八四九-〇九〇二 印刷

大同印刷株式会社

電話 〇九五二-七一-八五二〇代